たと思われる。

### 凹穴の意義

これまで、石うすの上石たる磨り石という観点を基準にして検討してきた。残る難問は、凹穴をどう理解するかである。『曽利』では、石うすの目にあたる機能を果たすのではないかと考えた。だが、実際に雑穀類の調製や製粉を行ってみると、凹穴にそのような機能は望めないことがわかった。凹穴じたい不必要なのである。このことは、はじめにみた通り、片面専用の磨り石の大部分には作業面に凹穴がみえないという実態に照らしても頷ける。すると、凹穴は磨り石の直接的な機能とは無縁な代物と断定せざるをえない。

由来、凹石の問題というのは、この凹穴の機能をいかに説明するかに終始してきたと言えよう[23]。しかし、凹穴自体には直接的な作用がないとしたら、事情は一変する。凹穴というのは、道具の直接的機能とは別な次元に属しているのである。別な次元とは人のこころであり、信仰である。

では、凹穴はどのような意味でつけられたのだろうか。先にみた磨り石の姿からしてもそれには、より沢山の穀粒、尽きることのない粉が出て来るようにとの豊穣祈願が込められているものと解釈するほかない。おそらく、そのときどきに凹穴をかつかつと敲いて磨り石をふるいたたせ、生産を促したのではあるまいか。

この種の凹穴は、中期後半の曽利期に至って石うすにもしるされるようになり、専らそれのみを集めた多凹石（蜂巣石）が発現する。坂上94，向原41の石うすがそれであり、多凹石としては唐渡宮114・163・244がある。ちなみに163に煤がつき、244が炉端に据えられていたことは暗示的である。いずれにしても、それらをも含めて考察しないことには、凹穴の性格を十分に究明することができない。

### 対をなす

ところで、もうひとつ気にかかるのは、これらがしばしば対をなすかのように並んで出土することである。4遺跡で9例がみられた。置かれた場所は、柱元、炉端、入口、墓壙などである。その組合わせを一通り眺めてみよう。

向原83・84は似たもの同士の粗形凹石と転石。同85・86は典型的な磨り石と地山礫凹石。唐渡宮156・161は磨り石と典型的な石鏡餅。同353・354は硬砂岩の凹石とまあまあな形の凹石。同370・371はともに磨り石に準ずる似た形態のもの。同372・373は地山礫凹石とまあまあな形の凹石で、大きさが同程度。居平1・2はともに火熱を受けた磨り石。同51・52は地山礫凹石と磨り石に準ずるもの。同53・54はともに磨り石。

こんな按配であるが、そこに何か共通点を見出すことは難しい。組合わせは様々である。それでも、これら対をなすもの同士が対等に扱われていると看做すことはできよう。とにかく、こうして対で並べ置くことにどんな意味があるのかということは、見過ごせない問題である。

これに関連して、唐渡宮27号址で対をなしていた花崗岩の繭形玉石のことも思い起こされる。

### ま と め

以上、ひとわたり検討してきたところを要約してみよう。一つに、磨り石・凹石類として幅広く総称しうる石器は三極ともいうべき形態組成をなしている。磨り石，粗形な凹石，石団子や石餅であって、相互の境界は連続的に移行する。二つに、これらの石器を単に機能的な道具としてのみとらえることはできない。そこには、穀物の調製および製粉に対する人の心や信仰が体現されている。すなわち、機能と信仰とが一体化して形をなしている。

後者については、まだ十分な理解が及ばない。しかしながら、石団子や石餅とは要するに団子や餅の形代にほかならない。すなわち粉の精霊が宿るところであろう。精霊の姿そのものとも言いうる。そうすると、磨り石にあらざる粗形な凹石もまた、穀類の穎果の精霊が宿るものと考えるほかない。この点で思い当たるのは、地山礫凹石がたいてい黄土色や褐色または酸化鉄の被膜をかむっていることである。若しかしてそれが、子実を包む殻に擬せられていたのではあるまいか。ともかく、いまはここまでである。

なお、三極組成のうち石団子と大形な石鏡餅は中期後半に至って発現したものらしい。『曽利』の所見では、中期前半には普通より二回りほど小さな小形凹石はあるが、さらに小さい団子石が出てくるのは曽利期に入ってからである。また、大形な御供え石も前半には見かけない。この点については、別に中期前半の遺跡で改めてみたいと思う。

## 7 石 う す

ふつう石皿と称されているものであるが、用途に従って石うすと呼んでいきたい。坂上89・94・112，向原41，唐渡宮115の5点が出土した。前期でも2点出土した（向原20・21）。向原41は特によく使い込まれており、掻き出し口を手前にして使ったことが看取される。また、火熱を受けたらしく煤色にくすんでおり、裏面には襞状の凹みが環をなしてつけられていた。それに、住居のしかるべき場所に伏せられていた。こうした点は先にみてきた磨り石の様態に呼応するかのようである。

石うすと磨り石とは一体をなす道具であり、どちらが欠けても仕事はできない。すると、磨り石同様、石うすにもこころや信仰が体現されていたはずである。そもそも、中期に普通な石うすの形態は何に由来するのだろうか。このような疑問は、昔はともかく、今日の考古学では一顧だにされない。だが俗に世人は、その形に女性の表徴を看て取る。まさしくその通りであろう。

かつて鳥居龍藏は、八ヶ岳西麓発見の長方形石皿で裏面に石棒の形が浮彫されたものをとりあげ、紅頭嶼のヤミ族の火きり臼と火きり杵の呼び方に照らして、「即ち石皿は女性であって、之に石棒の男性を配したものであらう。斯く考えて来ると、石皿の或るものは或は当時 Sex

として見てゐたものでは無からうか。」と述べている（『諏訪史』第一巻　176ページ）。

近年、このことを証明する特異な石うすの出土状態が穴場（あなば）遺跡で発掘された。井戸尻期の18号住居址北東隅において、よく使い込まれて深くなった石皿が掻き出し口を天にむけ直立して固定され、30cmの距離をおいて陽石たる石棒がこれを目差す如く据えられていた。石棒を銜えるようにして香炉形土器が密着し、そこからほんの少し離れたところに石製の碗と石鹸形すり石とがあった。そして、これら一連の遺物を含むように炭の層が分布していた。調査者は、或る儀式の後に、解体した上屋材をかぶせて火を放ち、土を埋め戻したものと考えている。対峙し合う石棒と石皿は生殖行為を象徴する、としている[24]。詳細は報告書に譲るとして、希有な事例といわねばならない。

つぎに『曽利』でもふれたことであるが、石うすは完形のままで残されている場合より壊された状態で出土する方が断然多い。これについて平出一治氏は、土偶と同じように、石皿を砕くことによって穀物の豊作を祈る祭祀が行われた、と考察している[25]。樋口誠司もハイヌヴェレ神話を引いて同様のことを考えている[26]。これまたその通りであろう。石うすが割られるのは、自身が女性を体現しているからにほかならない。このことに関連してちょっと気になるのは、よく使い込まれて薄くなった石鹸形すり石が真っ二つに割られている場合がみられることである。唐渡宮112や同333などの例であり、曽利遺跡でも３例ほどあった。

さて、石うすの形態が女性だとなると、かき出し口を手前にしての調製や製粉の作業は、疑いもなく性的な動作に譬えられる。自ずと、すり石は男性に擬せられよう。あるいは、石うすの子ともみられよう。そこから装い新たに穀物の子実が生まれ、白や黄の粉が湧き出ずるのである。それを得ることこそが、農耕の最終目的である。そのような観念のもとに石うすの形があり、様々な形態の磨り石や凹石あるいは石団子や石餅が存するのだと考えられる。

こうした形態の石うすは、早期初頭の井草・夏島文化に初現する。伴出する磨り石には、凹穴がついている。つまり凹石でもある。紛れもなく、磨り石の凹穴は、女性を写した石うすとともに始まったようだ。そこに凹穴の謎を解く原点がある。

ところで、古今東西の民族事例からみても、石うすを碾くのは女や娘・子供の仕事である。当時も同様であったに相違ない。樋口誠司は住居址にのこされた完形石うすの位置を調べ、その作業状況や女の場について考察している[27]。

縄文時代中期～後期に耨耕（じょくこう）農業を想定する立場から積極的に石皿をとりあげ、ヒエをすりつぶしたと推定したのは澄田正一氏であった[28]。十年来われわれも、石うすとすり石を穀類の調製・製粉具として理解してきた。手のひら一杯分くらいの穀物を石うすに広げ、磨り石で軽い円運動を行うと子実を包む殻は難なくとれる。それを転がすときの低い音を伴った感触は、むずがゆく、ぞくぞくとして何ともいえない。粟・黍・稗・高粱・米・麦・蕎麦等なんでも籾すりができる。引き続いて粉を碾くには、殻を吹き飛ばしてから力を入れて行う。子実や粉は小さな

手帚でかき集める。

ちなみに、石うすを作るには、形の好い安山岩の扁平円礫を見つけてくる。少々は硬くとも、輝緑凝灰岩の手頃な石槌で三日も敲けば出来上がる。気長にやることである。

## 8 礫石器

柱状もしくは棒状をした硬砂岩などの手頃な礫を、そのまま用いた石器である。全部で69点が出土している。石質は、硬砂岩が断然多くて39例57%を占め、これに準ずるものとして花崗質砂岩やスレートほかが13例ある。次いで輝緑岩が8例12%、輝石安山岩が同じく9例13%となっている[29]。石質により性状の差はあれ、総じて断面が長方形ないし平行四辺形、または方形、あるいは台形や三角形をした柱状、棒切れ状の礫であることが共通する。

使用痕跡のあり方は、石質の別によって各々の傾向が認められる。輝石安山岩のそれには、打痕のようなものがあまり見られない。輝緑岩のそれは普通、細かなあばた状の打痕ないしは浅い打痕凹みを伴う。硬砂岩類は、面上の小打痕や打痕凹み、先端部の敲打痕や欠け傷もしくは打欠け、稜にみられる敲打痕や欠け傷、面から稜に及ぶ膚荒れ等さまざまである。ただし膚荒れについては、これを積極的に使用痕としてみなすわけにゆかない。この種の礫を求めて釜無の河原を歩いてみると、意に反して出土品のような手頃で形の好い石がほとんど見当たらないことが先ず訝られる。そして何とか見つけた硬砂岩の礫には、遺物と同様な両面から稜にかけての膚荒れがしばしばみられる。また稜や先端には、石と石がぶつかり合ってついた敲打痕のような痕が散見されたりする。だから、稜や先端の軽微な打痕も直ちに使用痕とするわけにはゆかない。

さて、肝心なこの種礫石器の機能と用途であるが、形態上の特徴と打痕等の使用痕からして、次の四通りが考えられよう。

1 **クルミ割りなどに使ったとみられるもの** これは面上に細かなあばた状打痕や浅い打痕凹みを有すものであり、20例ほどある。坂上の36・68・93・98・99，向原の60・73，唐渡宮の17・41・73・75・357，居平の44などいずれも打痕や打痕凹みの位置が真中よりは端に偏っている。それも、礫面の幅が広い方に偏っている。一端側を握ってクルミやハシバミあるいはカヤの実などを割るに使ったと考えれば、これらのことは説明できる。

2 **先端を使ったもの** 先端部に敲打潰れや打痕、または欠け傷や打欠けがみられる類いであり、坂上22・65・67・113，向原24，唐渡宮165・194・343などが挙げられる。坂上22・65・67は杵状の使い方が考えられるが、同113は敲製用石槌と同様な敲打減りがみられた。唐渡宮の3例はどれも小型である。

3 **稜を使ったもの** 稜に敲打潰れや打痕または欠け傷がみられる。坂上22・36・124，唐渡宮296，居平25・56・98などである。ワラビやクズなど根茎類を叩き潰したりするのに適す

ように思われる。

**4　押圧に用いたと考えられるもの**　平坦な礫面を有し、さしたる使用痕が認められない仲間である。礫面の膚荒れが使用の結果であれば、積極的に押圧具として推定できようが、単純にそうはゆかないことは先に述べた通りである。坂上20・64・66・90～93・123・141，向原11・12・71・90・100・136，唐渡宮109・295・297・352，居平7などが挙げられる。『曽利』では、これらを押麦を作るのに用いた加工具と考えた。押麦ならずとも、救荒植物を想定してもいいだろう。

次いで、一般的でない特徴をもつ例を一瞥しておこう。一つは歯牙が噛んだような感じの打痕を有すもので、向原72・73・94，唐渡宮296の4点がある。もう一つは、すんなりとした回転痕状の凹みをもつ坂上125である。これは同じ硬砂岩礫の凹石である唐渡宮353と較べれば、凹石の範疇に入れるべきことがしられる。

とにかく、一通り眺めてきたところを要するに、全体としてこれら礫石器は、叩き割る、搗き砕く、叩き潰す、押し潰すといった機能なり用途をもつものと判断される。それは多分に、採集した木の実や根茎類の加工具としての性格が濃い。この種の礫石器は一般に叩き石と称されているが、そうした性格に照らして妥当な呼び方であることが改めて追認される。

そこで注意されるのは、これらの中には身の半ばもしくは⅓ほどのところで折れているものが10例余あることである。礫の性状もさることながら、使い方に因るところが大きいと察せられる。なおまた、坂上91と唐渡宮74には何か灰汁(あく)とか渋のような土色のものの付着がみられた。曽利遺跡でも2例ほど認められた。対象物の灰汁や渋とみるのが無難なように思われる。

ところで、当然にもここで問題となるのは台石の存否である。台石としては唐渡宮196が挙げられる。大形で扁平な輝緑岩であり、中央には打痕が集中している。叩き石の相棒たる台石として申し分ないものである。それが故意に半割されていたのは、石うすの場合と共通する意識が働いているようである。他には、坂上4号址に置かれていた安山岩の方板石がそれと目される。同3号址に残されていた安山岩の厚めな平石もこれに準ずる。また、同2号址床上の配石中の輝緑岩ないし輝緑玢岩の平たい河原石も台石と考えられないこともない。しかしこの程度であって、叩き石に見合う台石となるような石はなかなか見出し難いのが実情である。或いは木製の樋(とい)のようなものを想定すべきかもしれない。だが、それではまた叩き石の打痕の解釈が難しくなろう。

ひるがえって、この種の叩き石について橋口尚武氏は、奥多摩・秩父地方に伝えられてきた栃の実の種皮剝ぎに用いる敲石とその台石の民俗例を紹介し、双方を対照した。[30] 川崎市西菅遺跡の報告書においても同様な視点での考察がなされ、台石が積極的にとりあげられている。[31]

『曽利』でもふれたように、硬砂岩礫を主体としたこの種の礫石器は、曽利II期に至って出現する器種である。中期前半にはみられず、中期の後半を特徴づける石器なのである。採集し

た木の実や根茎類の加工具としてとらえるならば、これには中期前半とはだいぶ異なった経済事情が反映されているものとみなければならないだろう。中期半ば以降の気候の湿潤冷涼化ということを考慮すれば、それも理解しにくいことではない。いずれにしても、これら叩き石の用途を確定するには実践的な検証が必要である。

## 9 石　斧

石斧の類は合わせて14点出土した。8点が乳棒状石斧、4点が定角石斧、2点（坂上59，唐渡宮316）が細身な石鑿である。定角式のうち坂上60は、乳棒状石斧と同様に着柄した斧であることが疑いない。しかし向原13は鋤（ちょうな）だと思われ、小形で片刃の唐渡宮258は鑿と目される。石質は総じて輝緑凝灰岩が多く、輝岩がこれに次ぐ。

乳棒状石斧において常々いぶかしく思われるのは、腹面にしるされた二次的な敲打痕や刃潰しである。前者は居平90に、後者は同89において典型的になされていた。同55は両方を合わせもち、刃潰しに先立って刃部が殺がれている。坂上46も両方を合わせもち、腰から基部にかけての両側も細かく敲き減らされていた。同様な敲打痕は採集品の唐渡宮391にみられる。他方、坂上115は基部の破片が石槌として転用されたらしく、同100もそのように見なし得る。採集品の唐渡宮385は石槌に転用したものの典型例である。

これについて『曽利』では、斧としての使命が終わったときにその石斧を作る法と同様な敲打を施して新しい石斧の再生を祈ったのでは、と解釈した。居平13号址に遺されていた二本の石斧89と90の様態には、単なる道具を超えた石斧に対する意識というものがよく反映されている。刃潰しとか腹面に加える敲打というのは、なるほど斧を物送りするときの礼にちがいないという思いを深くする。

ところで、そもそも伐採は男子の仕事であり、その道具である斧が男子に属すことは異論がないだろう。それは、石うすを碾くのが女子の仕事であり、石うすが女子に帰属することに対比しうる。してみると、ここで次の点に気付く。すなわち、役目を終えた磨り石の側面が敲打変形されることと石斧に加えられる敲打とは通ずるところがある。また、石斧の腹面にみられる打痕の様態は磨り石の凹みに似通っていることである。この点で思い出されるのは、居平12号址の入口床上に並べ置かれていた石斧55と磨り石50である。それは陰陽対をなすごとく思われたが、そうではなくて、変形された石斧が凹石に見立てられていたのではなかったか。少なくも両者が同位に扱われていたことは間違いない。こうした共通性をどう理解すべきか、むずかしい問題である。ただ次のように考えことはできる。つまり、石うすの形態じたいが女性を表し、磨り石が男性に擬せられるように、乳棒状と称するあの形は男性を象徴していたのではないだろうか、と。

ともかく、問題のような敲打痕は中期の乳棒状石斧に普遍的であって、定角石斧にはあまり

見掛けないものである。[32] いっぽう腹面に加えられた同様な敲打痕は、弥生文化期の太型蛤刃石斧にあってごく一般的に認められる。刃潰しも珍しくない。それに、破損品もしばしば石槌に転用されている。[33] このような符合は、乳棒状石斧と太型蛤刃石斧の系統関係を考えるうえで見過ごしにできない。

### 10　剝片石器

黒曜石の不定形な剝片を用いたものであり、合計86点を数える。総じて縁辺に細かな刃こぼれ痕があり、それもたいてい片側に剝離していることが注意される。主として木や竹、あるいは皮などを相手にした切削具と考えられる。柄を着けたかどうかは何ともいえないが、葛や藤などの皮を巻いて持っただろうことは十分に考えられる。それにしても、このように小さく不安定な剝片でどれほどの仕事ができたのか、疑わざるをえない。これら以外に利器たるものの無いことを思えばなおさらである。

### 11　石　錐

向原38，唐渡宮184・252など6点ばかり出土した。いずれも黒曜石製である。尖端に摩滅の認められる側がある。

### 12　石　鏃

27点ほどである。やはり黒曜石製。そのうち6点は未製品と目されるものである。

### 13　礫　石　錘

坂上63・143，向原75・76の4点が出土。スレートや硬砂岩の小石に手を加えたもので、前二個は打欠き、後二個は擦切りによって糸の掛かりを設けている。漁網用の錘であろう。

### 結　び

以上、中期後半の石器について耕作具、中耕除草具、収穫具、調製・製粉具、採集植物加工具、工具、狩猟具、漁具と、順を追って考察してきた。ほかにもとりあげるべき二、三点の器種はあれ、概ねこうした石器群が曽利文化を支えた生産用具の実態である。

先にわれわれは、曽利遺跡出土の石器の検討を通して中期の石器組成を体系的に見通すことができた。それは、われわれ自身の新石器革命であった。それから十年、決して順調な歩みとはいえないが、ここに中期後半の新しい資料を積み重ね、多少なりとも考察を広げることができた。しかし、学界の大勢は十年一日のごとく採集論を固持しつづけ、科学と客観の名の下に見当外れな分析主義に明け暮れている。あるいは、無意味な計測に労を費す一方で実測図に非

ざる白地図まがいの手抜き画すら横行しているのが偽りなき現状である。ひっきょう、鎌は鎌だと思わなければついにただの石器に終わってしまうのである。

余人のことはともかく、われわれの次の相手はまた堆く積まれている中期前半の石器である。再び十年後、それによっていっそう基礎を広げ、認識を深めて行きたいと思う。

（小林　公明）

注

（1）『曽利』における打製石器の石質のうち輝緑岩としてあるものは、すべて硬砂岩の誤りである。岩石鑑定の初歩的な間違いであったので、訂正しておきたい。なお、粘板岩とスレートは同義語であるが、片状が発達して薄く剝げ光沢質のものをスレートと呼び、そうでないものを粘板岩と呼び分けた。

（2）この技法について、『恒川遺跡群』（飯田市教育委員会　1986）のなかで桜井弘人氏も具体的に言及している。

（3）『曽利』で着柄部を風呂と称したのは適切でない。

（4）『えとのす』2　1975　口絵写真

（5）鹿野忠雄『東南亜細亜民族学先史学研究』第一巻　矢島書房　昭21　322～323ページ

（6）エミール・ヴェルト著　蔵内芳彦・飯沼二郎訳『農業文化の起源』　岩波書店　昭43　189～190ページ

（7）もとより、これらの石器の系譜は早・前期に遡って求められる。その辺については、五味一郎「縄文時代早・前期の石匙―その農具としての定立―」(信濃　32－7　昭55)において考察されている。

（8）小林公明「後期縄文文化における沿北太平洋的要素とメソアメリカ的要素」（どるめん29号　1981）で、いわゆる分銅形の石鍬の着柄法についてこの方式を考察した。
　なお、ここで巻き挟み式と言うのは、鳥居龍蔵が『諏訪史』第一巻で分銅形について述べ、つとにこの着柄法を看破したときの表現に習った。

（9）金関丈夫・国分直一「台湾先史時代靴形石器考」『台湾考古誌』所収　法政大学出版局　1979

（10）石庖丁の使い方は、小林公明「石庖丁の収穫技術」（信濃30―1　昭53）で検討した。また注11文献で再検討した。

（11）小林公明「爪鎌の二つの側面」　山麓考古15　1982

（12）石毛直道「日本稲作の系譜」　史林51―5・6　1968
　全栄来「日本稲作文化の伝播経路」　えとのす30　1986

（13）金元龍著　西谷正訳『韓国考古学概説』（六興出版　1984）などに図がみえる。

（14）これについては注10文献で検討した。
　抉りに指をかけるという見方は、松島透「飯田地方における弥生時代打製石器」（『日本考古学の諸問題』所収　考古学研究会　1964）に発する。

（15）近く、桜井氏によってまとめられる予定である。前段の持ち方に関しては、注２文献で述べられている。

（16）高木正文「九州縄文時代の収穫用石器」『古文化論攷』所収　鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会　昭55

(17)　他の遺跡の出土品中には、石鉈と断定しうる典型的なものが存在する。

(18)　藤田等「大陸系石器―とくに磨製石鎌について―」『日本考古学の諸問題』所収　考古学研究会　1964

(19)　ただし、高木氏が紹介された石鎌の中には、収穫用の鎌というより除草用の草取鎌ではないかと思われるものがある。靴形石器のようなその形態が気にかかる。

(20)　ちなみに、早・前期の石鎌については注７文献で考察されている。

(21)　小林康男氏は、『小段遺跡』（塩尻市教育委員会　1979）において同様な観察をしている。

(22)　藤森栄一・武藤雄六「信濃境曽利遺跡調査報告」長野県考古学会誌　創刊号　1964
酒井幸則「伴野原遺跡パン状炭化物」　どるめん13　昭52

(23)　凹石をめぐる諸説や学史に関しては、長崎元広「凹石不可解論」（さがみの５・６　昭45）で随筆風に紹介されたことがある。

(24)　『穴場　Ⅰ』　諏訪市教育委員会　1983

(25)　平出一治「こわされた石皿」　山麓考古９　1978

(26)　樋口誠司「赤色顔料の塗られた石皿」　山麓考古14　1981

(27)　樋口誠司「住居址内出土の石皿について」　山麓考古16　1984

(28)　澄田正一「濃飛山地に出土する石皿の考古学的研究」『名古屋大学文学部十周年記念論集』所収　昭34

(29)　『曽利』では安山岩の方柱状石器４例を挽石としているが、礫石器に訂正しておきたい。

(30)　橋口尚武「民俗資料からみた敲石の再検討」　どるめん12　昭52

(31)　高津図書館友の会郷土史研究部『川崎市多摩区西菅遺跡第三地点発掘調査報告』1976

(32)　ただし、中期の定角石斧は北陸地方において頗る優勢であり、たとえば石川県上山田貝塚からは多数の定角石斧が出土しているが、凹状打痕のしるされた例がいくつか認められる。（『上山田貝塚』　宇ノ気町教育委員会・石川考古学研究会　昭54）

(33)　近年の報告では池上遺跡の例などがあげられる。（『池上遺跡』石器編　大阪文化財センター）

# 第二節　生活用具としての土器の組成と用途

## はじめに

ここ十年来、中期後半の曽利式土器をめぐって活発な検討がなされ、成果が相ついで発表されてきた。[1] それは、型式編年を基調として器種組成、系統、分布、地域性、隣接する他の土器型式との関係といった問題に及んでいる。近年の大規模な発掘による資料の集積と相俟って、こんにち、曽利式土器の実態に関しては或る程度の認識点に達していると言えよう。しかし、そのことは、せいぜい遺物として残された土器の表面現象を把握するにとどまるものでしかない。それらを使っていた同時代の人々の生活文化の中身にはなかなか手が届かない。そこのところに一歩なりとも踏み込んでゆきたい。これが、我われの主要な関心事である。

それには、型式編年という観点を離れて別な次元に立ち、生活用具としての諸器種の用途や性格の究明に努めることであろう。だが、この当たり前なことがなかなか難しい。難題ではあるが、多少の手掛かりがなくはない。それ故ここでは二、三の器種についてやや詳しく検討しながら、この方面の問題点を考えてみたいと思う。なお、今回報告した四遺跡の資料で一通りの事が足りるというわけにはゆかないので、必要なものは他の遺跡から借用して補うことにしたい。

## 一　器種の構成

曽利文化における土器群をとらえてゆこうとするとき、指標となるのは曽利II式の様相である。新しい器種が出現し、種類も豊富にして各々の特徴も鮮明で、確固とした組合わせを示している。いったいこの時期は、炉の大型化や埋甕習俗の発現など住生活の面でも大きな画期をなし、石器では叩き石のようなものが顕現しているのである。そこでまず、曽利II期を基準として主要な器種のあり方を一通り眺めてみるとしよう。この十年来、発表された論考のうちこの方面を最も積極的に取り上げたのは、長崎元広氏らの『中部高地縄文土器集成』であり、大要が述べられている。

### 1　X字状把手付大深鉢

群を抜いて大形な深鉢である。大きく開口する素文口縁と頸部をめぐるX字状の把手を特徴とする。坂上18・21・46，向原12・19・29・31，唐渡宮32・38，同57，居平35などで、坂上の3例や向原19・29にみる通り、煮炊きに使われた器である。曽利II期に確立し、V期までつ

づく。曽利文化を最も特徴づける器種だといえる。これの系統と性格については後で考察してみたい。

### 2　II 期の深鉢

煮炊き用の器であるが、数種の形態がある。

**素文口縁深鉢**　口縁部と胴部が意識的に区別された素文口縁の深鉢である。I期において深鉢類の圧倒的多数を占め、同期を特徴づけている。II期には著しく減り、III期にはみられない。唐渡宮1～4・7・8，坂上4～6・32・42，向原8・28，唐渡宮30・31，36・37など。その系譜は井戸尻III式にたどられる一方、素文口縁の形制は井戸尻I式さらには藤内II式の素文口縁屈折底深鉢に発している。中期前半の伝統をひく深鉢である。

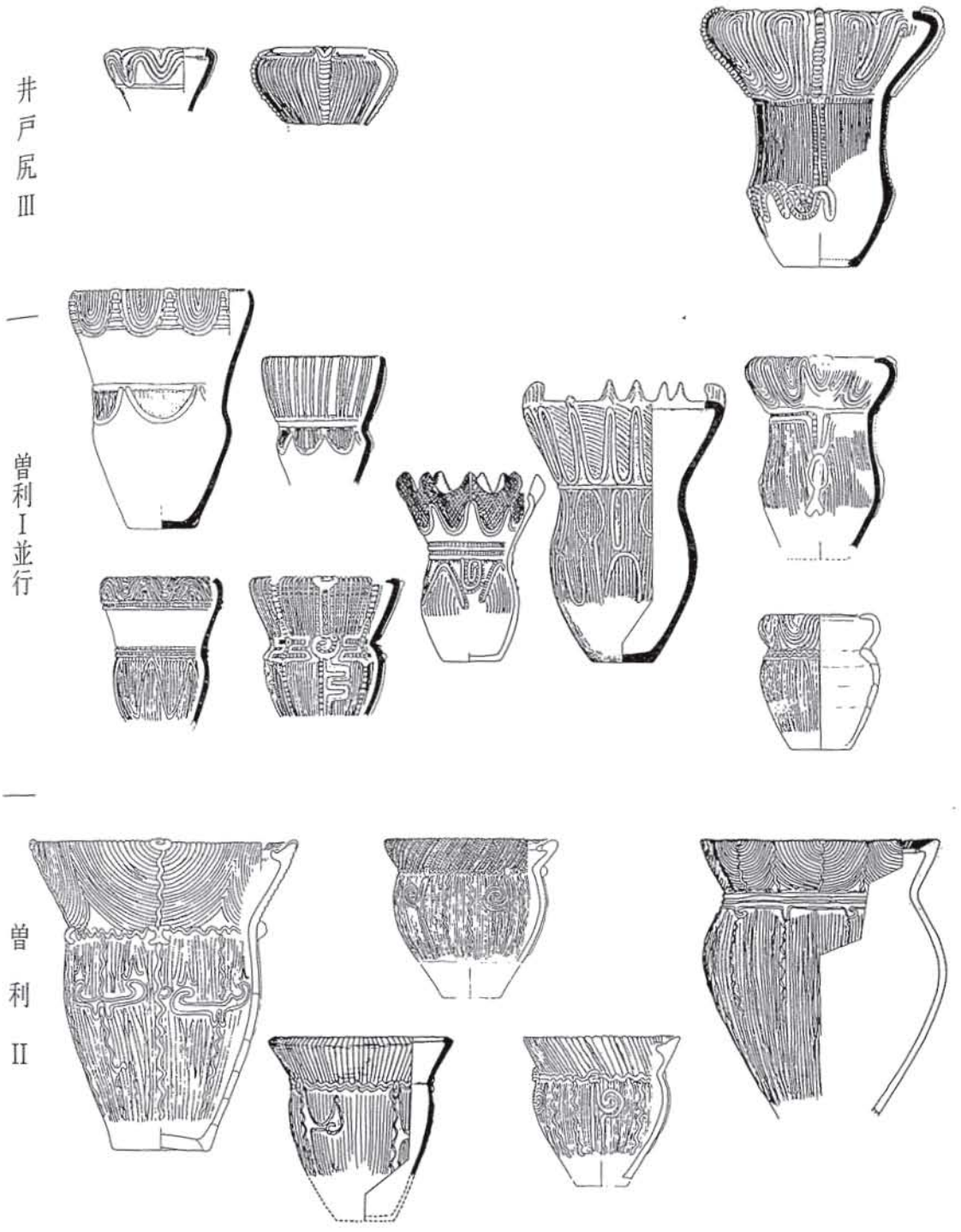
**重弧文・籠目文深鉢**　前者と同じく口縁と胴が区別され、口縁部に重弧または籠目文がつけられた深鉢であり、口唇が内屈する。II式に確立して流行った形態で、該期を特徴づけている。坂上1～3・25・43，向原2・9・16・20，唐渡宮25～27など。籠目状の施文には三通りあって、びくの縁のような斜走竹管文のものがIII期に残存する。

この器種の母体となるものはI期の八ヶ岳西麓から諏訪湖盆・上伊那・松本平方面にみられ、その形式が三通りほどある。一つは中期前半からの伝統を引く、いわゆる櫛形文土器。二つは口唇に多数の角状突起を有す深鉢で、I式並行期に特徴的である。三つは口縁が内湾するもので、曽利の素文口縁深鉢に相当する器形をそなえ、井戸尻III期にまで遡る。これらの器形は互いに類縁して大差がなく、いずれも口縁に細い粘土紐をかけた褶曲文や籠目状の文様をつけている。

ところで櫛形文土器とは、腰部が著しく括れた独特な器形からして蒸器だと考えられる器種である。だが、先にあげた地域のものは総じて腰が高く、括れが弱い。疑いもなくその特徴を受け継ぐのが、曽利I式並行期の前二者であり、後一者も類縁する。そうすると、問題の器種は、元をたどれば井戸尻期の蒸器の系統に出自することが知られる。このような系統関係をいちはやく察知した武藤雄六は、これを蒸器の最期の姿と位置づけた。[2]

さて、口縁の文様や口唇の形制が蒸器の系統を引くとしても、その器形はもはや蒸器のものではない。器形や胴部の文様は先にみた素文口縁深鉢と大差がない。事実、お焦げの付き方も他の深鉢と変わらない。とすれば、この器種の存在意義あるいは性格といったものはどこにあるのだろうか。このことを摑むためには、やはり曽利I式並行期の三つの深鉢に立ち返り、各々の用途・性格を明らかにすることが必要となる。

ともかく、II期の重弧文・籠目文深鉢の直接の祖先が在地の土器に非ずして、諏訪湖盆から伊那・松本平方面にあることは明らかである。その点でまたいっそう興味をそそるのは、III期に残存する籠目文深鉢である。口縁に斜走竹管文が引かれたそれらは、頸部直下にも同様な肩部文様帯を有することが注意される。II期にはみられなかった新しい要素である。それがどこ




第188図　重弧文・籠目文深鉢の出自系統　(1/9)

左列より　井戸尻・居沢尾根・同・向原，曽利・居沢尾根・同・井戸尻，曽利・向原，立沢・唐渡宮，居沢尾根・同・茅野和田・曽利

から来るのかというと、やはり彼の方面のⅠ～Ⅱ期に特色的なユウガオ形の深鉢（例えば坂上10など）以外には見当たらない。

**縄文地深鉢**　口縁部と胴部が特に区別されない。全面縄文地の深鉢である。口縁に簡単な横帯文が施される作もかなりあって、口縁上部が直立したものは加曽利E系の深鉢に接近する。Ⅰ期にはみられず、Ⅱ期にすこぶる多く、Ⅲ期に残存する。坂上7・8・15～17・23・44，向原1・6・7・10・17・21・22・32・33，唐渡宮9～13・18などである。

**加曽利E系深鉢**　前者と同様な深鉢であるが、口縁上部が直立して横帯文がめぐり、胴部に並行沈線が垂下するなど、関東地方の加曽利E式に近い作風をもつ類いである。Ⅱ期に現れ、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ期に認められるが、Ⅲ期以降は少ない。坂上19・22・34，向原18，唐渡宮14～16，同40・88・94，居平27など。

**唐草文系深鉢**　諏訪湖盆・上伊那・松本平方面のいわゆる唐草文系の型式であり、ほとんど移入品とみてよい。その方面からの土器の流入はⅠ期から始まり、Ⅱ期には違和感をもって目立つが、Ⅲ・Ⅳ期には影がうすい。坂上9・10・26・27・33，向原11・27，唐渡宮19～24，同63・81など。

### 3　台付鉢

坂上13，向原3など、わりと高い圏足の付いた鉢である。概して大きくない。煤やお焦げの付着がみられるから、煮炊きに用いたことは確かである。すなわち、煮炊きしてそのまま神前に供える土器。しかし深鉢一般と異なるだけあって数が少ない。完形品もそう多くはない。Ⅰ期とⅡ期は素文口縁の鉢であるが、重弧文の口縁もわずか見出される。Ⅲ期以降は、いまのところ全形を知りうる例が乏しいので形態不詳だが、Ⅴ期までつづいている。

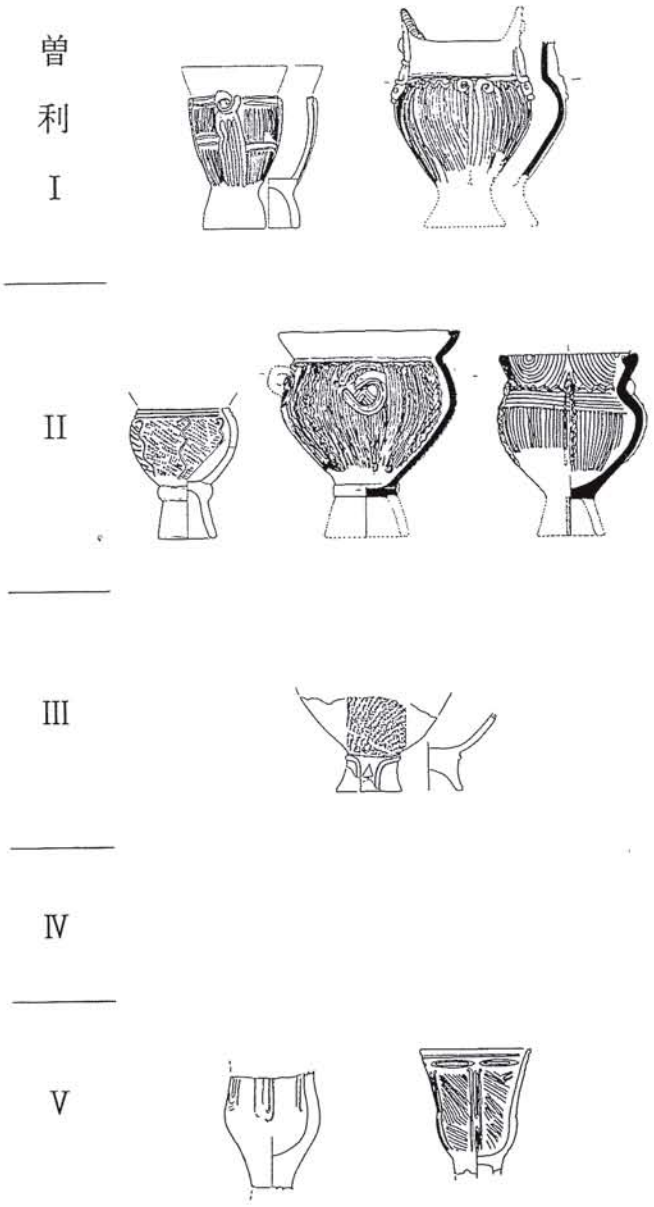
こうした台付鉢の系譜は、中期前半の新道期あたりまで遡って祖先が求められる。だがそれも類例が多いとはいえない。

### 4　両耳甕

素文の口縁が大きく開口し、「く」字形に折れ返る肩部を有す甕である。肩には一対のX字状把手が付き、ふつう区画文が施される。Ⅱ期に出現し、Ⅲ・Ⅳ期とつづくが、Ⅴ期にはみえなくなる。坂上11・20・35，唐渡宮35，同73・85・91，居平17・21・36ほかである。X把手付大深鉢と並んで各戸に一個ていどは普及しているので、破片もできるだけ図示してみた。やはり、曽利文化を最も特色づける器種である。形態から推してまずは貯蔵器と目されよう。これについては、項を改めて検討を加えることにする。

### 5　浅　鉢

いうまでもなく中期前半から続いてきている器種である。Ⅱ期において注目すべきは、口縁部が軽く流れるような「く」字形に折れ返る器形が顕著であることだ。坂上12・40，向原13・25・26がそれであり、総じて器壁が丁寧に仕上げられ、黒漆がかけられたり赤色顔料の塗られ




第189図　台　付　鉢　(1/9)

各段左より　I；穴場・居沢尾根　II；向原・居沢尾根・同
III；根古屋　V；曽利・荒神山

たものが多い。言わば精製鉢である。このような形態はI期にも見出される。唐渡宮6のごとくである。さらにその系譜は井戸尻期までたどれるようだ。

これに対して粗製鉢とでも言うべき、単純な器形のものも存在する。坂上29・36，居平37がそれである。Ⅰ期の居沢尾根遺跡では両者が相半ばし、Ⅲ～Ⅳ期の柳坪・頭無両遺跡では後者の形態がほとんどで、前者はみえない。Ⅴ期に入ると浅鉢は消息不明となる。器種自体が姿を消す。

さて、中期の土器組成において確固たる位置を与えられている浅鉢については、それなりに系統だった考察がなされねばならない[3]。ここでは及び難いが、要点にのみ触れてみることにしよう。

まず浅鉢の用途である。たいていの人は粉を捏ねて、お団子のようなものを作る姿を思い浮かべるにちがいない。今日も似たような器形の鉢を用いてそうしたことをしているからである。格別むずかしく考える必要はない。これはやはりおろそかにできない認識であろう。ひっきょう、過去に失われた物に対する手掛かりとは常にこうしたものである。それに関して注意されるのは、唐渡宮6，坂上29・36・40の底もしくは底の縁が、摩滅していることである。居沢尾根から出土したⅠ期の浅鉢の何点かにおいても、同様な損耗が観察されている[4]。これらは精粗の別なく認められる。こうした底縁の摩滅は、粉を捏ねるような作業なくしては説明できないだろう。ただ、すべての浅鉢がそうだというわけではない。中期前葉の浅鉢には、腰が内側へ反っていて粉をねるには不適当な器形のものが少なくない。

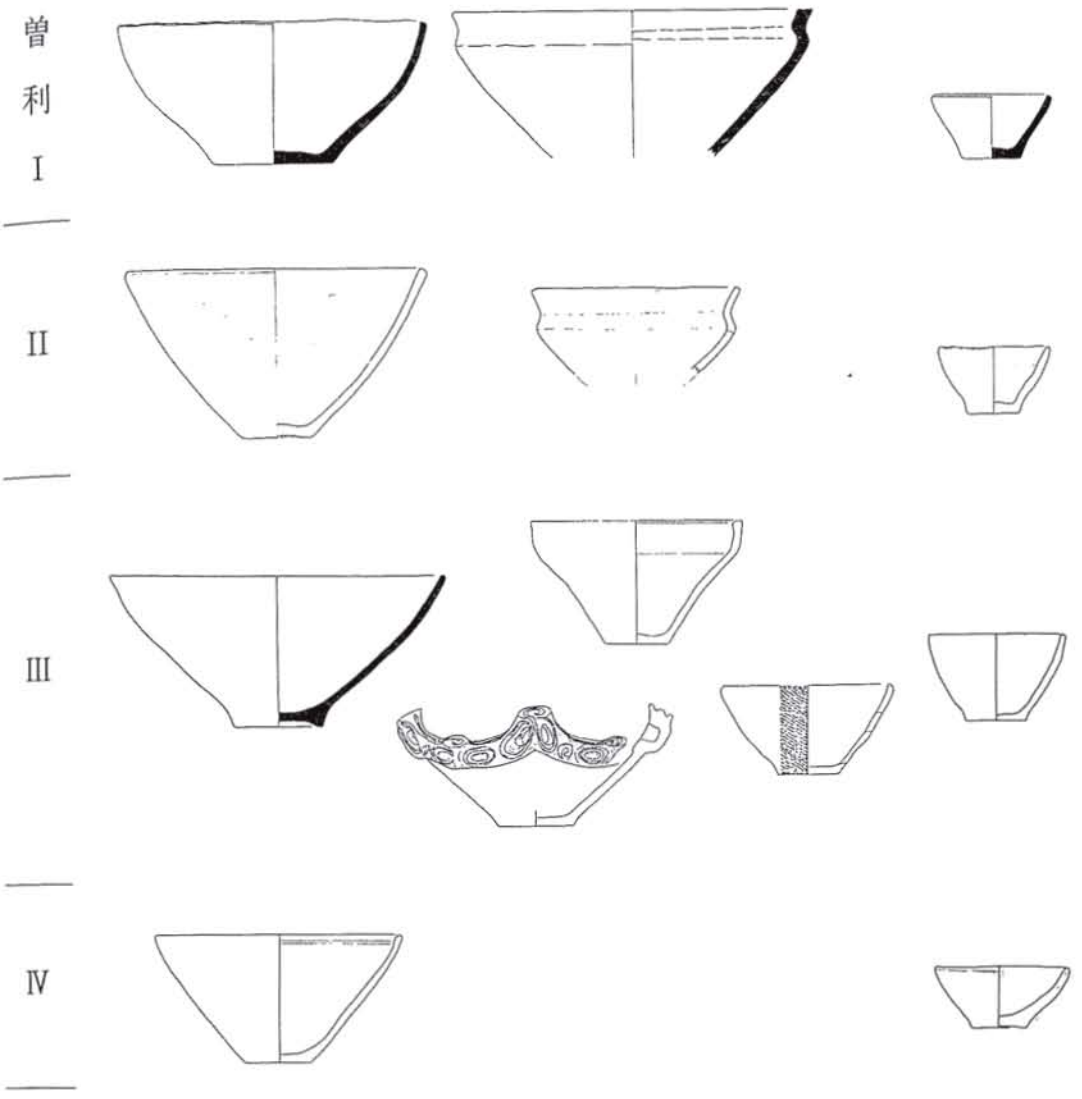
つぎに、中葉以降の浅鉢は、しばしば黒漆が塗られたり赤色顔料で彩られたりしている。神聖な器なのである。黒と赤で彩色される器の筆頭には有孔鍔付土器、すなわち酒造器をあげなければならない。酒樽や酒壺が神聖であるのは、酒が主作物の精粋であり、精霊ないし神々と人との仲立ちをするものだからにほかならない。すると、浅鉢もまた酒と並んで大切な主作物の精華を盛る器であろう。酒に次ぐ主作物の精といえば、団子や餅の類いである。今日も四季折々の祭日には、餅をついたり、団子やおはぎをこしらえる。日常の食べ物とはちがい、神に供える食である。

ひるがえって、前節において、同時代の人々が穀物の調製や製粉に対してどのような意識を寄せていたかを垣間見た。そして、団子や餅の形代たる石団子や石餅が存在することを確かめてきた。その方面にてらしてみても、浅鉢の第一義的な用途や性格をこのように推定して大過あるまい。

簡約すると、浅鉢は粉を捏ねて団子や餅（今日いう餅ではなく、しとぎのようなものだろう）をつくる器、それを盛る器だと考えられる。それは、まず神々や精霊の前に供えられるものだから、これに他の神饌が盛られることもあったろう。そして、献じた後にはそのまま神人共食用の器となったことと思われる。

### 6　埦　鉢

今日の丼（どんぶり）のような大きさ・形の器であり、さしあたって埦鉢と呼んでおこう。




第190図　浅鉢および椀鉢の系統　(1/9)

各段左より　I；3例とも居沢尾根　II；坂上・向原・坂上
III；甲六・頭無・柳坪・根古屋・頭無　IV；頭無・唐渡宮

坂上30，唐渡宮48，居平3がそれである。口径13～16cm，高さ6.5～8cmで、どれも器壁の仕上げは粗い。いまのところ類品は、頭無10号址と居沢尾根20号址から出土している。前者は口径16cm高さ10cmでIII期のものらしい。後者はI期に属し、口径14cm高さ7.5cm、外面に部分的に黒彩がみられるという。こうして類例は少ないものの、I期からIV期までこの器種が存在す

ることが知れる。

ところで、関連して注意されるのは、普通の浅鉢よりは小さいが、これら埦鉢よりは一回り大きな縄文地の浅鉢がⅢ器頃に限って見出されることである。いまのところ4例が報告されている。新田平遺跡・茅野和田遺跡東33号址・柳平A 6号址・根古屋遺跡3号址からそれぞれ出土したものであって、口径18～24cm，高さ8.5～12cmである。いずれも縄文地ではあるがこれらを中に置けば、浅鉢から埦鉢へ形態の移行を見取ることができよう。

浅鉢を小型化したような形態の埦鉢は、中期の前半にも散見される。いったい各々の器種には大中小の形のものがあるのだから、浅鉢の大小のみを取り上げるのは片手落ちともいえるが、小は小なりの性格を考える必要がある。

### 7　壺

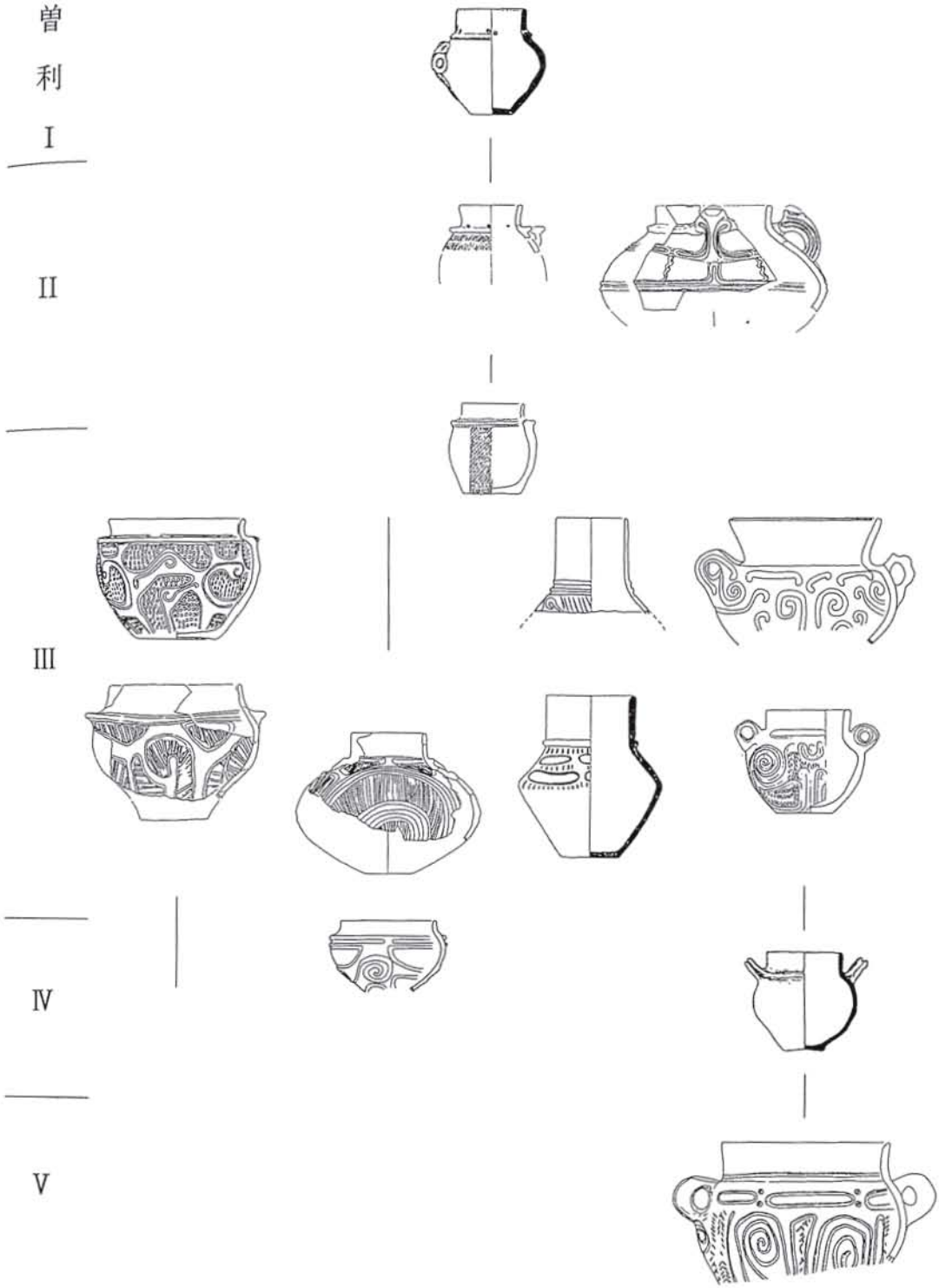
中期前半からの有孔鍔付土器の系統である。中葉のものは樽形が主流であったが、曽利Ⅱ期以降は壺形となって小孔は退化し、Ⅲ期には数形態に分裂する。それらは壺という概念でまとめるのがよく似合う。

いまのところ、Ⅱ期の壺は意外と類例が少ない。坂上14は有孔鍔付壺の最後の姿というべき例で、これに先んずるⅠ期のものは曽利4号址や居沢尾根22号址から出土している。また、この系列の最終に位置すると思われるのは、根古屋3号址の例であり、時期はⅡ期末からⅢ期初にかかる。こうした有孔鍔付壺は、中期前半に系譜をたどってゆけるものである。他方、玉葱形をした坂上31はにわかに類例を求め難い。だが、有孔鍔付壺の正系を外れるような形式の壺が発現していることは見過ごせない。

Ⅲ期に、有孔鍔付土器の系統はおおむね四つの形式に枝分かれする。まず、Ⅰ・Ⅱ期の有孔鍔付壺に替わってその主流を襲うのは、鍔釜形をした広口壺である。小孔が鍔に穿たれており、赤彩されたものが多い。無孔のものもある。腹径30cm台から10cm台まで大中小がある。Ⅳ期までつづくが、Ⅴ期には見えない。柳坪・根古屋・坂井・与助尾根南・よせの台・海戸などの遺跡から報告されている。

これと姉妹関係にあるのが、擬耳短頸壺とでも呼んでおくべき類である。無孔にして低い鍔が二条めぐり、それがちょっとした橋状の耳で結ばれるのが特徴である。もしくは鍔と器腹の渦巻文とが同様に連結される。やはり赤彩されたものがある。唐渡宮72がその例。他では与助尾根・よせの台・荒神山などの遺跡にみられる。前者と同じ消長をたどる。

つぎは、肩に一対の把手が付いた両耳壺である。前二者に対しては従姉妹的な関係におかれよう。腹径30cm位から15cm前後まで大小がある。初期の大型品には赤彩されたものがみえるが、総じて精製ではない。唐渡宮56は大型精製品である。他では曽利・井戸尻・大畑・ワナバ・茅野和田・与助尾根・荒神山・柳坪などからⅤ期まで各期の類例が出土している。この両耳壺は、前二者に対抗するがごとく壺類の両輪をなし、Ⅴ期に至っても唯一健在である。




第191図　壺の諸形式（1/9）

上3段　　曽利，坂上・同，根古屋
以下左列より　　柳坪・根古屋，よせの台・荒神山，曽利・与助尾根，
荒神山・ワナバ・大畑・柳坪

残るもう一つの形式は、狭口壺とでも呼ぶべきものである。頸が長めで、やはり鍔を残す。或るものは長頸壺とすら呼びたいようである。先にみた広口壺や短頸壺とは腹違いの姉妹関係にあるとみられよう。現在のところ数が少なく、全形の知れる例も乏しい。曽利25号址・頭無14号址・与助尾根17号址から出土している。時期はⅢ期らしい[5]。

さて、有孔鍔付土器についてはすでに二十年この方、武藤雄六の考察、その後につづく長沢宏昌氏の研究によって、酒造具であるとの認識が深められてきた。中期後半の壺類も、その変遷の中でとらえられていることは言うまでもない。要するに、これらは酒壺である、と[6]。そうすると当面の問題は、Ⅲ期における四形式の壺の性格を各々どのように理解するかにおかれてくる。わけても両耳壺の性格が問われる。それについては、後で少し考えてみたいと思う。

なお、曽利期の壺はどの住居址からも出土するというものではなく、数が甚だ少ない。中期前半では大抵の住居から有孔鍔付土器の破片の一つや二つは出土するのに比べて、大きな違いである。

### 8　釣　手　土　器

食生活の体系からすると別格におかれる、神火を燈す祭器である。坂上24・37，向原15．居平24。Ⅱ期の前三例は、どれも作りが粗く小型である。標題の性格上、ここでは一応あげておくに止めたい。

## 二　X字状把手付大深鉢の系統と性格

X字状把手付大深鉢の系統と性格について検討してみよう。

### 1　特　　徴

前に述べたようにこの土器の特徴は、抜群に大きく，広い素文口縁が開口し，頸部にX字状の把手がめぐることである。これまでに形の知られているⅡ期の類例は、曽利・柳坪・頭無・坂井・居沢尾根・茅野和田・中原・与助尾根・本城・海戸などの遺跡にみられる。今回報告した三遺跡の例を加えて一覧すると、口径40cm以上～60cm台，胴径30cm以上～50cm未満，高さ50cm以上～70cm台の大きさである。唐渡宮32は最大級の巨体を誇り、向原19は標準的な大きさだといえる。因みに前者の容量は頸までだと３斗、口縁いっぱいだと５斗入る。後者は頸まで２斗、口縁いっぱいで３斗である。

X字状把手の数はふつう４，５，６個。胴部の文様は総じて似通っており、地文は雨垂れ状の刺突文と縄文が相半ばし、竹管文は少ない。

### 2　系　　統

この大深鉢の直接の祖形となるものは、Ⅰ期に見出される。しかし、やや唐突かもしれないが考察の都合上、これの系統を先ず中期中葉に求めてみることにしよう。器形の類似はもとよ

り、大形であること，口縁が素文であること，頸部に把手がつくことが条件である。すると、井戸尻期から藤内期にそのような深鉢が存在することに気付くだろう。一つは口縁上に人面を戴く人面付深鉢であり、御所前5号址，月見松28号址，小段4号址の例があげられる。二つは、口縁上に所謂みみずく把手を戴く深鉢で、荒神山112号址の例がある。それは胴下半を欠失しているから、未発表の資料である九兵衛尾根遺跡出土の例を加えて補足しておこう。地域はとぶが、相模川中流域の当麻(たいま)遺跡から出土した例もこの仲間に入る。曽利48号址の例は肝心な箇所を欠失するが、この種の造形か人面の類いが付くものと思われる。三つは、前二者以外の装飾突起をもつ荒神山102号址の例である。それに、荒神山48号址の例も以上に準ずる。

現在のところ形のわかるものはこの位だが、それらは、口径30cm以上～40cm、高さ55cm以上～60cmの大きさを有し、問題の大深鉢に準ずる。器形もみな似通っている。口縁は素文にして、頸部には一対の双環状の造形がなされている。それに、胴部の文様構成も共通するところが多い。基本的な形態において、X字状把手付大深鉢がまさしくこの種の土器に由来することは疑いなかろう。

では、曽利I期はどうか。やはり同様な条件を満たすものが見出される。和田遺跡西3号址，居沢尾根22号址，岩久保遺跡から出土した例がそれである。これまた報告された類例は少ないうえ、全形のわかるものが見当たらない。そこで、藤内遺跡から出土したほぼ完形の例品を新たに加えよう。(7)

居沢尾根例はさして大きくないが、他の3例は口径40cm台、高さ60cm前後である。頸部には一対のX字状把手があり、その上手口縁にはいずれもよく似た渦巻文様がつけられている。胴部の文様も似通い、地文も共通する。つまり、これらは全く同一形式の器種であって、すべての面においてII期の大深鉢にいっそう近似している。一方、先に一瞥した井戸尻期の一群の土器の後継者たることも疑いない。

### 3 図像の系譜

形態の上で、X字状把手付大深鉢の系譜が明らかとなった。しかし、それは土器の外見上のつながりが分かったにすぎない。その形態に内包されているところのこの器種の使い途や、固有の性格が知れたわけではない。そうした、言わば土器の内面性をみ、内面的な系統関係を把握してこそ、はじめて問題の深鉢をどうにか理解し得るというものである。それには先ず、形態と不可分の関係をもって土器に付けられた文様が何を表したものかをよく知ることである。

その方面に関して近年、われわれは新たな視点に立って二、三の考察を始めている。緒についたばかりであるが、幸いに人面付深鉢に関しては多少の理解を得ることができた。したがって、それを前提としてX字状把手付大深鉢に至る道筋をごくかいつまんで素描してみたい。ただし、ここで前提となる図像認識に対して解説を行う余裕はないので、いかにも唐突にして奇異な感じを受けるであろうことは避けられない。もとより、土器文様は編年のために存在す

るものと勘違いしている日本考古学の現状に馴染むところではない。

**人面付大深鉢**　御所前と月見松と小段の人面付深鉢については、最近、一通りの検討を行った。[8] 必要な点を述べると、人面を正面にする位置および背後の図像は、蛙を表している。このことは御所前の作例と平塚市上ノ入遺跡から出土した有孔鍔付土器の図像とを比較することによって証明される。突出した双環状の造形は、蛙の眼である。これまた、上ノ入のほか曽利・井戸尻・藤内遺跡などから出土している蛙文によって自明である。

蛙の図像については、一連の検討を経ている。[9] 中国古代のそれに照らして、蛙は月の不死性を表象する生物であり、光らざる朔の月を表すものと考えられる。いっぽう、蛙の胴体にはしばしば女性器の形象が重ねられている。月と蛙と女性は同義にして往来自在な神格であったことがうかがわれる。

したがって、これらの口縁上に戴かれた人面は、蛙すなわち朔月に属する神格であると推される。そして御所前の作例では、まさに蛙から人面が生まれ出ようとしている。蛙の子とは、新月の光に譬えられる存在である。全体としては、ふっくらとした器体が月神の胎内に擬せられているわけである。そこで、人面の顔を包む環状の造形あるいは表情を検討してみると、ほとんどの人面が生まれ出る月の稚児として表現されていることに気付く。

ところで、今日までに知られている人面付深鉢はというと、本体の全部もしくは或る程度の部分が人面とともに遺存する例は十指をわずかに出るほどしかない。たいていは人面の部分のみが分離して、本体不明なまま出土したりする。つまりこの土器は、最後に人面が欠き取られ、本体は壊されてばらばらとなる運命にあったらしい。

だいたい以上のようなことから、この土器は、記紀伝承にみえる大気都比売（おおげつひめ）または保食神（うけもちのかみ）に当たる神格をもつ礼器であり、人面じたいは稚産霊神（わくむすひのかみ）すなわち穀霊の姿である、と推察される。実際上の用途としては、新嘗祭（にいなめさい）に相当するような祭礼にあたって、この深鉢で新穀を炊き、天地祖霊に捧げ、収穫への感謝とまた来るべき豊穣を祈願したものと考えられる。

**両眼を戴く大深鉢**　口縁上に、いわゆるみみずく把手の付いた深鉢。この造形を直観的にみみずくの大きな眼に見立てたことは、間違っていない。しかしみみずくではない。また、口縁上に突出した造形を把手と呼ぶことは誤りである。この種の土器の図像に関しては未検討であり、人面に次いで考察すべき課題となっている。それでも必要上、二，三の予察を述べておきたい。

まず、みみずくと称されてきた双環の造形が、両の眼を表すことは疑いない。そのことは、先にふれた蛙の眼によって証明される。この種の造形には人面のそれに通ずる作例がしばしばある。それゆえ、人面と肩を並べるような、大きな両眼をもつ或る神格を表したものだと見做される。現に、ここで問題となっている荒神山・九兵衛尾根・当麻などの例は、土器全体の形態からしても前3例の人面付深鉢に匹敵する。

荒神山例の胴部の文様構成は、小段のそれによく似ている。すなわち、器周をめぐる三本指の蛙の前肢が描かれている。同様な三本指の蛙の前肢は、当麻例の胴部文様帯にも見出される。曽利例の文様構成は当麻のそれに近似し、九兵衛尾根の作例には曽利例と同様な文様帯がみられる。荒神山102号址の例もそのような面影を留めている。藤内II期から井戸尻III期へと変化しながらも、これらが同一のものを表すことは明らかである。

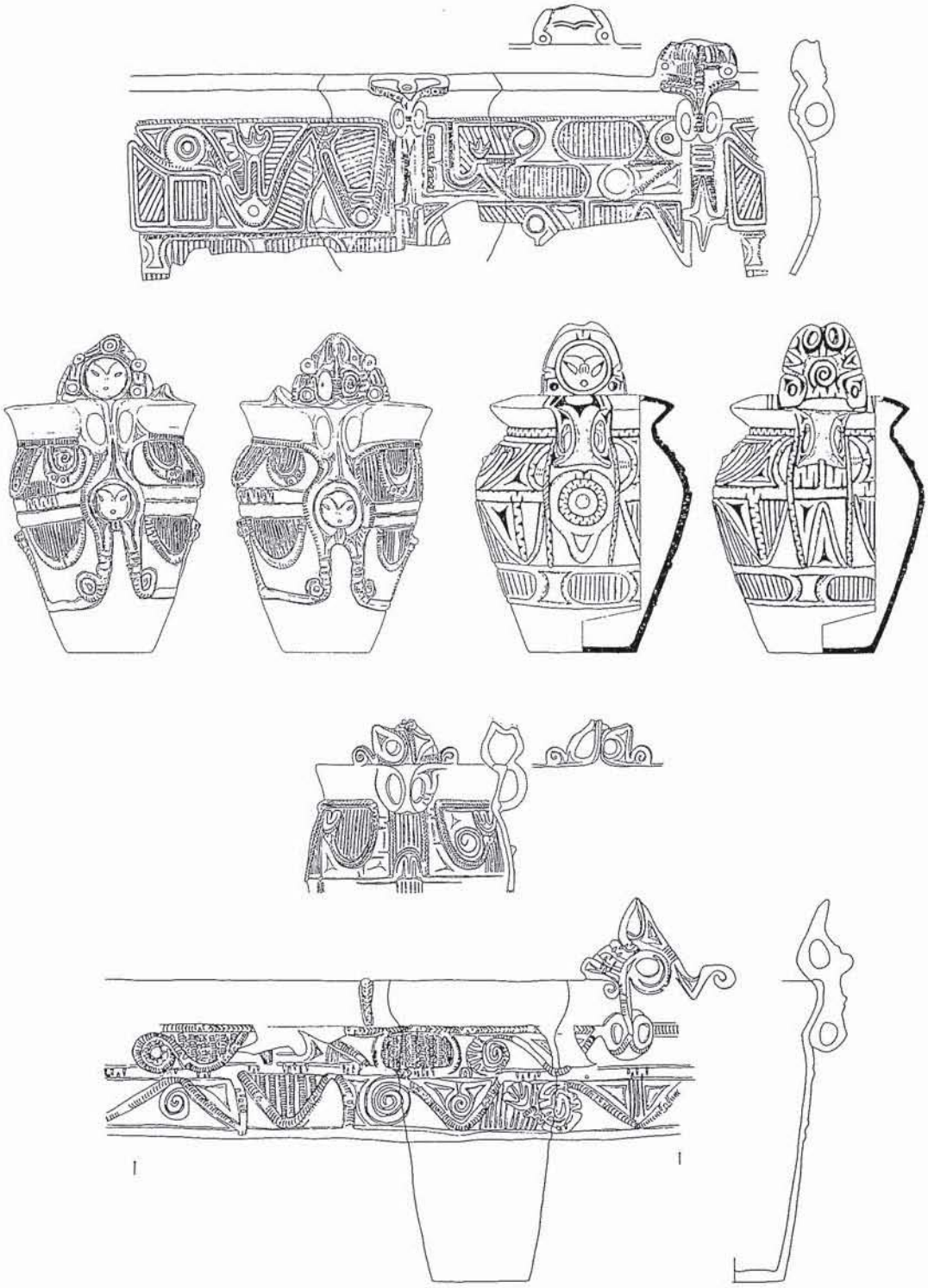
蛙の眼に由来する大きな両眼は、何を表徴しているのだろうか。おそらく月の対極の相、つまり右眼が朔月、左眼が望月を表し、ひいては右眼が月、左眼が太陽を象徴するものと考えられる。とすれば、これは日月を生み日月を司る神の姿ではないか、と察知される。記紀神話の伊耶那岐命(いざなぎのみこと)に相当するような神格である。[10] 実際の深鉢の用途は、たぶん、新年の始まりにあたる冬至の朝に神饌を炊き、天に捧げる礼器だと推される。ともあれ、かようなことを論証するためには、それなりに詳しい手続きを踏まねばならない。

**I期の大深鉢**　曽利I期の図像は、前時代に比べ著しく抽象的である。もしくは退化している。問題の大深鉢の文様が何を表したものかを証明するには、やはり相応の手順を尽くさねばならない。だが、X字状の突出した造形が蛙の眼に由来することは疑いを入れない。原則的な解釈法にしたがえば、その眼から横向き三日月形に発するのは蛙の前肢・縦に下がるは蛙の胴を表すとみるべきである。

茅野和田・居沢尾根・藤内例の口縁に描かれた、蛇がとぐろを巻いたような渦巻文は何だろうか。これとよく似た造形が、しばしば人面の裏側に見出される。現に、月見松の人面の後頭部がそうである。あまつさえ茅野和田や居沢尾根の図象全体は、月見松の人面の裏側と共通する点が多いではないか。いったい、人面の後の頂には双環状の蛙の眼が表されているのが普通である。したがって月見松例によれば、その渦巻文は蛙の背に相当している。[11]

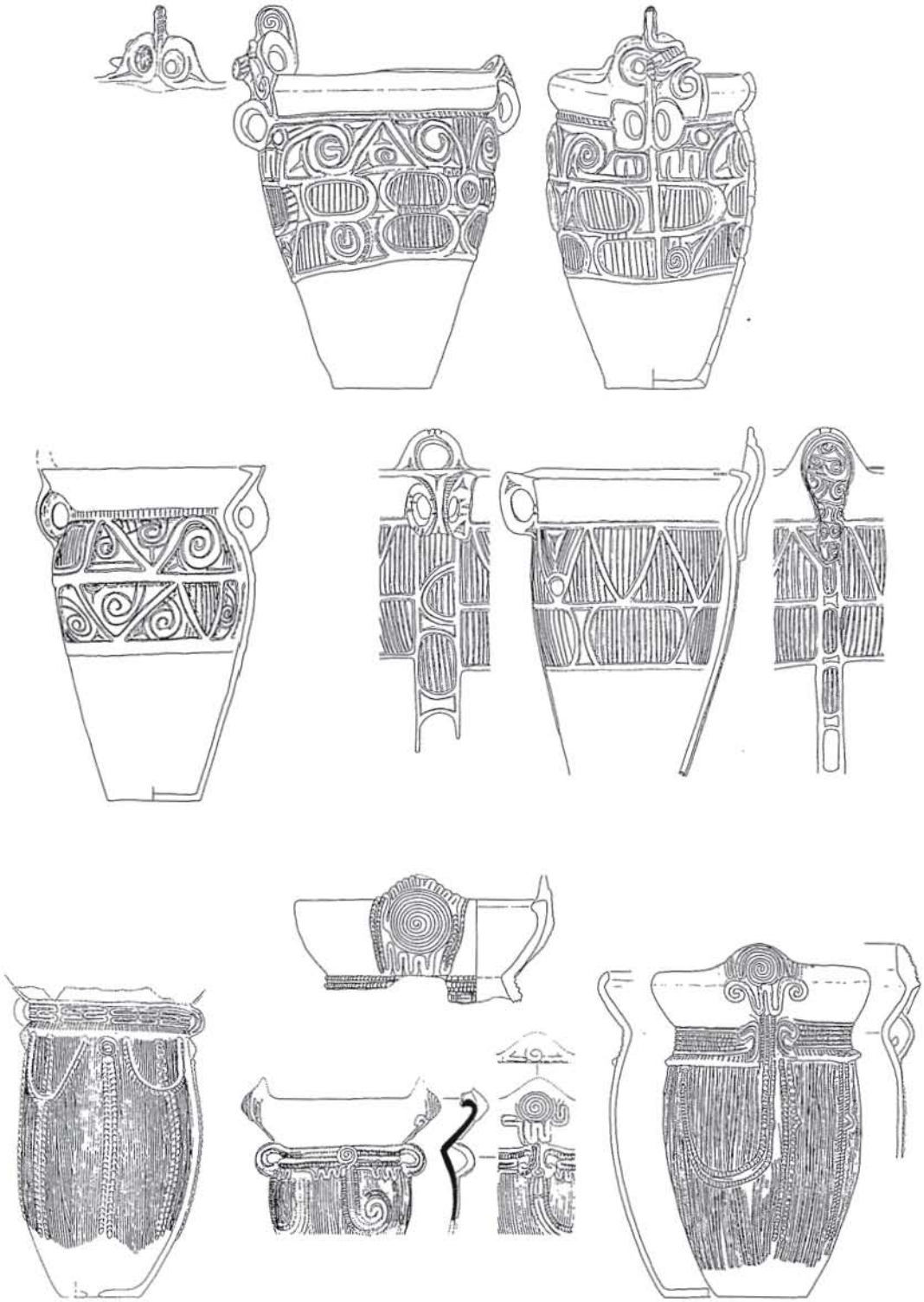
藤内例の渦巻文の下手の文様は、前2例と少し異なっている。左右がそれぞれ蕨手状に巻いたこのような図文は、すでに藤内期の土器に見出される。ここで詳しく説明する余裕はないが、人面文のなかには両眉の尻がくるりと巻いて眼となるものがある。それは眉の形が三日月に見立てられ、新旧二つの三日月の生長と減殺の軌跡を表すものではないかと推察される。そこで先に、その種の図文を眉月文と呼んでおいた。[12] 前にあげた九兵衛尾根例の両眼の頭上に冠のごとく戴かれた造形の、左右にしるされた図文がその類いである。通常の眉月文からすれば、問題の図文は変形眉月文とでも称すべきものである。いっぽう前でふれたように、蛙なかんずく蛙の胴は甦らんとする朔の月を表徴している。それゆえ藤内の図像は、光らざる古い月を抱く三日月の図であると解釈できよう。すなわち、再生する月が主題である。

ともかく口縁の渦巻文は、月見松の人面の裏側の図像に照らしてとらえるのが今のところ最もしっくりする。そして、月見松例と曽利I期の諸例との間に荒神山102号址例をおくならば、その不可思議な造形も解釈の糸口がつかめようというものである。



第192図　人面付大深鉢と両眼を戴く大深鉢の図像　(1/12)

上より　　小段，御所前・月見松，荒神山，当麻



第193図　井戸尻期の双環把手付大深鉢と曽利Ⅰ期のX字状把手付大深鉢の図像　(1/12)

上；九兵衛尾根　　中左；曽利　　中右；荒神山
下左より；岩久保，茅野和田・居沢尾根，藤内

**II期の大深鉢**　曽利II期の大深鉢のなかで型式的に古い作は、向原19・坂上18・同21，中原例・与助尾根例などである。蛙の眼たるX字状の造形は四つ、それらを結ぶ胴部の文様もよく似ている。そして実は、これらに一歩先立つ例として須玉町出土の大深鉢を引かねばならない。I期の新しい段階に属すものである。

須玉町の作は、胴部の文様が割と原則的で分かり易い。まず、眼の下手に構成された菱形が蛙の背である。菱形の背をした蛙ないし半人半蛙文は、辰野町樋口内城館址127号址や中道町村上J2号址などから出土した藤内期の土器に見出される。[13] それらをもとにして一通りの手順を踏めば、このことを証明しうる。先にふれた小段の人面付土器の蛙の背も、同様だった。つぎに菱形の上側左右の隆線は、同時に蛙の前肢を表す。下側左右の隆線は後肢を表す。四肢の屈曲部には簡単な渦巻文がつくられている。藤内期の蛙文や半人半蛙文の後肢や前肢の屈曲部には円文がつく。前にみた御所前や小段の例のごとくである。それが、荒神山112号址や当麻の例では渦巻文に化している。それと同義である。

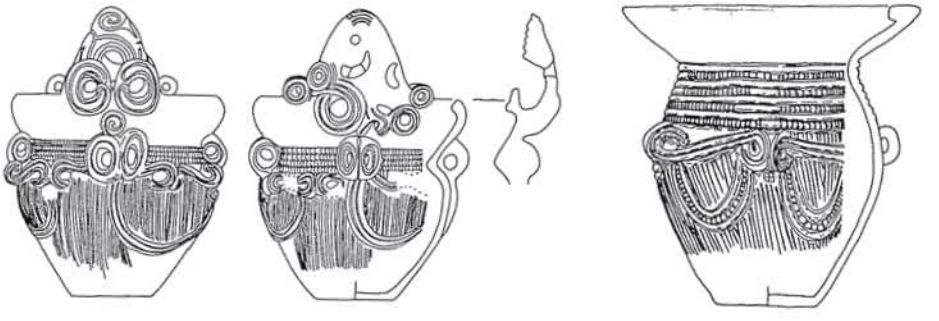
ところでまた、菱形と菱形の間に構成されたU字形を背中合わせにしたような形は、従来、人体文と称せられてきた構図である。その上半分、つまり眼を結ぶU字形の前肢には、もうひとつ別な意味が隠されているようだ。それは、前肢の両端が外側へ巻いて各々の片眼をつくっている。実は、こうした形は藤内出土の有孔鍔付樽の片側に描かれた蛙の前肢と似た表現法なのである。藤内例はそれが大きな環状文を抱く。そこでは両腕が新月を、環文が光らざる月を意味しているらしかった。[14] 本例の両腕に抱かれた渦巻文は決して大きくないが、基本的な構図は藤内の場合と同じである。それに、渦巻文が蛙の背として表され、それが朔の月を意味するとは先ほど解釈した通りである。事実、与助尾根例ではこの渦巻文が蛙の背として意識されている。関連してここで参照されるのは、都留市久保地遺跡から出土した曽利III期頃の両耳壺に描かれた図文である（第201図）。

須玉町例に最も近いのは向原19である。中原例もこれに準ずる。しかしすでに蛙の菱形の背よりも、両端が巻いて眼となるU字形の前肢と、それに応ずるような逆U字形の後肢をもつ蛙ないしは半人半蛙文の方に表現の主体が移っている。

さて、標題の大深鉢は、S字または逆S字を横に寝かせたような文様を連ねてX字状の眼をつくったものが一般的である。胴部の文様も互いに似ており、古式の図象に照らして解釈することができる。問題は眼のつくり方である。このような手法は、曽利I期の素文口縁深鉢に登場している。曽利5号址，同77号址，居沢尾根28号址などの例である。また、荒神山99号址出土例では双環状の眼とともにある。この土器は口縁上に両眼を戴いており、所謂みみずく把手の面影を留める点、とくに注目される。これに類する作例は居沢尾根からも出土している。ともかく、これらI期の深鉢の肩部につくられた横S字状の眼が、II期の大深鉢に採用されたことはあらそえない。

第194図　II期古段階のX字状把手付大深鉢の図像および祖型図文　(1/12)

上左より　須玉町，向原，中原　下左より　藤内，坂上，与助尾根



第195図　曽利I式素文口縁深鉢の横S字状文　(1/9)

左；荒神山　右；曽利

考　察

由来、この横S字状の図文というのは藤内期に現れ、それだけで単独に用いられてきた。曽利III期では深鉢の口縁に特徴的に見出される。これが何を表すかは、別に詳しく考察されなければならない。だが、これも月の運行を表徴する図文だと予測される。曽利I期に至りそれを連ねて眼をつくるようになったのは、先にふれた眉月文や、両端が巻いて眼となる腕もしくは前肢と同様な発想があってのことと推察される。

**要　約**　図像の系譜において一貫する頸部の把手が蛙の眼であること、胴部の文様構成もまた蛙文の変遷のなかでとらえられることをみてきた。それに、I期の大深鉢の口縁には人面の面影が見出されることも確かめ得た。以上によって、X字状把手付大深鉢の系統が図像的にも検証されたことと思う。なお当然ながら、象徴的な蛙の眼を安易に「把手」と呼ぶことは、機能面からみても好ましいとは思われない。しかし適切な呼称が確立するまでは、便宜的に用いるほかない。

ひるがえって、II期に至って素文の口縁は一層広く、大きく開くようになる。大深鉢に限らず、このような口縁の形制に何か機能的な効果があるとは考えにくい。すると、それもまた思惟の所産と受け取るべきだろう。そこは、おそらく天の領域に当たるのだと察せられる。だがそれを論証するには別な稿を要する。

## 4　性　格

時代につれ表現法は変わり、口縁に戴かれた神格も姿を消した。しかし、図像構成の原則は崩れていないのである。このことは、大深鉢の基本的な性格が受け継がれてきていることを意味する。したがって曽利II期の大深鉢も、藤内期の人面付深鉢や両眼を戴く大深鉢と同様な用途・性格をもつと考えて差し支えないだろう。すなわち、新穀を炊いて天地祖霊に捧げ収穫を感謝し豊穣を祈願する礼器、また新年の朝に神饌を炊き天を祀る礼器であろう、と。群を抜く大きさも、そうした威厳を高めるものと思われる。

そのような性格の一端は、出土のし方からもうかがえる。ひとつは、坂上46のように墓域の一角に据えられた状態で出土することである。向原31もこれに近い状態だった。近年調査した居平遺跡ではそうした例がいくつか認められた。これらの大深鉢は祖霊を祀るに与かっている。

もうひとつは、屋外埋甕として用いられている場合である。海戸例がそれで、中原例も同類と目される。I期の須玉町，岩久保例も同様らしい。III期以降では尖石，小淵沢町中原などにみられる。これらは墓葬に関わっている。器体の大きさもさることながら、それが母神の胎内に見立てられているからであろう。御所前の作品に示されたような大深鉢の性格の一側面が、この時代まで伝えられているものと言えないだろうか。

III期になると、胴部の文様はがらりと変わる。いわゆる唐草文が採用されるのである。大深鉢にかぎらず、深鉢全般に唐草文系の施文手法が受け容れられた結果である。その唐草風の渦巻文が何を表したものであるかは、別に考察されるべきで、いまは立ち入ることができない。

X字状の眼との相互関係についても言及する余裕がない。しかし、形態はいささかも揺るがない。そして、Ⅳ期からⅤ期へと退嬰的に変遷する。そこで見過ごせないのは、深鉢の他の諸器種がⅢ期には大幅に交替し、酒壺が数種に分裂して消長し、両耳甕や浅鉢はⅣ期をもって消息不明となるのに、この大深鉢のみがひとり一系的にⅤ期まで存続することである。それは、大深鉢の確固たる性格の強さ故だと推察するほかない。まさに曽利式土器文化の背骨である、と言えよう。

## 三　II期の深鉢の組成について

中期中葉からの系統関係をとらえることによって、X字状把手付大深鉢の用途と性格について見通しを得ることができた。他の深鉢、ことに素文口縁深鉢や重弧文・籠目文深鉢についても、中葉からの系譜をたどることによって具体的な用途や性格を推定することができるだろう。もちろんその場合、井戸尻期においてそれらの性格が解き明かされていることが前提となる。それはみな今後の課題である。

いっぽう、大深鉢が祭礼に用いられる最も格の高い煮炊用の器である以上、これとの類縁関係をとらえることによって、深鉢の器種の格式を知ることができるはずだ。そのような位置関係も、II期において最もはっきりしている。すなわち素文口縁深鉢，重弧文籠目文深鉢，縄文地深鉢という序列である。前二者は、口縁部の形制を除けば互いに共通する点が多く、相棒的な対関係をなすことが疑えない。それぞれ井戸尻期からの伝統を引き数量的にも伯仲している。

これらに対抗するかのように見られるのが、縄文地の深鉢である。量的には、前二者を合わせた数に匹敵すると思って大過ない。深鉢全体の3割といったところである。とりたてて飾られない実用向きな姿からしても、これが日常的な炊事具であったろうことが容易に推測される。器種構成の項でふれたように、この種の深鉢のなかには加曽利E系のそれに近いものがある。それで、この器種は加曽利E式の影響を受けて成立したものと考えられ、曽利縄文系といった特殊な呼び方もなされている。その通りであって、この器種はI期に直接的な祖形を見い出すことができない。だが、器形が割と単純な全面縄文地の深鉢は藤内期にしばしば見られる。それとどのようにつながるか否かは別に検討すべきだが、そうした伝統のなかで全面縄文地ということの意味を考える必要もあろう。

やや視点を変えると、II期において縄文を地文に採らざる器種はない。一方は大深鉢から台付鉢に、他方は両耳甕から浅鉢，壺に至るまで普く行き渡っている。ごく常識的に考えると、それは、縄文という下地が最も普通で日常的なものとして同時代の人々に意識されていたからにほかならない。しかし、その意識の実体あるいは背景に迫るとなると、これは難題である。

以上によってII期の深鉢群の組成がおおむね検分されたことと思う。これらの他には、縄文

地深鉢に類縁するものとして加曽利E系深鉢があり、別に唐草文系深鉢が客体的に存在する。後者の流入にいつては、それなりの観点で考察さるべきだろう。

さて、四つの器種の格式が概念的にとらえられたが、その内容を具体的に明かすことは難しい。新来の縄文地深鉢を日常的な炊事具とみるのはいいとして、問題は他の二者の性格である。そのうち素文口縁深鉢は、前時代のI期には普遍的な什器であった。過去において日常的だったものが後代には祭事など非日常的な場面に残存することは、民俗の事例が教えるところである。大深鉢に隣するこの深鉢のあり方は、いかにもその理に沿っているように思われる。ともかく、伝統的な食事作法を伝えるものに相違ない。

では、重弧文・籠目文深鉢の方はどうだろうか。すでに述べたように、これの出自系統は少々こみ入っている。井戸尻III期にまで遡って祖形となる深鉢の用途・性格を探らなければならず、今後の課題として残すほかない。

しまいにここで、台付鉢についてふれなければならない。それがふつう素文口縁の鉢であり、時に重弧文の口縁もみられることは、自ずどこの器種の位置を示している。すなわち、大深鉢に次ぐ煮炊用の礼器と目される。大深鉢とは対照的に、小量のものを煮炊きしてそのまま神前なりに供える形態である。しかし、どのような時に何を煮炊きしたものかは難問である。『曽利』において武藤雄六は有孔鍔付土器との関連を重視して、醸造用の麹を作る特別な煮炊具と考えている。それも一案であろう。ともかく現状では、性格を特定することがむつかしい。

## 四　III期以降の深鉢の系統と組成

### III　期

曽利III期も、II期に匹敵するような画期をなす。とりわけ深鉢群の様相が大きく変化する。以前に長崎元広氏が指摘し、近時、三上徹也氏が考察しているように、唐草文系土器の施文要素が全般にわたって浸透し、在来の要素と融合して成立したのがIII式である。[15] 以降、IV式はその退嬰、V式はその終熄として連続的に推移する。深鉢以外では、伝統的な有孔鍔付壺が数種の壺に分裂するのもII期とIII期の間の出来事である。住居内に石組祭壇が出現し、炉は最大規模となる。有頭石棒が確実に登場する。集落の動態もまた、II期とIII期の間の不連続が目立つ。これらのことはみな一連の社会変化として、I期とII期の間の画期と同様、広い視野から考察されねばならない。

ところで、八ヶ岳西麓から南麓でも当地域におけるIII期のまとまった資料は貧弱である。今回報告した唐渡宮遺跡のそれも甚だ少ない。しかし山梨県側の柳坪（やなぎつぼ）と頭無（かしらなし）両遺跡では該期の典型的な土器群が出土している。それらによって、III期を特徴づける新出の深鉢を眺めてみよう。

**肥厚帯口縁深鉢**　口縁部の文様帯が外側に厚ぼったく作り出され、円文や横S字状文が

彫刻風に連なる。口唇が山形に突出し、円文が孔となって通じたりする。Ⅲ式の指標となる深鉢だ。胴部の文様構成におおむね二通りある。一つは大柄な唐草風の渦巻文が描かれたもの、別のは割と単純な懸垂文が施されたものである。前者は総じて大型で、数が少ない。量的には後者が多い。唐渡宮78・86・102などがこれである。

このように肥厚した独特な口縁横帯文がどこから出てくるのかは、疑問点となっている。だが、唐草文系土器文化の影響という点を考慮してみると、やはり同系の深鉢に素地を見出しうる。曽利Ⅱ式に並行する器種のなかに、一見、素文の口縁が外側へ折り返されたかのように見えるものがある。坂上9・26，向原11，唐渡宮19・20・22などである。その肥厚した口縁の形制が採られたに相違ない。なかには、頸部との間に素文の部分を留める作があって、出現の様が了解される。円文と横S字状文は、中葉からの伝統を引く在来の図文である。

胴部の大柄な渦巻文が唐草文系のものであることは、改めて言うまでもない。さらに詳しくみると、その上手、口頸部の立ち上がり部分は方形ないしU字形に画されている。この手法は、前に籠目文深鉢の祖形としてあげた、Ⅰ式並行期の有角口縁深鉢に特徴的に見出されたものである。してみると、口唇の突出も無関係でなさそうだ。別にまた、胴部を縦横に交差して区画する施文法も同系の深鉢に由来しており、これらは隔世遺伝とでも称すべき要素である。

こうして、渦巻文系の肥厚帯口縁深鉢は、唐草文系土器の直接的な影響下に生成した器種であることが理解されよう。その点、Ⅱ期における重弧文・籠目文深鉢のあり方と軌を一にしている。

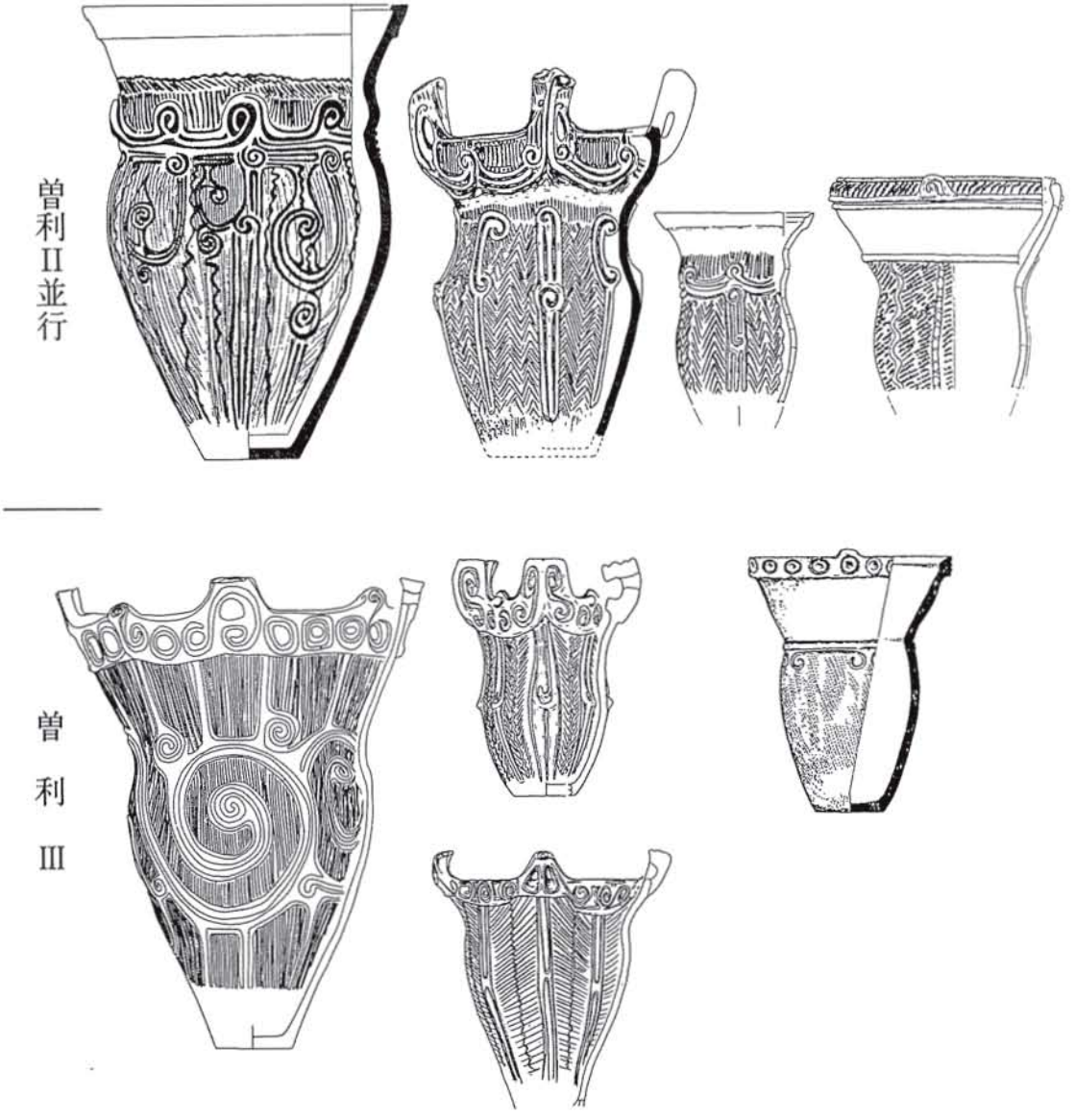
**横帯文口縁深鉢**　蕨手状の弧文が口縁をめぐり、口唇との間が半月形に画される。胴部には単純な懸垂文が施される。条線の地文だけのものもある。唐渡宮49・55・79・90がその例。この類いは、Ⅱ期の縄文地深鉢および加曽利E系深鉢に取って代わる器種として位置づけられる。すなわち、前者の口縁横帯文が発達し、地文が入れ替わった形態である。

Ⅲ式を代表する深鉢は、ほぼこの二者に尽きる。他には、口縁文様帯をもたない条線文地の深鉢が少量みられるくらいである。Ⅱ期から引きつづいて残っている器種については、一の項で述べた通りである。両者はともに口縁部文様帯を有し、胴部文様を共有しあう作例も少なくない。相互に対峙する一方で相棒的な対関係をなすことは明らかである。さて、X字状把手付大深鉢の項でみておいたように、Ⅲ期の大深鉢には唐草風の大柄な渦巻文が採られ、地文も同系の条線に変わっている。それを基準としてⅢ期の深鉢の秩序も自ずと推察されよう。大深鉢に次ぐのは、同様な渦巻文をもつ肥厚帯口縁深鉢である。つぎに懸垂文の施された同深鉢、つぎに横帯文口縁深鉢の順である。因みに肥厚帯口縁は浅鉢にも採用されている。それによってもこの格式が傍証されよう。

してみると、Ⅱ期の素文口縁深鉢の位置を襲うのが肥厚帯口縁深鉢だと言える。これの素地をなす唐草文系Ⅱ期の深鉢も素文口縁であったし、頸部との間に素文部を留める作例を思えば、

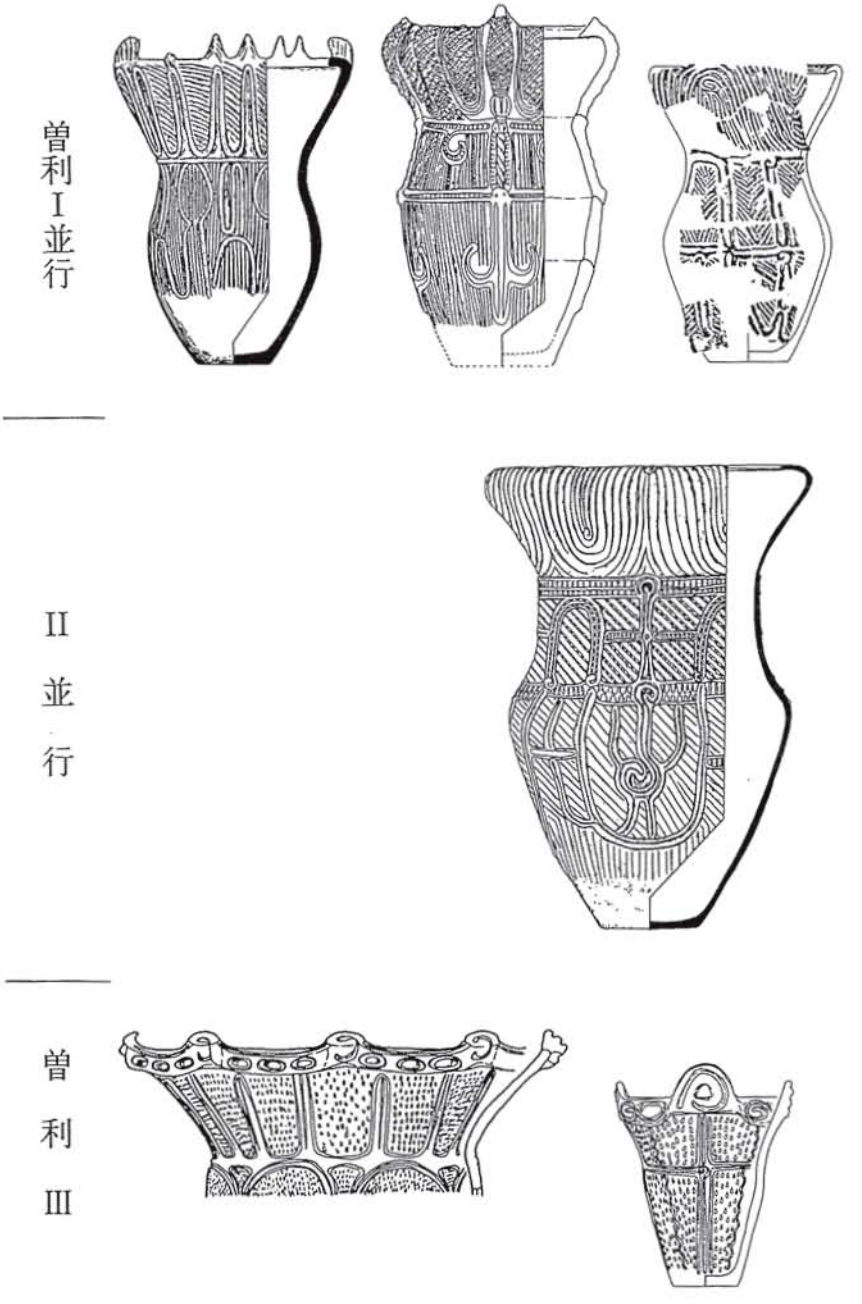
それなりに脈絡はつく。新しい息吹に満ちている故にこれの格には上下の幅があって、片や新しい要素に触発されて発達した什器たる横帯文口縁深鉢と、或る部分で交錯し合っているわけである。

ところで、唐草文系文化の要素を大幅に受け容れて在来のものと融合させ、新時代を画した




第196図　肥厚帯口縁深鉢の出自　(1/9)

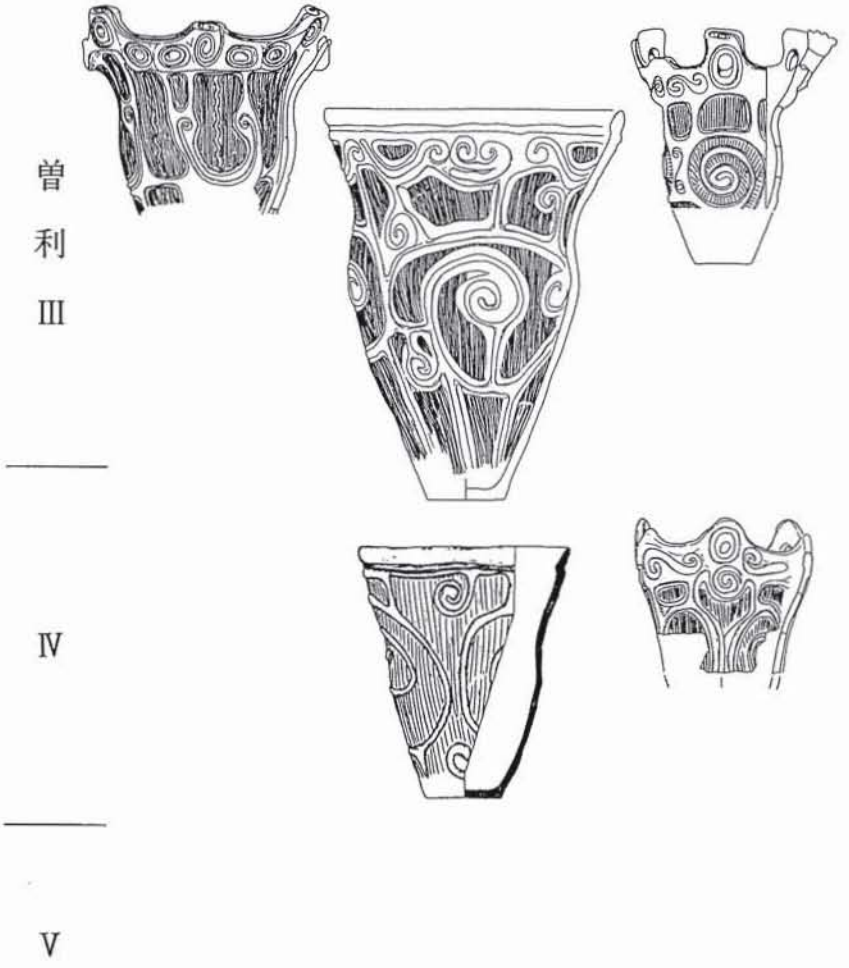
左列より　　長塚・小段，居平・柳坪・同，向原と坂上・新田平




第197図　肥厚帯口縁深鉢の出自　(1/9　海戸例；1/12)

上段左より　　立沢・茅野和田・梨久保，海戸，頭無・同

当時の人々の価値観の転換は、いかばかりであったろうか。そこのところに触れるためには、さし当たって二つの問題を解かねばならない。一つは、唐草風渦巻文が何を表し、どのような意味を表徴しているか。もう一つは、二通りの口縁帯文様がそれぞれ何を表し、どのような意味を表徴しているか、である。前者はII期の唐草文系土器について検討するほかない。後者は、中葉からの伝統に従って明らかにすることが出来る。土器文様に表されてきた在来思想は、その狭い口縁帯の図文に集約されているのである。III期の深鉢の内面にもう一歩ふみ入るために



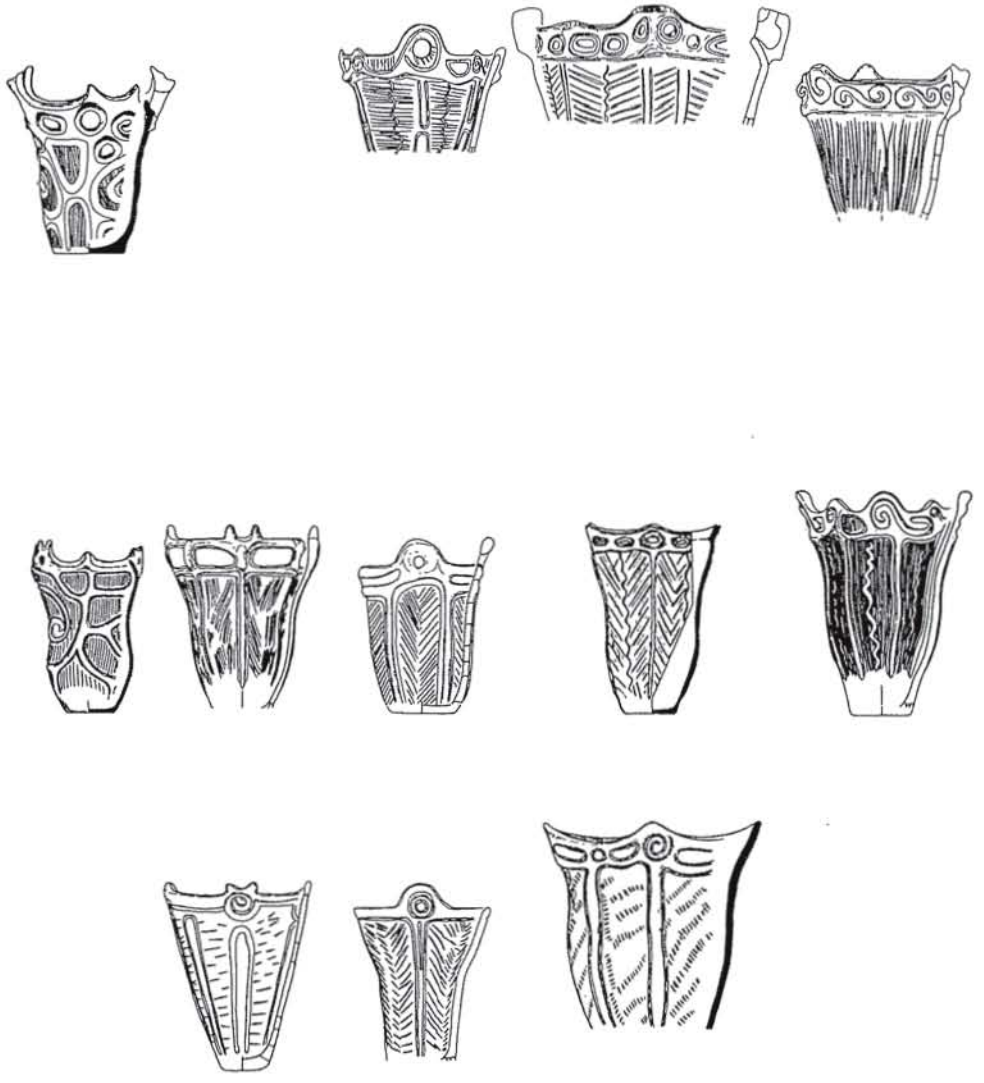

第198図　肥厚帯口縁深鉢の

左列より　　柳坪，阿弥陀堂・大畑，茅野和田・居平

は、これらの作業が前提となる。

### Ⅳ　期

緊張の時代は去ったが、新しい文化を生み出す社会的な力も失せたのがⅣ期であり、Ⅲ期の土器が退嬰的に推移する。すなわち、口縁部文様帯が消失の一途をたどる。まず、肥厚帯口縁深鉢のうち唐草風渦巻文を有すものは、早くもⅢ期後半に口縁部文様帯が消えるものの、ゆったりとした器形をして大深鉢に次ぐ礼器的な地位を保っている。唐渡宮71，居平15・16など。



諸系列　(1/9　右頁につづく)

左列より　甲六・曽利，頭無・唐渡宮，柳坪・唐渡宮・柳坪，
柳坪・大畑・九兵衛尾根，唐渡宮・頭無

いっぽう口縁文様帯を留めるものは、小ぶりな渦巻文深鉢か懸垂文系の深鉢である。その口縁文様帯も横帯区画文との合の子がみられたりする。唐渡宮53，居平33がこれらの類い。

同様に横帯文口縁深鉢も大幅に退潮する。だが、残っているのは総じてゆったりした器形を保つ。唐渡宮70など。

それらに代わって大部分を占めるのは、単純な器形をした条線文地の深鉢である。器面は縦に区画され、一条の蛇行沈線文が垂下したりする。この種の深鉢を**条線文地深鉢**と呼んでおこう。日常的に使われた炊事具であることは疑いない。Ⅲ期の二つの深鉢群から渦巻文を有すものを除いた残りの大部分、それらから更に口縁文様帯を外し去ったものがこの器種である。

Ⅱ期からの系統をふり返ってみると、Ⅲ期に触発されて発達した形態が、退化して元に戻ったと見做しうる。

### Ⅴ　期

終熄の時代である。両耳甕や浅鉢など重要な器種が抜け落ち、深鉢もすっかり平準化する。大深鉢に次ぐ位置にあった渦巻文深鉢は姿を消す。そのことと関連するかのように、大深鉢からも唐草風の渦巻文が失せている。深鉢のほとんどは、Ⅳ期の条線文地の跡を継ぐ「ハ」字状文や櫛歯状工具による短い条線を施したものである。これらは**笹杢目文地深鉢**とでも総称したらどうだろうか。そのなかに、前代からの横帯区画文を口縁にとどめる深鉢が点在している。唐渡宮42がそれ。

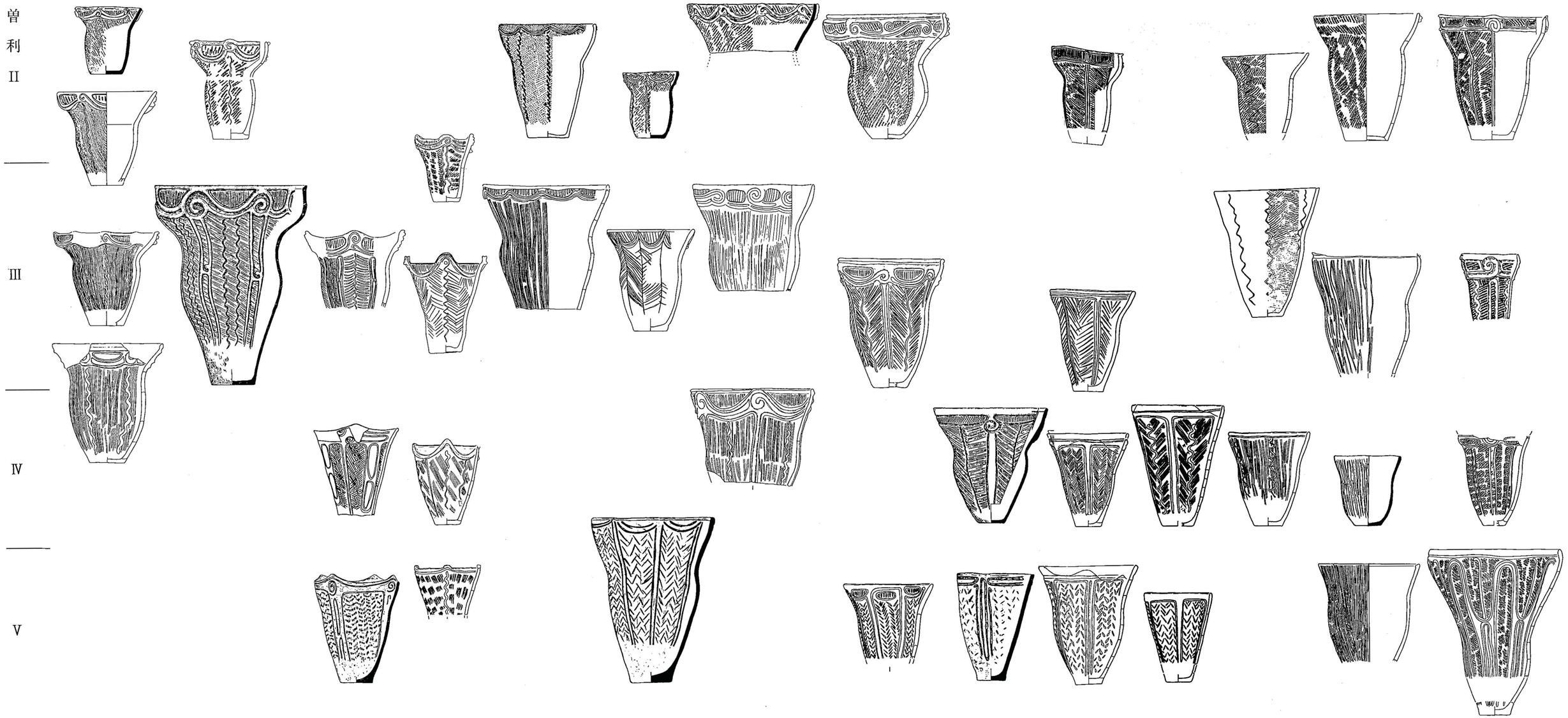
別にもう一つ目を引くのは、口縁に渦巻文が表され、しばしばそれら4個所の口唇が山形に突出する深鉢である。これは、どちらかといえば、肥厚帯口縁系の流れを汲むものである。やはり数は少ない。唐渡宮44はその仲間。口縁部のかような渦巻文は、二の項でみた曽利Ⅰ期の大深鉢のそれと基本的に同じである。土器文様における中期的な思惟の、最後の発露と言える。

Ⅳ期からⅤ期へと進行した諸器種の脱落と深鉢の平準化は、とりもなおさず、生活の多面性や生活を律する四季折り折りの伝統的祭礼が失われていったことを反映するものと、理解すべきだろう。

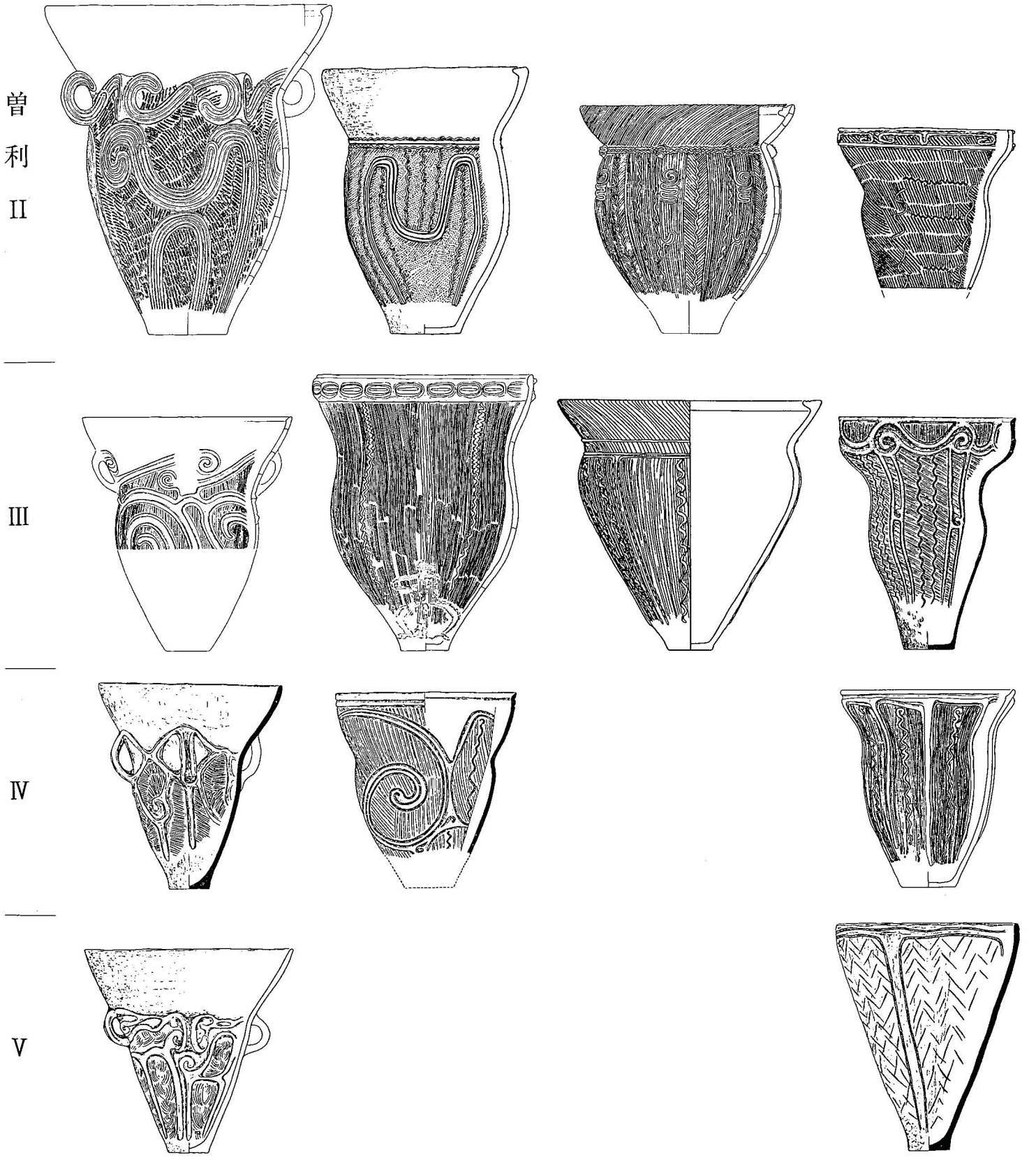
### 各器種のなかの大深鉢

以上、Ⅱ期からⅤ期に至る深鉢諸器種の系統と組成を眺め、それらの秩序ないしは格式といったことを確かめた。

さて、ここで気付かれるのは、それぞれの種のなかにX字状把手付大深鉢に比肩する大型品が存在することである。口径40cm・高さ50cmに達し、さらにそれを上回るような作が、ぽつんぽつんと見出される。これら大深鉢は、種の頂点に立ち、種を代表する格を有すものと捉えられないだろうか。深鉢群総体の頂点に位置するX字状把手付大深鉢に次ぐ役割を担った礼器だ、と考えられるのである。中にはX字状把手付大深鉢を凌ぐ威風の作もあるから、その地位は相当なものとみなくてはなるまい。




第199図　縄文地深鉢，加曽利E系深鉢から横帯文口縁深鉢，条線文地深鉢への諸系列　(1/6)




第200図　諸　種　の　大　深　鉢　(1/12)

左列より　　唐渡宮・茅野和田・居平・曽利，曽利・唐渡宮・大畑，唐渡宮・頭無，曽利・同・柳平・居平

その点で注意されるのは、Ⅲ期の唐渡宮例やⅤ期の居平例のごとく、屋外埋甕として用いられた出土例が認められることである。そうした出土のし方は、X字状把手付大深鉢の性格を示すものとして先にあげておいた。

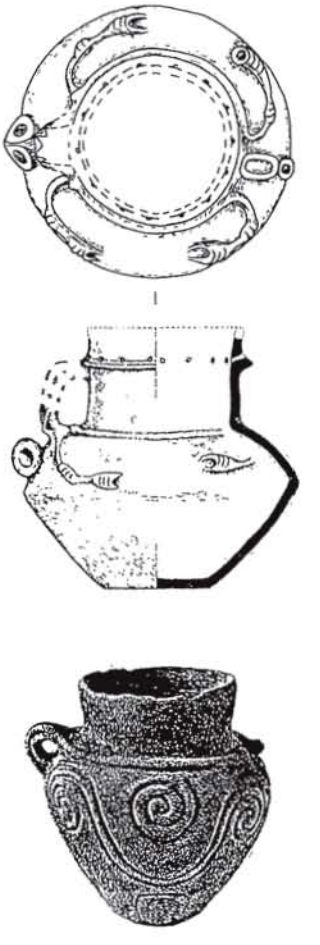
ともあれ、深鉢諸種の秩序や格は単純に並ぶものではなく、重層的な組成をもつことが疑いない。

## 五　両耳壺の性格

前の項でふれたⅢ式成立の社会変化に関連して、ここで両耳壺の性格を考察してみよう。Ⅲ期になると有孔鍔付壺の系統が四通りの形式に枝分かれすることは、一の項でみた通りである。そのなかでも、広口壺・短頸壺と両耳壺は対峙し合っているようにみえる。その点が図像の方面より明らかとなる。

まず両の耳、つまり一対の双環状把手が蛙の眼に由来する造形であることは、二の項で述べたことと同じである。これら両耳壺に最も近いのは、井戸尻出土の有孔鍔付壺であろう。以前に検討したように、その土器の図像は真上から眺めるように出来ている。すなわち壺の口じたいが蛙の胴体であり、故にその暗い口が光らざる朔の月に見立てられている。してまた、その中で醸された雑穀酒が月の不死の水に擬せられていたと推量される。[16] 従ってこれに照らせば、両耳壺は、その口もしくは器体を胴とする一身双頭の蛙だと解釈される。蛙の眼である把手が斜め上向きに取り付けられていることも、そうみることによってこそ納得がゆく。その眼の表現は、Ⅲ期の肥厚帯口縁にみる円文と同様である。横S字状文とともに口縁に並ぶ円文の何たるかが、ここでとらえられる。

つぎに、広口壺あるいは擬耳短頸壺が唐草系の文様で飾られているのに対し、いくつかの例外はあれ、両耳壺の器腹を飾るのは在来系の文様である。すなわち、二の項でみたような眉月文、手が蕨手状に巻く前肢、蛙の胴を表す渦巻文などが描かれているのである。言うまでもなくこれらの図文は、一身双頭の蛙に見立てられた両耳



第201図　両耳壺の図像　(1/9)

上；井戸尻　　下；久保地

壺の造形に一層の意味を与えている。

こうして両耳壺には、藤内・井戸尻期からの伝統的な図像、つまり月の不死の水の思想が色濃く表されていることが看てとれる。ところで、藤内期の有孔鍔付樽の中には肩部に一対の、蛙の眼たる双環突起を有すものが少なくない。その点からしても、両耳壺の形態はひとつの祖先返りと言えよう。他方、その外傾気味に開く口縁の形状は素文口縁深鉢のそれ、あるいは両耳甕のそれによく似ている。これまた唐草文系に非ず、在来の形制である。

さて一方、広口壺や短頸壺もそのつもりになってみると、似たような点に気付く。あえて擬耳短頸壺と呼んでおいた類は、二条の低い鍔または鍔と渦巻文とが橋のような小さな耳で結ばれている。実は、そうした手法は新道期から藤内期の壺や樽においてしばしば使われたものなのである。その辺を案ずるならば、この種の壺の性格に見当をつけることができよう。これに対して小孔が鍔に穿たれた広口壺は、短い口縁が内傾して鍔釜形を呈するのが印象的である。その形態は、どこか前期末の有孔土器を思い出させる。はるかな祖先返りとみられないこともないだろう。だが片や、その内向きな口縁の形状はⅢ期の唐草文系の無頸大深鉢のそれに似ているではないか。同深鉢の短い口縁の直下には鍔に相当するような隆帯もまわっている。器腹に描かれた文様については先に述べた通りだ。してみると、この種の広口壺は、唐草文系文化の要素を多分に反映して成立したものとみるほかない。

第202図　広口壺の形制　(1/8　左右とも海戸)

簡単に見渡してきたが、以上によってⅢ期の壺類における対峙の図式が問題にのぼってきたことと思う。広口壺が唐草文系文化の主導下に生まれたものなら、両耳壺は曽利系文化ほんらいの伝統を守るべく復古的に作り出されたものだと言える。改めて注目されるのは、両者とも口縁の形制が各々の大深鉢と共通することである。唐草文系文化における無頸大深鉢もしくは大甕の用途と性格については不詳だが、その大きさからしても曽利文化の大深鉢に対応するような存在と目される。[17] いっぽう先にみたごとく、Ⅴ期には唐草系渦巻文深鉢が姿を消すと同時に大深鉢からも唐草文が失せる。壺類はというと、問題の広口壺ほかがやはり姿を消し、ひとり両耳壺のみが健在である。これらのことは無関係でありえない。すなわち、新穀を炊く大深鉢が深鉢の中で最も重要な礼器であると同様、酒壺も欠くことのできない存在であったからである。

ともかく、Ⅱ期末における唐草文系文化の浸潤のなかにあって大深鉢の方はその主文様を受

け容れたものの、こと酒壺に関しては在来の思想を一歩も譲らなかった。そこに同時代の人々の酒壺、ひいてはそれによって醸される酒に対する強い執着心を見取ることが出来る。酒壺こそ祭事において中心的役割を果たす、最も大切な礼器だったにちがいない。

さて、対峙の様子は概念的につかめたものの、現実にどういうことが起こり、両者が実際にどう使い分けられていたのか等々、具体的なことには手が届かない。それには勿論、別な方面を含めて総合的な視点からの考察が必要だ。ただ、壺の問題に限ってみても、唐草文が何を表しどのような思想を表象したものかを明らかにすることなしには、これ以上の進展を望めない。

## 六　両耳甕をめぐって

II期に出現する両耳甕は曽利期に固有な器種であり、中期前半に系統をたどることはできない。だから、その用途ないし性格は同期の食生活の固有性にかかわり、ひいては曽利文化の性格を決するほどに重いと予測される。以下、探ってみることにしよう。

### 1　器形の特徴と類例

はじめに器形の特徴と類例をざっとみておこう。一の項で述べたように、両耳甕とは、素文口縁が大きく開口し、「く」字形に折れ返る肩部を有す甕である。肩には一対のX字状把手が付き、ふつう肩部にのみ区画文の文様帯がめぐる。出来は普通並みである。

これまでに形の知られるII期の類例は、居平・曽利・柳坪・大畑・居沢尾根・穴場などの遺跡から出土している。それらに今回報告の坂上11が加わる。坂上例を除く諸例の肩部文様帯はみな似通っており、一系的に並べることができる。II期の特徴は、「く」字状の折れ返りがきちんとしていること、口径の割に丈が低めな傾向である。大きさでは、口径40cm前後，高さ32cm前後といったところが典型例である。

ついでIII期の類例は、曽利・甲六・柳坪・頭無・久保屋敷・茅野和田・よせの台・長塚などの遺跡にみられる。「く」字状の折れ返りが緩くなり、口径の割に丈高な傾向となる。肩部文様帯は長方形の区画文と化す。大きさは、口径30～40cm，高さ30cm前後である。

IV期では、曽利・柳坪・頭無・荒神山などの出土例がみられる。それに今回報告の居平21ほかが加わる。肩部の屈折はいっそう弱まり、両耳の把手が付かないものがある。口径がやや減ずる。いまのところV期で全形のわかる例はない。V期には姿を消すとみられる。

ちなみにその容量を量ると、III期の甲六例では肩まで三升、頸まで五升、口縁いっぱいで8升はいる。IV期の曽利例では頸まで3升5合、口縁いっぱいで7升が入る。

### 2　大深鉢ならびに両耳壺との比較

さて、両耳甕の用途や性格に思いをめぐらすときに、真っ先に対比されるのはX字状把手付大深鉢であろう。その口縁と両耳の把手の様、大深鉢に迫らんとする口径の大きさ、II期に

出現し普遍化しているところなど、いかにも大深鉢との兄弟的な関係を示唆される。だが、共通性をとらえるだけでそこから先に進むべき手懸かりが見当たらない。

つぎに較べられるのは、両耳壺だろう。これも素文口縁と両耳たる把手が基本的に通ずる。それにⅢ～Ⅳ期、肩の屈折が和らいだ両耳甕の器形は両耳壺の側に一歩近寄るように見える。居平21がちょうど好例で、しかもこれの場合、器壁が薄手で内外が丁寧に磨かれ、内壁に黒い漆様の塗料が塗られている。明らかに通常の両耳甕とは異なった作りだ。同じく唐渡宮91も変わっている。短頸広口壺に近い器形なのである。してみるとまた、両耳甕の肩部を画する上下の低い凸帯が気にかかる。特に上側つまり頸部にまわされた凹帯は、壺類の鍔に対応するかのようだ。

いっぽう、壺の側にも両耳甕に近い要素を帯びた作例が認められる。それは与助尾根17号址・山形村洞（ほら）2号址・同殿村（とのむら）27号址から出土した狭口壺である。いずれも曽利Ⅲ式に並行する時期の作だが、その肩部文様帯は両耳甕のものを援用している。

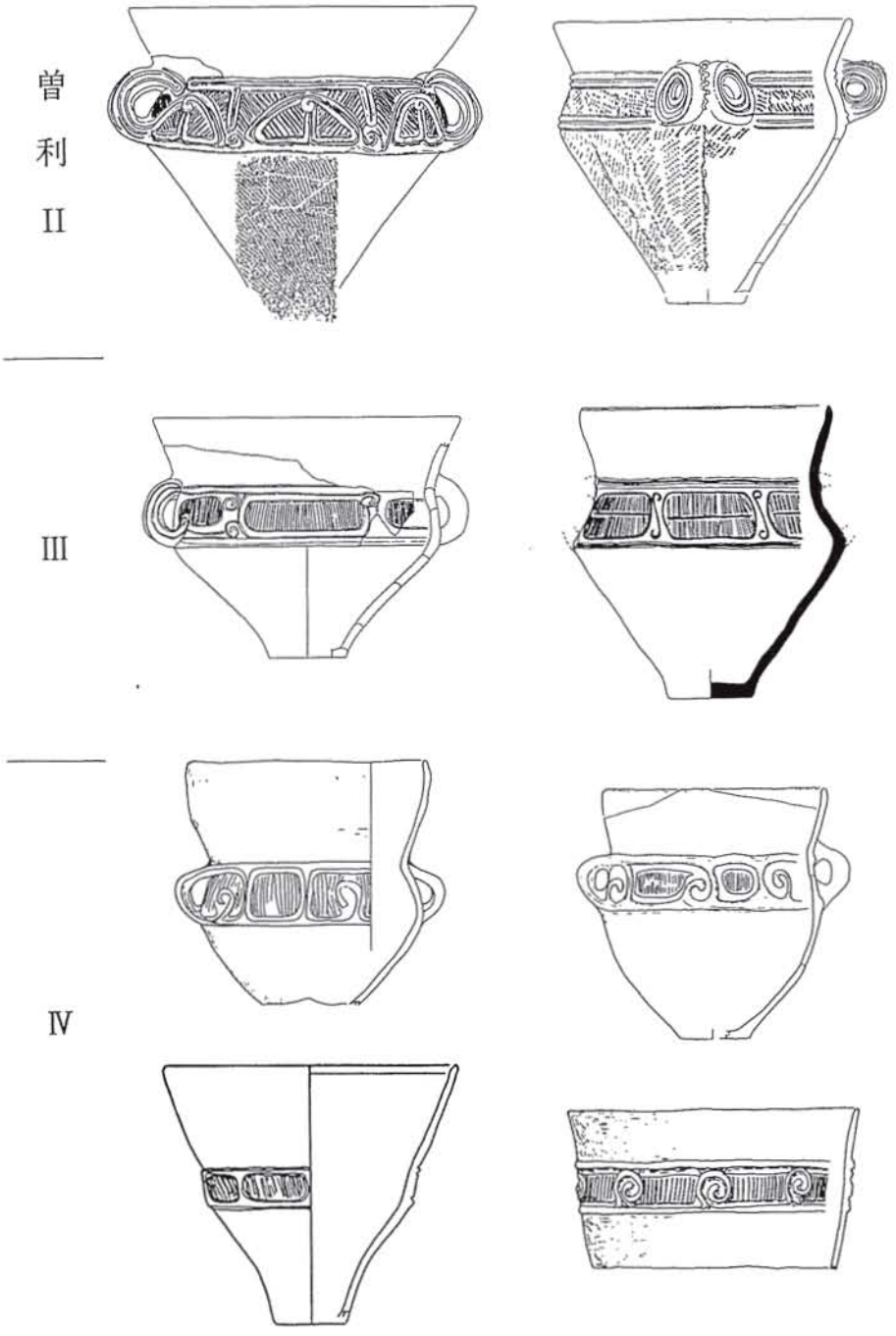
こうして双方に、互いに相手方の要素を取り合わせた作例が若干なりとも存在することは注目に値する。例外的には、各々の使い途なり性格の一部が重なり合うことを意味するからである。少なくとも、何か食料を容れる貯蔵用の器であろうと考える手懸かりにはなる。あるいは水甕のような用途も想定しうる。けれども具体的な内容に迫るには、なお材料不足である。

### 3　浅鉢との関係

ところで、「く」字形に折れ返る器形に着目するとき、類比されるのは浅鉢である。一の項で述べたように、Ⅱ期の浅鉢には口縁が軽く流れるような「く」字状に折れ返るものが目立つ。同様な器形はⅠ期にもあり、井戸尻期まで遡るようだ。例外的だが、それらの中に肩部文様帯を有す例が認められる。頭無12号址と塩山市牛奥遺跡から出土したⅡ期も末頃の浅鉢で、長方形の区画文をもつ。後者は赤色顔料が塗布されている。

これに関して注目されるのは、丹沢山麓の神奈川県山北町尾崎遺跡から出土した耳無し甕である。口径45cmという大形品で、赤色塗彩されている。やはりⅡ期末に並行する頃の作で、肩部の文様は前二者とよく似る。そこでは赤色塗彩と肩部の文様と、互いに相手方の要素を取り交わしている。なお関連して参照されるのは、古く塩尻市平出遺跡から出土した両耳甕である。X字状把手が4個付くから四耳甕と言うべき一風変わった作りのもので、Ⅱ期に属すとみられる。その口唇から内面にかけては赤色顔料が塗布されているという。

Ⅰ期に遡ると、瞠目すべき作例がある。それは、松本平の波田村麻神（おがみ）遺跡から出土した底部穿孔の完形浅鉢である。「く」字形にはっきりと折れ返る肩部といい、口径40cm，肩部の最大径46cmに達する大きさといい、肩部文様帯といい、両耳甕の祖形として申し分ない特徴をそなえている。佳作品にして、通常な浅鉢の範疇を脱した形態である。これと同様な例が、松本市の前田木下遺跡から出土している。それは口縁外面の上半部が赤彩されているという。肩部文




第203図　両耳甕の変遷　(1/9)

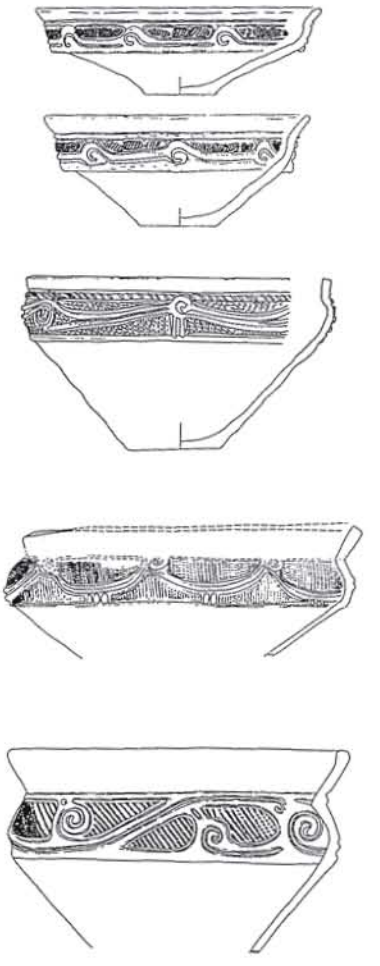
各段左右　　穴場・坂上，よせの台・甲六，曽利・居平，頭無・曽利

様帯はないが、今回報告した唐渡宮6もこれらに類似した器形である。

ここに浅鉢と両耳甕の中間に位置し、両耳甕の祖形となりうるものの存在が明らかとなった。差し当たって、この種の浅鉢を有肩浅鉢と呼ぶことにしよう。

手懸かりとなる材料を求めて見渡す地域が、八ヶ岳山麓を措いて松本平や関東方面へと広がってきた。麻神例に近似した有肩浅鉢の類例を探すと、前出の神奈川県尾崎，相模原市当麻，日野市平山橋，小金井市中山谷といった遺跡にみられる。いずれも完形品ではないが、尾崎例以外は肩部最大幅が50cmにも及ぼうとする大型な作である。平山橋例は肩部文様が麻神のものに近似し、そこに赤色顔料が付着しているという。当麻では互いに酷似した2例が報告されている。これらの時期については微妙な判断を要するが、まず曽利Ⅰ期からⅡ期初と目される。

Ⅱ期に出現する両耳甕の祖先たるⅠ期の有肩浅鉢が、現下のところ曽利文化圏の中心部にはみられず、唐草文系文化圏の松本平や加曽利E文化圏とが重なり合う相模原台地・多摩丘陵・武蔵野台地方面に見出されることは、何かしら暗示的だ。しかもそう思ってみると、気になるのは麻神例の肩部文様である。沈線で同心円を描くような手法は、関東地方の曽利Ⅰ並行期の深鉢に特徴的なのである。してみると、麻神例は彼の方面からの移入品ではないかという疑いがでてくる。少なくとも関東方面に出自系統を求めることはできる。



第204図　加曽利E式の浅鉢と耳無甕の類縁関係　(1/9)

上から　坂東山，同，花影，秩父山，伊勢原市御伊勢森

### 4　加曽利E式の耳無甕

関東に視野が移ったところで、改めて両耳甕の分布を眺めてみよう。いったい両耳甕というのは、曽利式土器文化に固有な器種である。唐草文系土器の器種組成にこのような甕は存在しない。ところが、加曽利E式土器の組成には同形態の甕が普遍的にみられる。ただし、一対のX字状把手が付かない無耳甕である。無耳甕というより耳無し甕という方が呼称し易い。肩部文様帯は、縄文地を特徴とする加曽利E式

の横帯文となっている。関東地方にはまた、曽利式系の肩部文様帯をもつ耳無甕が、Ⅲ式並行期以降たくさん混在する。逆に今回報告の類例中には、従来しられていなかった加曽利E系の耳無甕が若干みだされる。坂上35がそれで、向原5も同系らしい。

さて、関東にあっても加曽利E式の耳無甕は曽利Ⅱ並行期に確立する新器種である。その古手の耳無甕には、口縁の丈が3～4cmと短いものがみられる。上尾市秩父山，埼玉県伊奈町大山，船橋市高根木戸といった遺跡から出土している。いっぽう加曽利E式の浅鉢はというと、やはり肩部文様帯を有す例がある。入間市坂東山，坂戸市花影，岩槻市西原など埼玉県下の遺跡から出土している。曽利IからⅡに並行するとみられる時期のものである。こちらは口縁もしくは頸の丈が2cmほどである。双方を並べると、連続的な類縁関係にあることが争われない。つまり、加曽利E式文化の中心地帯においても、耳無甕と浅鉢とは因縁浅からぬことが知れる。

### 5　関東の有肩浅鉢

ところで、関東地方の該期の浅鉢に目を移したときに気付かれるのは、「く」字形に折れ返る肩をつくり、そこに横帯文様を施したものが顕著なことである。井戸尻Ⅲから曽利Iに並行する時期で、井戸尻文化すなわち関東の勝坂文化の系統の器種であって、加曽利E式ではない。八王子市椚田第Ⅳ遺跡，横浜市宮の原貝塚，小金井市貫井，船橋市高根木戸などの遺跡に見出される。頸部の丈は3～5cmほどである。

これらの浅鉢と先にあげた麻神型の有肩浅鉢とを較べてみると、両者の器形は著しく接近している。麻神型の方は頸つまり口縁の丈が5～6cmで、「く」字形の屈曲が一層つよく、器腹が算盤玉形を呈する。そして大型である。まさに、井戸尻Ⅲないし曽利I並行期の有肩浅鉢の発展形態として、曽利I新もしくは曽利Ⅱ初並行期の大型有肩浅鉢が存するのである。

こうしてみると、Ⅱ期に出現する両耳甕の直接の祖形となる麻神型の有肩浅鉢が西関東に見出されることも、理にかなっている。中部地方の井戸尻Ⅲ期には、もともとそうした有肩浅鉢が無いのだから。

### 6　両耳甕の成立

ごくおおざっぱであるが、関東地方の様子を眺めてきた。以上によって両耳甕が出現する道筋が見えてきたと言えよう。すなわち大筋として、井戸尻Ⅲ並行期の関東の有肩浅鉢――曽利I並行期の西関東の大型有肩浅鉢――八ヶ岳山麓の曽利Ⅱ式両耳甕という過程である。前二者の関係はいいとして、後二者の関係は当然にも重要な問題をはらんでいる。両耳甕の用途や性格を規定するほどの内容である。ただし道のり上、両者の中間たる甲府盆地東辺の様子が現在のところ不明だから、そこが一つの盲点となってはいる。

関東の有肩浅鉢の西漸の結果として両耳甕が生まれた背景には、勝坂期末における東北の大木系文化の南下と加曽利E文化の生成という事態があろう。つまり、勝坂文化に独自的な有

肩浅鉢は西関東に退きつつも形態発展し、さらに総本家筋たる八ヶ岳山麓方面で両耳甕に変じた、と解釈される。かたや中部においても、唐草文系文化の成立という事態が生起している。藤内・井戸尻文化圏を割るような分裂的状況である。ともかく、そうした一連の激動の中で両耳甕が形づくられたことは確かである。II期に「く」字状に軽く折れ返る浅鉢が流行するのも、両耳甕の成立と大いに関係ありそうだ。

ここでひとつ注意されるのは、肩部の文様である。II期の両耳甕の中でも居平，曽利，居沢尾根，穴場の諸例は器形・文様ともに最も古式な作と目される。ところが、その三角形をなすような区画のし方と斜方向の竹管文は、在来の手法ではなくて、I～II式並行期の唐草文系土器に認められる施文法なのである。このことは、一の項でふれた重弧文・籠目文深鉢の出自と何か符合しているように思える。現に、唐草文系深鉢の坂上10にみるような羽状の竹管文地が、坂上3，向原9，唐渡宮27で使われている。とすると、用途の上でも両者は何らかの関係をもっていると案ずることもできよう。

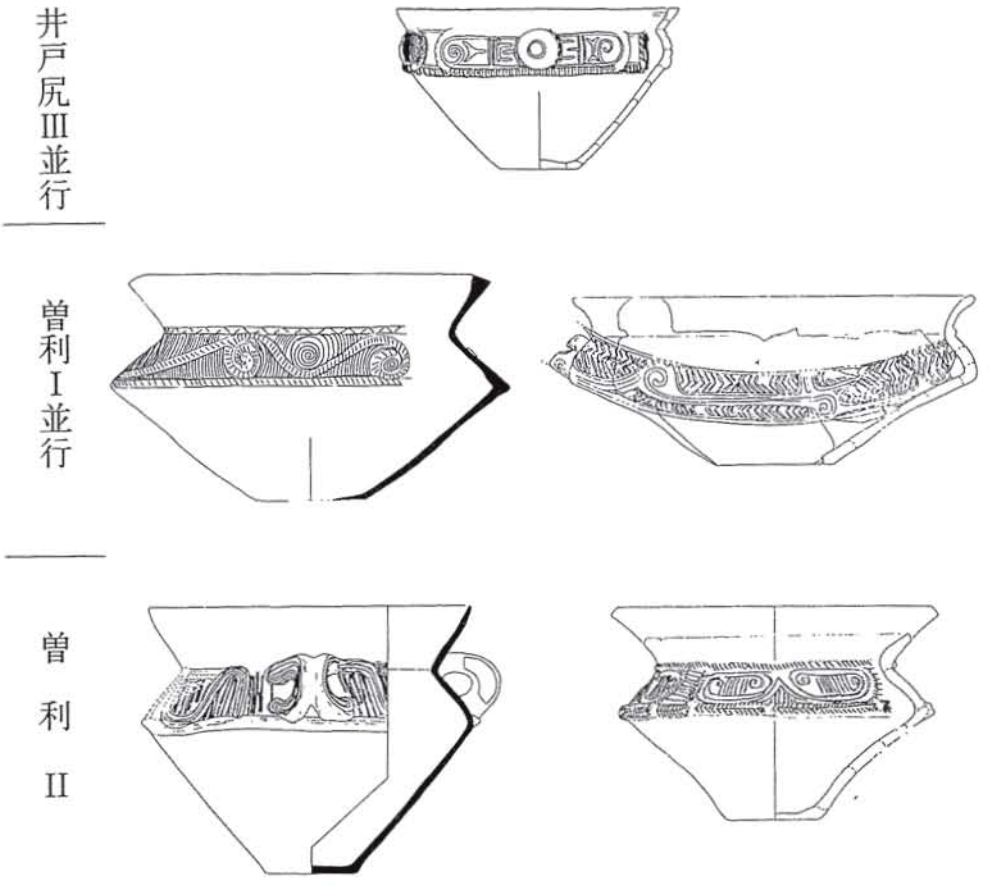
ところが他方、左右寄り添うような区画の隆線、それが蕨手状に巻く様は、II期の加曽利E系深鉢の口縁横帯文の手法と共通する。これまた見過ごせない要素である。

いっぽう関東では、大木系文化の波をかぶって加曽利E文化が生成したが在来の有肩浅鉢の伝統は受け継がれ、加曽利Eの耳無甕が確立した。総じて古手の作でも器腹の屈曲は比較的やわらかく、曽利II式の両耳甕のようにきつくはない。その点をみても、西関東の大型有肩浅鉢の直接的な系譜上にあるものとは言えない。同浅鉢の直系たるII式並行期のそれは、八王子市下寺田遺跡から出土しているくらいで、今のところ類例が少ない。III式並行期以降に流布する、曽利系の肩部文様帯をもつ耳無甕の下地をなすものである。要するに関東では、加曽利E式に取り込まれたものと、然らざる在来的なものと、二つの系譜の耳無し甕が混在しているのである。

### 7　両耳甕の用途

両耳甕は関東の有肩浅鉢に出自するとの見通しが得られた。浅鉢との縁戚関係は疑うべくもない。したがって、両耳甕の性格と用途もまた有肩浅鉢に発するとみなければならないだろう。けれども、前提となる関東の有肩浅鉢の用途が明らかなわけではない。さし当たっては、浅鉢一般との類縁関係を念頭において考えるしかなく、肝心な問題に移るや具体的な手懸かりは閉ざされている。

浅鉢の用途については、一の項でみておいた。第一義的には、粉を捏ねて団子や餅の類をつくり、それを盛る器である、と。だが、有肩浅鉢なかんずく曽利I式並行の大型有肩浅鉢の器形は、その使い途に適さない。明らかに貯蔵用の形態をそなえており、両耳甕に至って深さを増し、貯蔵器として完成される。すると両耳甕は、粉もしくはそれに近いものを溜めおく器ではないかと、まず考えられよう。




第205図　有肩浅鉢から両耳甕・耳無甕へ　(1/9)

上；椚田　　中左；麻神　　中右；当麻　　下左；居沢尾根　　下右；下寺田

ところで先に較べてみたように、両耳甕は大深鉢と両耳壺に比肩する形制をそなえている。新穀を炊く礼器や酒壺と並ぶほどに重視された貯蔵器なのである。してみると、その中に溜めおかれたのは、当時もっとも重視されていた食糧、しかも通常の雑穀とはちがう特殊なものだろうと考えざるをえない。

形態から考察しうることは、ここまでである。あとは肩部にめぐらされた区画文の意味が問題となる。だがそれも現下では、区画された畑の様を表すと解釈されるにとどまり、内容物を特定するほどの意味は見出せない。これより先は、仮説として或るものを想定するほかないようだ。

思うに、その中身は小麦粉ではなかったろうか。普通には、小麦を石うすで碾いた粉である。ところがもうひとつ、バルガーという麦粉があるという。中尾佐助『料理の起源』(NHK ブックス　昭47) に以下のようにある。

「バルガーというのは、主として小麦からつくる特別な興味深い加工品である。これについ

てはすぐれた説明がすでにあるので、それを引用ししてみよう。

バルガーは、小麦粉が長く耕作されてきた主として西アジアおよび北アフリカ地域で行われてきた古い方法である。―中略―古くから、バルガーは収穫後まもない小麦全量を最小量の水（私が聞いた例では多量の水を使用する）とふたのない容器で、軟らかくなるまで煮ることによってつくられる。次いでこの小麦をうすく広げて日光で乾燥する。通常、乾燥した小麦に水をかけ、粒を手でこすることによって、ふすまの粗粉を除去する。澱粉の糊化のため、ガラス状になった穀粒を次に石の間、またはヒキウスで破砕する。できあがった製品がバルガーで、家庭でしばしば大きな陶器の中に貯蔵する。このように貯蔵されたバルガーは貯蔵力にすぐれ、寄生動植物から保護される。これは食用には必要に応じて蒸すか煮るかする。―略―」

そして同氏は次のように述べている。「――野性のコムギや野性の大麦は裸でない皮麦である。古代エジプトのピラミッドをつくっていた頃のコムギは、皮型のエンマーコムギであった。この皮型の小麦や皮型の大麦の加工法としては、バルガーはすこぶる適性があると考えられる。それ故、このバルガーは非常に古代的な加工法がいまに残ったものと考えたくなる。その点、バルガーの分布地域が、小麦の発生地、またはその近傍地帯に限られる点は以上の推論とよく一致する。」

これらの記述はたいそう魅力的である。単なる小麦粉ではなく、バルガーのような麦粉を想定してもよいのではなかろうか。

翻って、『曽利』において武藤雄六は、両耳甕を麦作主体の農耕文化に関連する酒造具と予想した。ここでの推定は、麦粉の貯蔵ということになったが、いずれにしても、より大きな問題として中期後半における麦の栽培ということが論点にのぼってきたようだ。中期の後半を麦作主体の農耕文化としてとらえるという着想は、もともと武藤雄六による縄文農耕文化論の構想の一環として始まった。[18] その仮説にそって、いくつかの論考も発表されてきたが、[19] 未だ組織的にこれを論証するには至らない。ともあれ、このような推定を採ることによって、両耳甕もその構想に参加することになったわけである。

## 結　び

八ヶ岳山麓における曽利II～V式土器の器種組成と、その用途について一通りの検討を行ってきた。はじめ述べたように、遺物として残された土器を使っていた同時代の人々の生活文化に少しでも手を触れたいというのが、基本的な態度である。その具体的な暮らしぶりにいかほど近づくことが出来たのか、はなはだ心許無い。けれども、そうした本来あるべき土器論の地平を眺望することは、未熟ながらあるていど開けたように思う。単なる遺物の世界から生活用具の世界へと、われわれは地歩を固めてゆきたい。

小稿の作成にあたっては、末木　健・佐野勝広・平出一治・守矢昌文・高見俊樹・長崎元広・島田哲男の諸氏に種々の御手数をかけた。厚く御礼申し上げる。

（小林　公明）

注

（1）米田明訓「曽利式土器編年の基礎的把握」　長野県考古学会誌30　1978
長崎元広ほか中部高地縄文土器集成グループ『中部高地縄文土器集成』第1集　1979
能登　健・石坂　茂「重弧文土器の系譜」　信濃32―4　昭55
神奈川県考古同人会『シンポジウム　縄文時代中期後半の諸問題』　神奈川考古10，11　1980，1981
末木　健「曽利式土器」『縄文文化の研究』4所収　雄山閣　1981
長野県教育委員会『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―原村その4―』昭56
末木　健「曽利式土器圏縁辺部の様相」　山梨考古14　1984

（2）武藤雄六「中期縄文土器の蒸器」　信濃17―7　昭40

（3）中期の浅鉢を概観したものとして、末木　健「縄文時代前中期浅鉢形土器研究序論」（なわ17　1979）がある。

（4）長野県教育委員会『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―原村その4―』昭56
なお、末木　健氏は前注の論考で、柳坪・頭無両遺跡出土の何点かの浅鉢の内面底部に打耗痕がみられると述べている。また二次焼成を受けた例もあるという。

（5）因みに、下伊那地方ではこのような形式の一分派たる特徴をもった壺の完形品がいくつか出土している。

（6）武藤雄六「有孔鍔付土器の再検討」　信濃22―7　昭45
武藤雄六「有孔鍔付土器の文化的性格」　山麓考古5　1976
長沢宏昌「有孔鍔付土器の研究」　長野県考古学会誌35　1980
山梨県立考古博物館第2回特別展図録『縄文時代の酒造具』　1984
長沢宏昌「有孔鍔付土器とその用途実験」　甲斐路52　昭59

（7）この土器は、昭42年か43年頃、藤内遺跡の下手に位置する小平辰夫氏の豚舎近くの畑から、同氏によって発見された。地表下浅く、ローム上に斜め横倒しになっていたという。他に伴う遺物はなく、この土器だけだった。
胴下半の半分が欠損している。胴部上半には煤の吸着がみられ、内壁の腰の位置にお焦げが残る。口縁の一対の渦巻文は、互いにわずか異なる。

（8）小林公明「眉月の三姉妹」　山麓考古17　1986

（9）小林公明「月神話の発掘」　山麓考古16　1984

（10）注8の論考でいくらか言及した。

（11）人面の裏側の造形については、注8の論考でふれた。

（12）注8の論考で検討した。

(13)　注８の論考でみた。

(14)　注９の論考で検討した。

(15)　長崎元広ほか『中部高地縄文土器集成』第１集　1979
　　三上徹也「唐草文土器の成立とその分布」　歴史手帳14―２　昭61

(16)　注９に同じ

(17)　島田哲男「唐草文土器の文化」　山麓考古10　1978
　　長崎元広ほか『中部高地縄文土器集成』第１集　1979

(18)　武藤雄六「縄文農耕の素描」　山麓考古８　1977

(19)　長崎元広「屋外における石棒祭式」　信濃29―４　昭52
　　島田哲男「唐草文土器の文化」　山麓考古10　1978
　　武藤雄六「龍文の謎」　山麓考古10　1978
　　平出一治「土器埋設石囲炉についての覚書」　山麓考古11　1979

**引用した遺跡ならびに図の出典**

立沢　藤森栄一編『井戸尻』　中央公論美術出版　昭40

大畑　同上
　　武藤雄六「長野県諏訪郡富士見町大畑遺跡第三次発掘調査報告」　長野県考古学会誌３　昭40

居沢尾根　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―原村その４―』　長野県教育委員会　昭56

ワナバ　『土』８号―原村の考古学的調査―諏訪清陵高校地歴部　昭49
　　『原村誌　上巻』昭60

茅野和田　『茅野和田遺跡』　茅野市教育委員会　昭45

中原　『茅野市史　上巻』　昭61

与助尾根　宮坂英弐『尖石』　茅野市教育委員会　昭32
　　『茅野市史　上巻』　昭61
　　Ｘ字状把手付大深鉢の図は、尖石考古館の守矢昌文氏より提供いただいた。

与助尾根南　『与助尾根南遺跡』　茅野市教育委員会　昭55

よせの台　『よせの台遺跡』　茅野市教育委員会　昭53

阿弥陀堂　『構井・阿弥陀堂遺跡』　茅野市教育委員会　昭58

荒神山　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―諏訪市内その１・２―』　長野県教育委員会　昭49
　　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―諏訪市その３―』　長野県教育委員会　昭50

本城　同上

穴場　『穴場　Ｉ』諏訪市教育委員会　1983

梨久保　『梨久保遺跡』　岡谷市教育委員会　1972

海戸　『海戸　第１次調査報告』　岡谷市教育委員会　昭42
　　『海戸　第２次調査報告』　岡谷市教育委員会　昭43

長塚　『長塚遺跡』　岡谷市教育委員会　1971

月見松　『月見松遺跡緊急発掘調査報告書』　伊那市教育委員会　昭44

平出　『平出』　平出遺跡調査会　昭30

小段　『小段遺跡』　塩尻市教育委員会　昭54
洞　原嘉藤・藤沢宗平編『唐沢・洞』　長野県考古学会　1971
殿村　『殿村遺跡』　山形村教育委員会　昭62
麻神　『長野県東筑摩郡波田村麻神遺跡第２次緊急発掘調査報告書』　波田村教育委員会　昭48
九兵衛尾根　藤森栄一編『井戸尻』　中央公論美術出版　昭40
丸森　『丸森・小母沢遺跡発掘調査報告書』　富士見町教育委員会　昭50
居平　藤森栄一編『井戸尻』
　清陵高校地歴部報　復刊号　諏訪清陵高校地歴部　1968
新田平　藤森栄一編『井戸尻』
曽利　藤森栄一編『井戸尻』
　『曽利』　富士見町教育委員会　1978
井戸尻　藤森栄一編『井戸尻』
　武藤雄六・宮坂光昭「長野県諏訪郡富士見町井戸尻遺跡第二次調査概報」　信濃20―10　昭43
中六　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―富士見町内その１―』　長野県教育委員会　昭49
岩久保　『小渕沢町の原始古代遺跡―分布調査報告書―』　小渕沢町教育委員会　1979
柳坪　『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―北巨摩郡長坂・明野・韮崎地内』　山梨県教育委員会　昭50
頭無　同上
根古屋　『根古屋遺跡』白州町教育委員会　昭60
御所前　『津金御所前遺跡』　須玉町教育委員会　1987
坂井　志村滝蔵『坂井』　地方書院　昭40
須玉町出土土器　同上
久保屋敷　『久保屋敷遺跡発掘調査報告書』　山梨県教育委員会　昭59
牛奥　『牛奥遺跡調査報告書』　山梨県教育委員会　昭59
久保地　『都留市史　資料編』　昭61
当麻　『当麻遺跡』　神奈川県教育委員会　1977
御伊勢森　『御伊勢森遺跡の調査』　御伊勢森中世遺跡発掘調査委員会　1979
尾崎　『尾崎遺跡』　神奈川県教育委員会　1977
宮の原　『宮の原貝塚』　武蔵野美術大学考古学研究会　昭47
椚田　『椚田遺跡群』　八王子市椚田遺跡調査会　1979
下寺田　「下寺田・要石遺跡』　八王子市下寺田遺跡調査会　1975
平山橋　『平山橋遺跡』　東京西線及び北八王子変電所遺跡調査会　昭49
中山谷　『中山谷』　小金井市教育委員会　1971
貫井　『貫井』　小金井市教育委員会　1978
坂東山　『坂東山』　埼玉県教育委員会　昭48
花影　『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告―１―』　埼玉県教育委員会　昭49
秩父山　『秩父山遺跡』　上尾市教育委員会　昭53
大山　『大山』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団　昭57
西原　『東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書II』　埼玉県遺跡調査会　昭47
高根木戸　『高根木戸』　船橋市教育委員会　昭46

# 第三節　深鉢の煮炊痕

深鉢類に残された煮炊きの痕跡に関しては、『曽利』で基礎的な観察を行った。すなわち、煤とお焦げの相反的な関係ならびにその煮炊法についてである。ここでも同様に煤とお焦げの状態を図示し、多少の解釈を加えてみたい。[1]

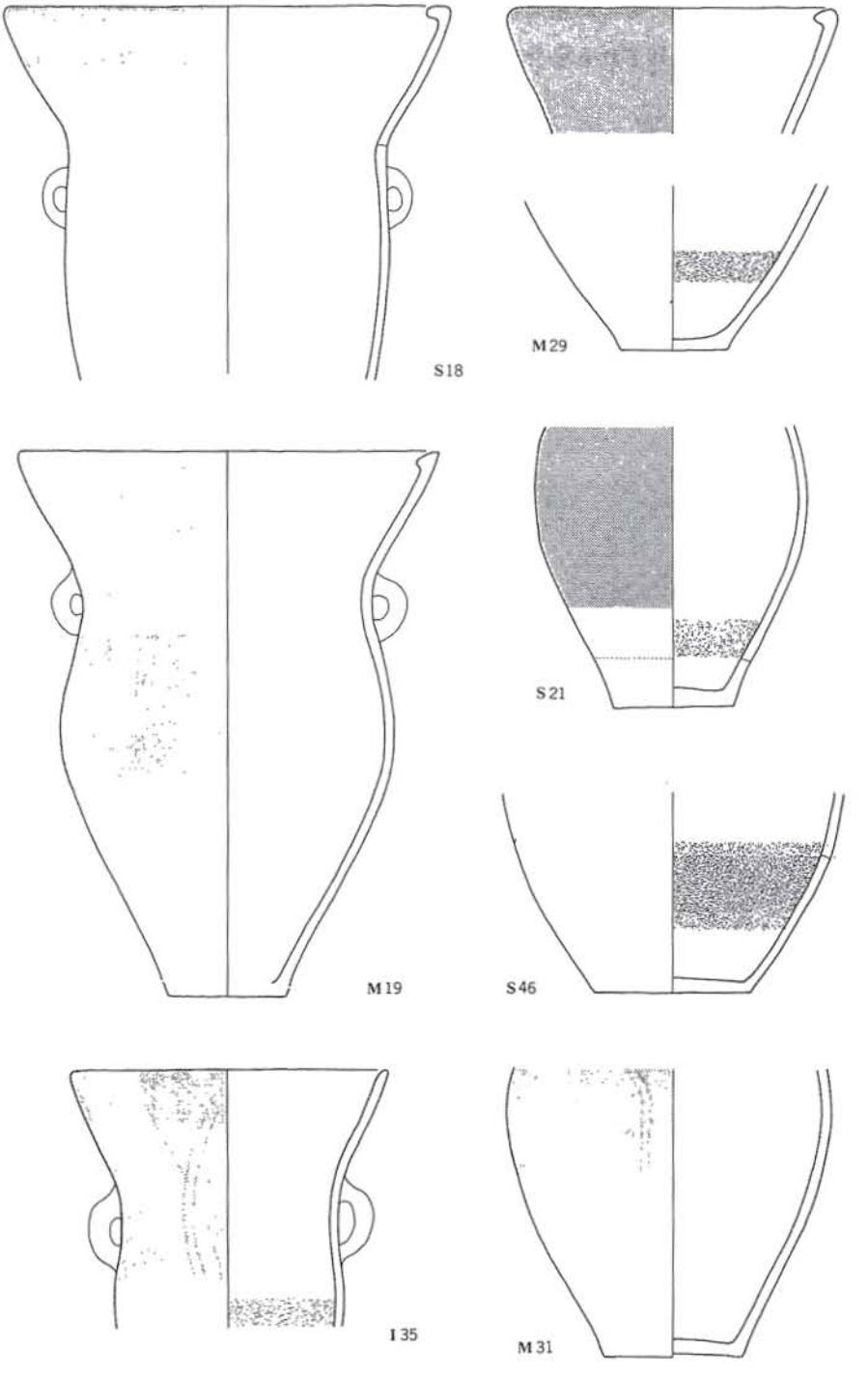
**器壁の観察**　図の左半分が外面の煤け、右半分が内面のお焦げのあり様を示す。外面に表した焦げつきのしるしは煮こぼれ痕である。外面の底部近くの破線は、器壁の色調の変わり目を示す。熾(おき)の炎によって鮮やかな赤褐色や橙褐色に焼かれた腰部に比べ、これ以下は灰の中にあって褪せたような淡い色調をしている。坂上21・25，向原20，坂上44・8，唐渡宮40・49，居平1・25，唐渡宮39・77などである。事実、坂上21は腰から底にかけて灰がこびりついた希有な例である。また坂上25，向原2・27，唐渡宮49・79・39の腰部の網目状のしるしは細かく割れていることを表す。熾の火熱に常時さらされて器壁が脆くなった結果である。

今回あらたに気付いたのは、一線を画した煤やお焦げ、ひいてはそれらの濃淡の度合すらが、しばしば器壁の粘土帯の境目に合致していることである。土器の製作にあたって積み上げる粘土の帯の幅は2～5cmほどだから、偶然の一致もないとはいえない。しかし多くの例をみると、これは製作時にまで遡る粘土帯相互のほんの僅かな差に因るものと推察せざるをえない。別々につくられた粘土帯の積上げ境で、熱伝導が微妙に変わるものらしい。坂上23，唐渡宮63・20，同98・44，同76，居平25などが好例である。

趣は異なるが、熱伝導の妙を示す例を向原34にみることができる。これの場合、熾の炎の立ち方にむらがあったらしく、外壁の煤は水平に一線を画すようには切れていないが、内壁の焦げつきも炎の立ち方に呼応するごとく出来ているのである。

**お焦げのあり方**　さて、煤の付着ないし吸着は器体の上半部に認められ、腰より下にはない。これに対して、内面の焦げつきのあり方はおよそ三通りある。最も多いのは、胴下半部あるいは腰部付近に一線を画して付き、外面の煤けと相反して重ならない。ときに1～2mmに達する厚いお焦げがみられる。図示した108例中の4割余りを占めている。これらに準ずるものとして、胴下半の焦げつきが上半部にも及び、その分が外の煤けと重なる例が1割余りある。二つには、内面のほぼ全体に認められる場合であり、2割半に達する。三番目は内面の上半部もしくは口縁近くにみられ、外面の煤けと重複している。お焦げというより炭化した煮滓と呼ぶべきものである。これは少なくて1割弱ていど。それに、煤けはみられても焦げつきの認められないものが1割ある。因みにこうした比率は、『曽利』でまとめた場合と近似している。

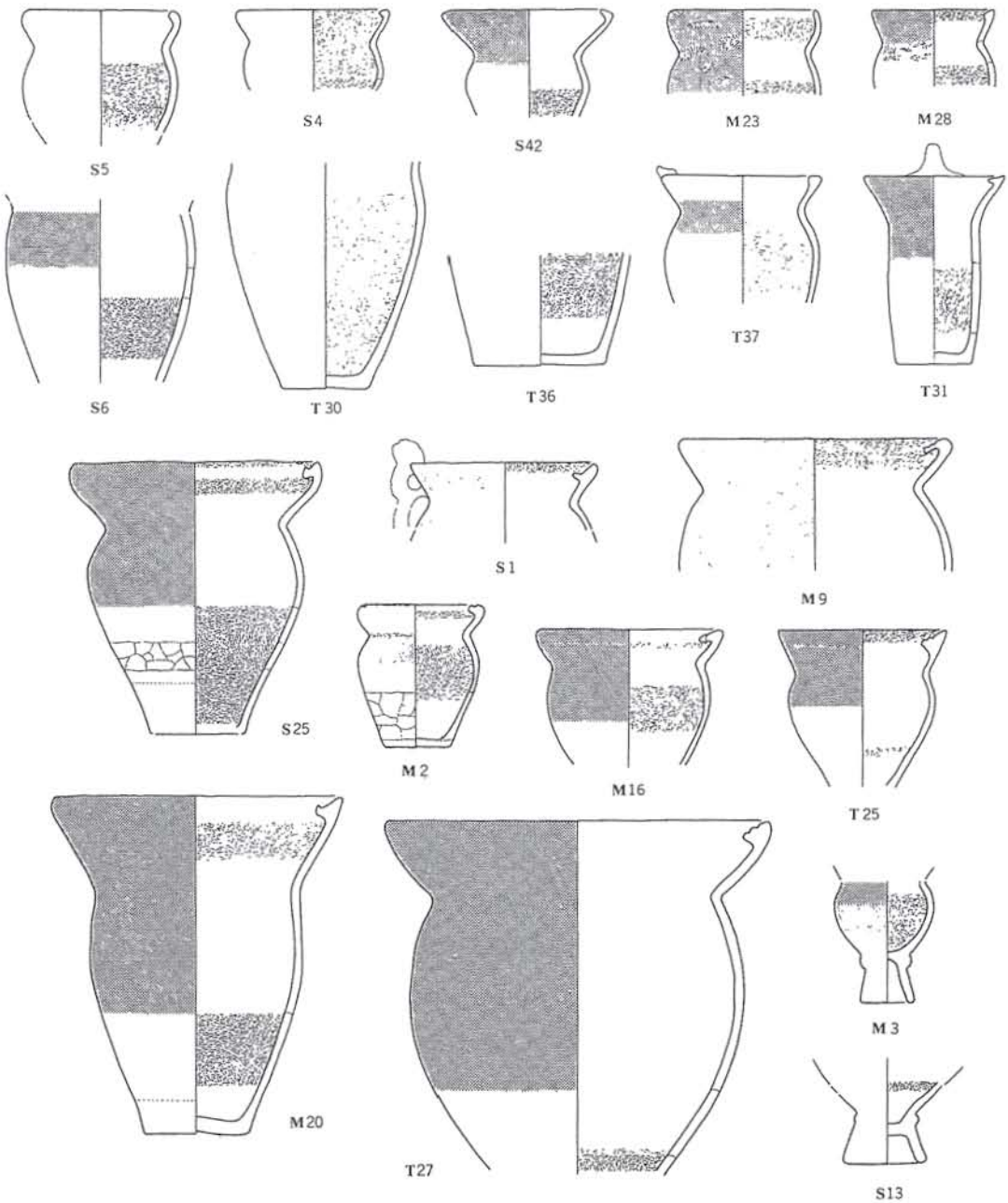
このような焦げのあり方の差は、内容物や煮炊法の違いにもとづくと考えられる。先に『曽




第206図　X字状把手付大深鉢の煮炊痕　(1/9)

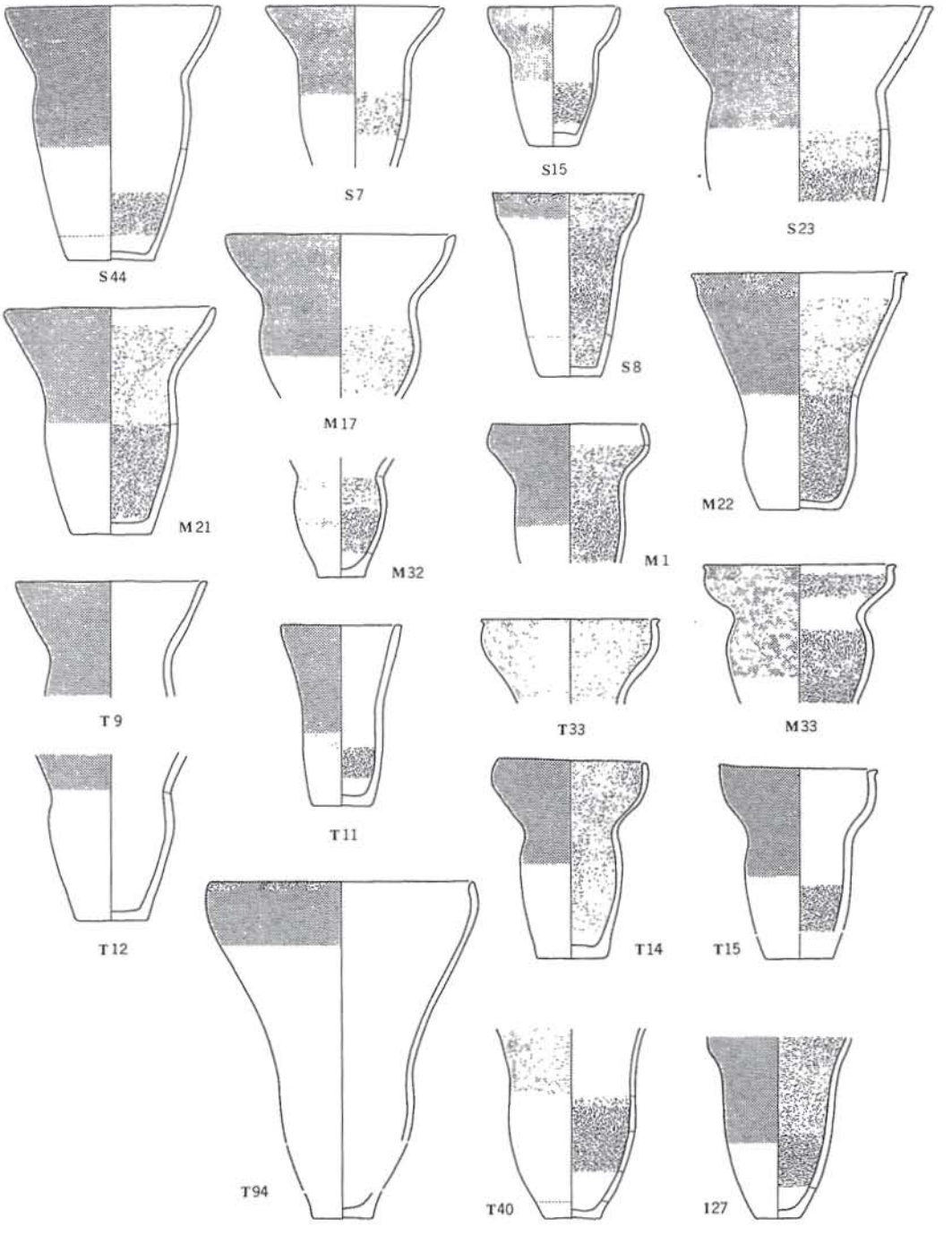
〈略号〉　S；坂上　　M；向原　　T；唐渡宮　　I；居平（以下212図まで同じ）

利』で考察したように、胴下半部あるいは腰部付近に一線を画してみられるお焦げは、穀物の粥や飯を炊くときに出来たものに相違ない。これと正反対なのは、内面上半部もしくは口縁付近に煮滓状の焦げつきが残される場合である。汁物があてられよう。内面全体に焦げや煮滓が




第207図　素文口縁深鉢ならびに重弧文・籠目文深鉢および台付鉢の煮炊痕　(1/9)

認められるのは、恰も両者を合わせたかのようである。すると、雑炊のようなものが思い浮かべられる。




第208図　縄文地深鉢および加曽利E系深鉢の煮炊痕　(1/9)

考　察

右の推定は、煮こぼれ痕によっても確かめられる。口縁部に煮こぼれの痕跡をとどめるものが25例ある。その半数は全体に焦げや煮滓が認められる深鉢に伴う。換言すればそれら28例中の半数近くに煮こぼれ痕がみられることになる。ついで、上半部もしくは口縁付近に煮滓が残るもの10例ほどの半数にも煮こぼれ痕がみられる。次に、焦げつきの認められないもの11例中の4例がそれ。その次に、胴下半のお焦げが上半部にも及んでいるもの14例中の4例。そして胴下半部が焦げついているもの45例では、たった1例に認められるのみである。

以上を要するに、深鉢の過半数は粥や飯を炊くのに用いられ、残り半分弱は汁物や雑炊など汁気たっぷりなものを煮るのに使われた、とみて大過あるまい。

つぎに、器種毎に焦げつきの傾向を眺めてみよう。

**X字状把手付大深鉢**　腰部が帯状に焦げついている。同様な状態が、この器種の祖先として挙げたI期の藤内例，井戸尻期の曽利例・九兵衛尾根例，藤内期の荒神山例にもみられることは興味深い。

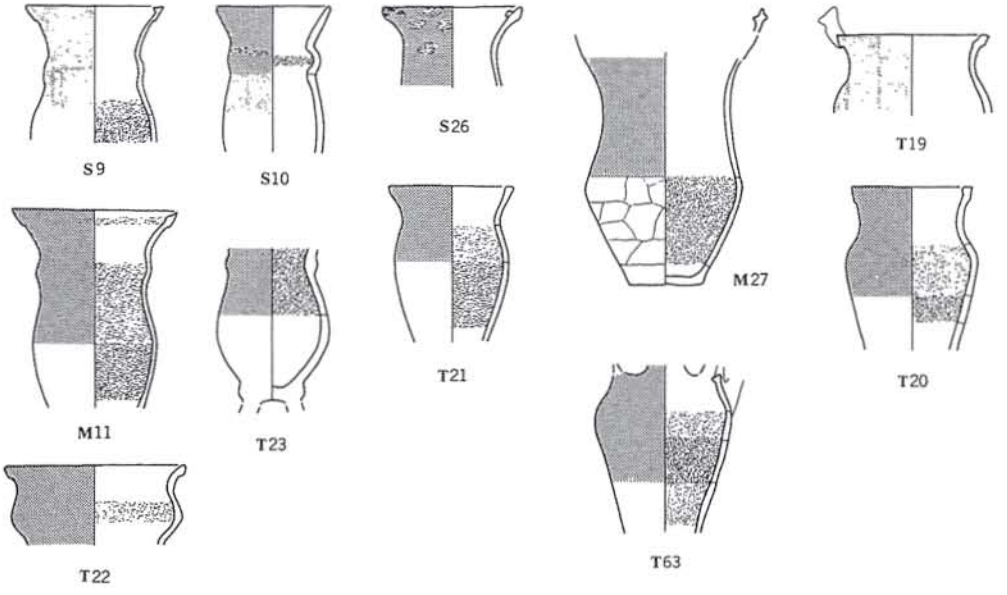
**素文口縁深鉢**　内面下半と全体との両様がある。

**重弧文・籠目文深鉢**　胴下半部あるいは中胴部が焦げついている。口縁の内屈部と口唇の文様の間に煮滓が残る。そこはよく洗い落とせないためであろう。

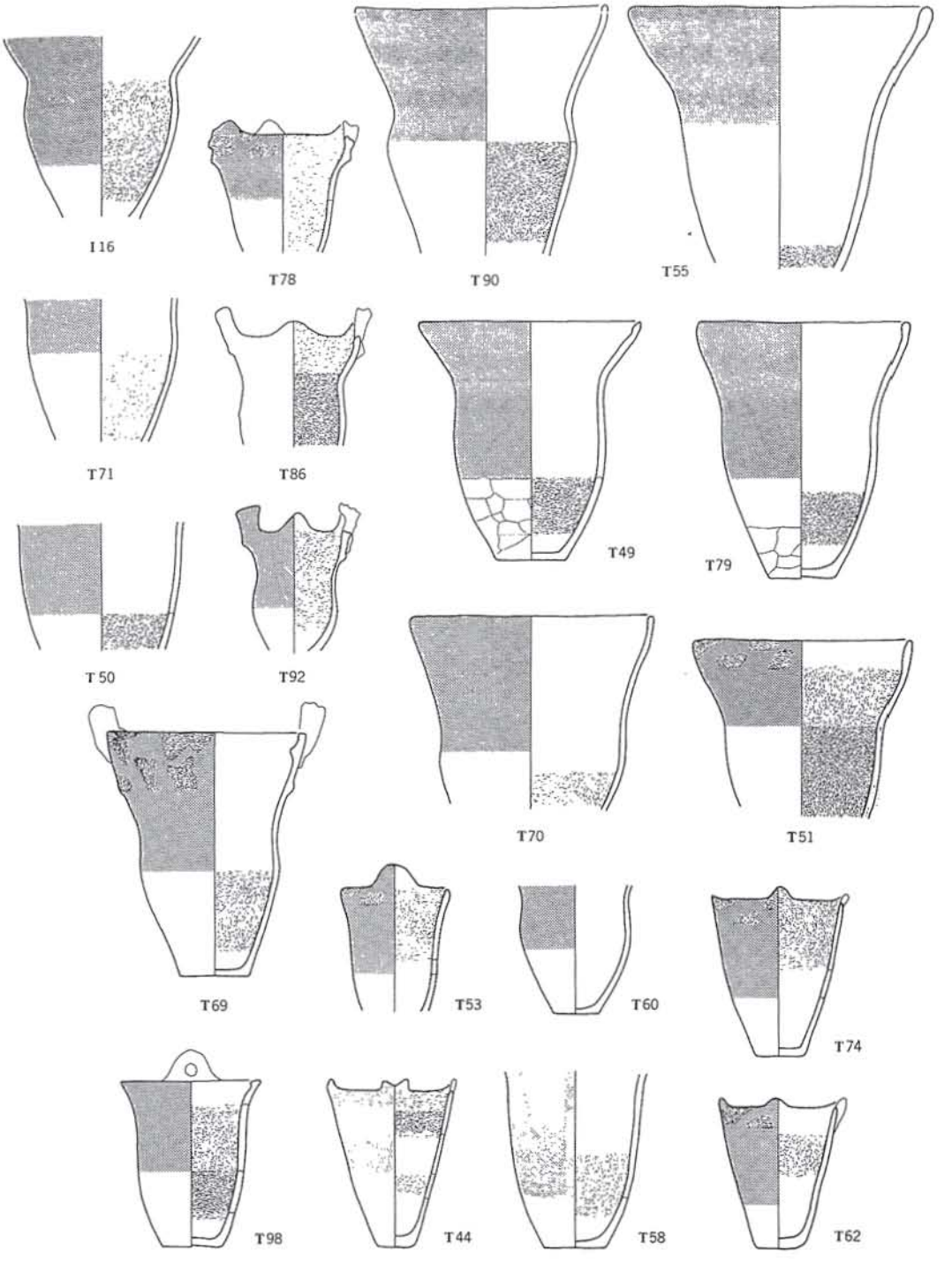
**縄文地深鉢および加曽利E系深鉢**　胴下半部と全体との両様がある。

**唐草文系深鉢**　数器種あるが、全体として三通りの付き方がみられる。

**肥厚帯口縁深鉢**　渦巻文系の流れを汲むⅣ期の深鉢は胴下半にお焦げがあり（居平16，唐




第209図　唐草文系深鉢の煮炊痕　(1/8)



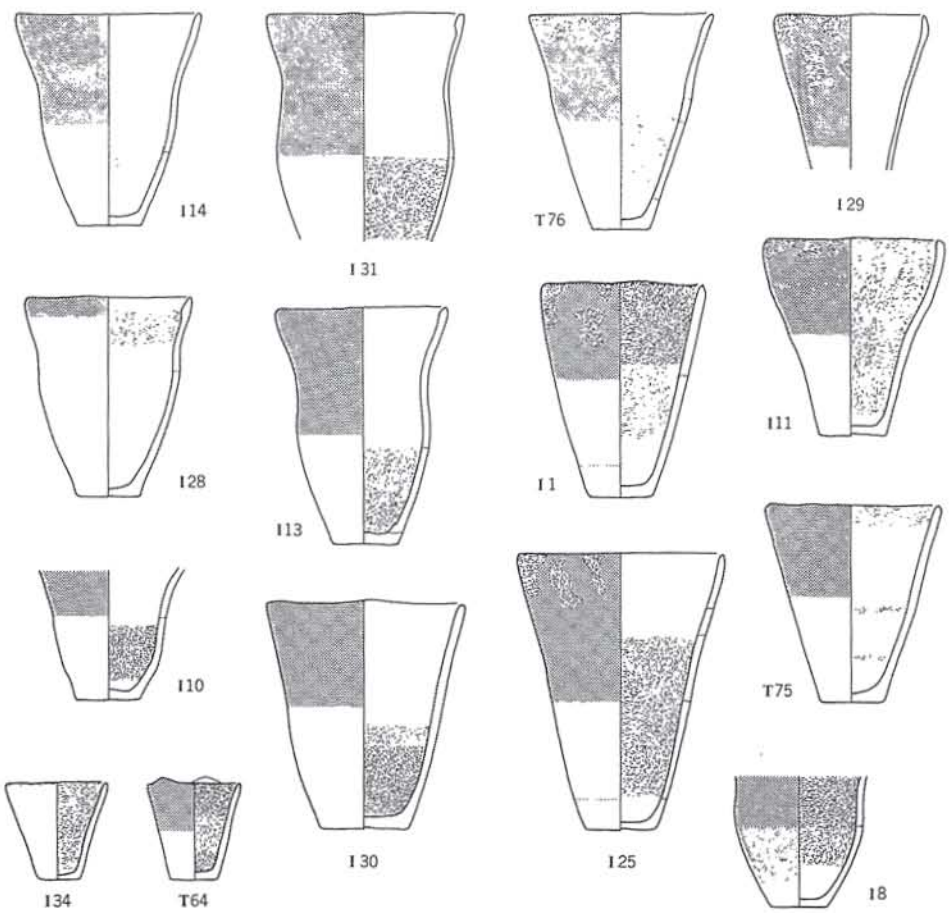

第210図　肥厚帯口縁深鉢ならびに横帯文口縁深鉢の煮炊痕　(1/8)

渡宮71・50)、Ⅲ期の懸垂文系深鉢は内面全体に煮滓が付き（唐渡宮78・86・92)、同系のⅣ・Ⅴ期のものは上半部に煮滓がみられる（唐渡宮53・44)。総じて後二者が小振りなことも注意される。このような傾向が通常的なのかどうか、もっと数を当たってみたいところである。

**横帯文口縁深鉢**　胴下半部が焦げついているが、唐渡宮74と62は上半部に煮滓が付く。双方とも同形式の小振りな深鉢で、大きさと器形が前出の唐渡宮53・44に似通う。

**条線文地深鉢および笹杢目文地深鉢**　胴下半部と全体との両様がある。そのなかで、居平34，唐渡宮64，居平7，唐渡宮41など小型な深鉢は、いずれも内面全体に煮滓が付いている。ことに前三例は容量2合余りの小さな器種である。こんな小さい土器で何を煮たのか、甚だ興味がもたれる。

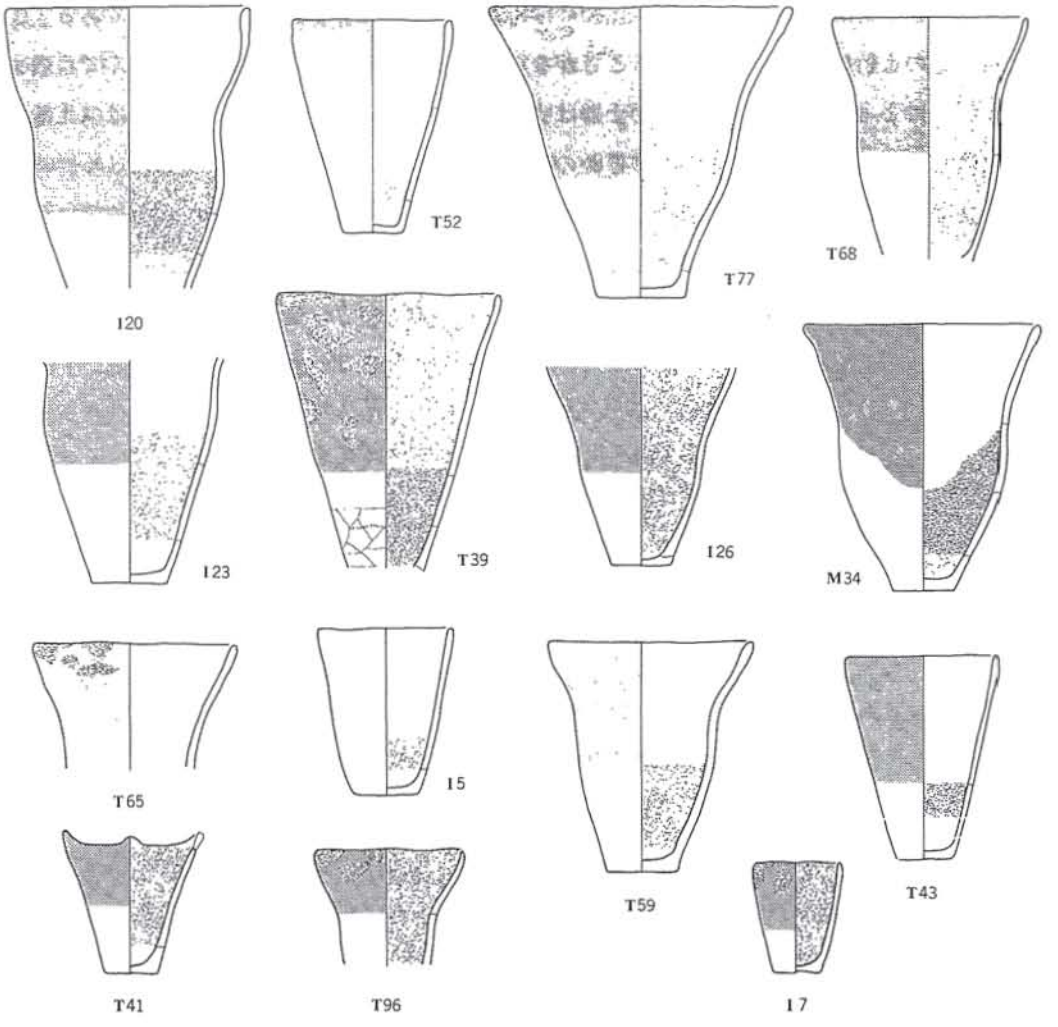
以上、おおまかな傾向を一覧してみた。こうしたあり方が直に一般的であるとは言えないまでも、当面の目安とすることは差し支えないだろう。そしてこれらの傾向によって、器種それぞれの用法をざっと知りうるというものである。




第211図　条線文地深鉢の煮炊痕　(1/9)

**煮炊きの実際**　ひるがえって、我われはここ何年来か、土器を使っての煮炊きを体験してきた。[2] そこで、アワ飯を炊いたりシコクビエやタカキビあるいはソバなどの粉粥を煮ると、ごく自然にこびつきやお焦げが出来ることを確かめた。焚木の赤い炎や煙によって器表は真っ黒に煤け、やがて燠の炎を受ける胴下半は本来の明るい褐色にもどり、内側はこびついたり焦げついたりするのである。まさにそれらの境目は一線を画する。

深鉢には、一見して黒く煤けているとわかる例が少なくない。だが多くは、それほど派手に煤けているわけではない。ここに集めたものの中で歴然と黒いのは2割半くらいだ。それもII期の深鉢では53例中の10例ほどに対し、III～V期では55例中の20例弱と増えている。いったい中期も前半の深鉢ではあからさまに黒く煤けた例をさほど見かけないから、こうした傾向は炉




第212図　条線文地深鉢および笹杢目文地深鉢の煮炊痕　(1/9)

の変化と相俟って注目にあたいする。ともかく、実際の煮炊きに照らしてみると、赤い炎と煙をあげて燃える焚木の中にはじめから土器を仕掛けるようなことはしなかったようだ。あるていど燃えて十分な燠が出来てから仕掛けたにちがいない。その方が熱効率もよい。してまた、枯木はすぐに燃え尽きて燠があまり残らないから、十分な燠を得るために生木もかなり焚かれたと思われるのである。

ところで話は前後するが、煮炊きに先だって解決しなければならないのは、水漏れをいかにして止めるかである。もとより素焼の土器であるから、器壁から水が滲み出すのは当然だ。耳を当てると、しんしんと低く、恰も鍋が煮えるような音を発して器壁は水を吸っている。このような状態のまま新しい土器を火中に仕掛けても、中の水はぬるま湯ていどに暖まるくらいで温度は上がらず、沸騰は到底のぞめない。器外に滲み出す水分を気化させる方に火熱が費やされるからである。これを解決するには、なんでもよいから穀物を碾いた粉を適量いれ、掻き回してやることである。[(3)] すると、見ている間に滲み出しは止まる。ぴたりと止まるのである。これでもうその土器は二度と水漏れすることがない。すなわち澱粉糊が器壁にしみこんで目詰まりすることによって、炊事具としての土器は完成するというわけである。このことは、土器本来の用途と土器発現の必然性を暗示するかのようである。

土器を用いての炊事体験の一端を述べてみた。今後も実践を重ね、用途・用法の検証につとめたいと思う。

（小林　公明）

注

（1）土器の煮炊痕について考察を行った報告書に次の例がある。

『小田野沢』　青森県立郷土館　昭51

『函館空港・中野遺跡』　横山英介ほか　昭54

『中村遺跡』　中津川市教育委員会　昭54

『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―原村その4―』　長野県教育委員会　昭56

『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―原村その5―』　長野県教育委員会　昭57

『上の林遺跡』　箕輪町教育委員会　昭57

『三沢遺跡』　川上村教育委員会　昭62

（2）島田恵子「煮炊き実験による一考察」　山麓考古17　1986

（3）同様なことは加曽利貝塚博物館の実験でもたしかめられている。（庄司　克「潮干狩りと土器づくり」　『北総台地』所収　りくえつ刊　昭54）

# 第四節　坂上遺跡出土の土偶の画像について

坂上遺跡から出土した土偶については、第二章の二節で一通りの説明を行った（第34図）。ここでは、その土偶に描かれている文様の解読という観点にたって考察を加えてみたいと思う。

この土偶は、1号土壙墓の上面から頭・上胴部・下胴部＋左足の三つに割れた状態で発見された。割れ口からして、すでに破損したものを割れ口を合わせて安置したという状態であった。但し、右足は、いくら探してもみつからなかった。どうしたのだろうか？　この謎は今だに解決の糸口さえつかめていない。

調査が終わり暫くして土偶を復元することになった。三つに割れた部品を接着し、右足用の義足を作って取付け「元の姿」に戻した途端、一瞬、目の前に閃光が走ったかどうかは覚えていないが、背筋に寒気が走り、それが頭頂を突き抜けると失神寸前に至るという「神憑き」の状態に陥ってしまった。

神憑きは、昔から女性が多くなるらしいのだが、男性でも、よく祟る人は可能性が高いと言われている。神の憑きやすい人は、直感力は優れているが思考力が弱いようだし、祟らない人は思考力が優れているようで、足して二で割ったのが普通の人間ということになるらしい。

神憑きは、その時間が長いと病気になったり可成り危険を伴うことが多々あるらしく、又、休まずに幾度も続けると死に到るとも言われている。この時の神憑きはしばらくして神戻しが自然に現れたのだったが、ともかく、ひどき目にあったことが今だに忘れられない。

はじめにこのような体験を記したのは、この土偶の文様の意味とあながち無関係と思えないからである。

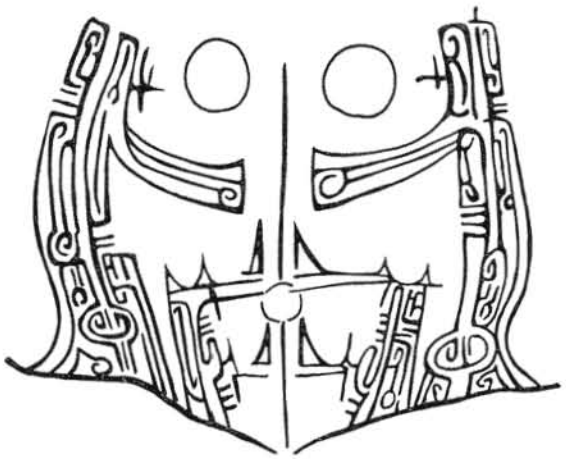
さて、標題の土偶の画像をみることにしよう。本例に近い施文例は伊那谷・松本平方面にかけた所謂、唐草文系土器の分布範囲に多く認められるが、本例のように複雑でなお且つ鮮明に描かれた例は他にはない。したがって、考察に要する手続きも複雑にならざるを得ない。

施文の主体は、両腋下から脇腹にかけてと胴の正面に集中し、下胴部から両足にはパンツ状の文様がある。このパンツ状の施文は、唐渡宮遺跡発見の埋甕に描かれていた「人体絵画」の最下部にある地面に相当する描写に近いものである。

また、背面の頸部には三条の結目沈線文の下に仏炎苞文で結束した頭髪を表す。これらの施文はあとで述べるように、月神の前に張られた注連縄の役目を果たすものでもある。

それから、これは文様ではないが、胸部には整った乳房と胴央に出臍を貼り、その上下に沈線により正中線を引く。足の爪先は三個ずつ沈刻により指を表現している。

以上のように、施文された文様は土偶という円筒上に施されているため、一見して……、と



第213図　坂上遺跡出土の土偶の文様展開　(½)

いう訳にはいかない。そこで、多少の歪みを我慢していただき、正中線を中央にして展開し、平面上で全体像を同時に見られるようにしたのが第213図である。このように必要な手続きを経て図示してみると、可成りに複雑な文様も案外かんたんに解読できることが多い。それでは、最も近間から解き明かしていくことにしよう。

話の都合で結論から先に述べよう。図像は「神前の祈り」の場面ととらえることが可能である。それでは、その祈りとは何だろうか。ただし、この図像を見るには、まず現代文明のほとんどを頭から追出し、次に、現世での出来事ではなくて、当時の人々の裏、即ち、夜の精神的な拠所となっていた月宮殿の宣託を、その使者である土偶という人形を通じて、当時の地上の人々に与えてくれた恵の賜物であると理解しておかなくてはならない。

図像を直訳すると、月輪熊の敷皮状の施文は、月に棲むという蟾蜍（ひきがえる）の背を地面に設え、中国でいう衣服掛の槌架に似た神に供物を献上する台の八足を臍と下の正中線を挟んで二基すえ、物事のしなさだめや測量・占事などを行う権衡の台としている。台の左右には、月宮殿の神官二人が向合って対峙し、月神である土偶の乳房を戴きながら権衡の儀式を執行している。

直訳文だけでは画像の真意が読みとれないので肉付けしてみよう。

対峙する二人の神官は何を意味するかというと、向って右の人物は神官の長で斎主を務め、左は未婚の王女で斎王の役を負うもののようである。ちなみに、漢代の画像石に次のような絵がある。矩（曲尺）を持つのは伏羲で方形を、規（コンパス）を持つのは女媧で円を表すとある。このことは、縄文時代中期の土器文様のなかで、男女の区別をする場合にあてはめることが出来るし、本例でも見事に的中することが判明した。

絵解きを進めることにしよう。まず、右側の斎主が、月神の乳房を戴きながら、麦の種播きの時期がきたから直に播種の儀式を行っても良ろしいか、と奏上したところ、すぐ斎王から、未だ畑の準備が未熟でその時期ではないから、畑の手入れが出来るまで今すこし待って下さい、と奏上し意見が対立する。

それまで、両者の言い分を聞いていた祭壇上の月神から、台地を突刺すようなりんとした声で「播種の時期は今が適当であるから双方とも直に準備をして実行に移しなさい」との宣託が下り、双方の権衡台にその結果が現れた。斎主側の秤竿が斎王側へ延び、分銅は臍の円と正中線を突抜けて斎王側へ進入している。即ち、播種の儀式が終了したことを告げている。

尚、斎主と斎王ともに儀式用の朝衣(ちょうい)を纏(まと)っているのだが、儀式の最中の遣取りと双方の体内の変化などが詳細に文様という形で記され、その上、宣託の内容と双方の生殖器官の活動とは、権衡台に集約されて表現されているが、その内容は難解の箇所がありすぎ、ここでは記述しきれないので、その大要を示すに留めおいた。

以上、画像の絵解きをしてみた。事の性格上、理解しにくい点が多いかと思うが、本例のように土偶とか土器という一つの物体に、そのもの本来の宿された使命や宿命のようなものを線刻やそれらを含めた絵画という形で表現したものへの注視と、積極的に解読しようとする努力を怠ってはならないと思う。

そうすれば、日夜、幾千万の的外れのデータをコンピューターに入力し間違った答えを引き出して喜んでいるよりも、絵画というタイムカプセルを通して当時の人々と語り合い、より近く、より正確な答えを出すことが可能となるだろう。

（武藤　雄六）

# 第五節　敷石地上絵の性格について

## は　じ　め　に

この遺構については、唐渡宮遺跡の四節ならびに九節で記してきた通りである（第108図）。そこでの問題点のいくつかを整理すると、第一に敷石地上絵は何を表しているのか、第二になぜ意識的と思えるほどに、先住者の住居址をすっぽりと覆い重ねているのか、第三にこれら二点を含めた祭祀の内容とはどのようなものなのか、という三点になろう。

こうした石の遺構の出土例は増加してきているものの、様態が複雑なせいもあって、抽象的な解釈しかされていないのが現状である。そうした現状を踏まえ、ここでは具体像を描くことを目標とし、同様な遺構と比較しながら本址を位置づけていきたい。

## 類似遺構との比較

まず、唐渡宮の配石を概観しておこう。遺構は南東向きの緩斜面に構築されている。蛇行する帯状の石敷は東西両側にあって、谷側の一点で接触してまた広がっている。山側には、「く」字に折れた石敷から直線的に東西を結ぶように石がならび、そこは他より大きな石を用いてある。その中央北側に接して小竪穴があり、さらにその穴に接する山側に古期ロームを固めた土壇がある。そしてこの石敷内には、時期の異なる黒浜並行期の住居がすっぽりとおさまっている。

このように、いくつもの施設が関連して一体となっているものは他に例をみないだけに特異といえる。そこで、個々に類似する部分を比較検討していくことにしたい。

まず、配石および石敷の状態は、伊勢原市下北原遺跡の環状組石遺構としたものに類似する[1]。西側の一部には、環状組石部分から発した石列が「く」字状に並んでいる。同様なものは東側にもあって、一部は石を立てている。唐渡宮の石敷も、端部に近いところがそれぞれ「く」字状に折れており、状況はよく似ている。また下北原の配石の西側には、あまり整ってはいないが三角状に飛び出した部分があり、遺構全体からするとこの場所は本址の小竪穴の部分に相当すると思われる。更に南側の組石の中間内側に接して、直径60センチもある丸石が置かれている。本址の石敷にも同じところに接して大石が据えられており、単なる偶然とは思えない。また、少し形の違う軽井沢町茂沢南石堂遺跡の配石では、同じところに石棺墓が組み込まれており[2]、この場所がただならぬところと推察される。

つぎにすっぽりと収まっている住居址だが、茂沢南石堂遺跡に類例がある。環状の配石中には、同心円状に曽利Ⅲ式期の住居が重っている。配石の時期は後期堀ノ内Ⅰ式期であり、やはり異なる時期の遺構が重なるというのは、偶然の出来事とは思えない。また先の下北原の配石では、中央部分が空いていて住居こそ重なっていないものの「配石下面は黒土層の堆積が厚く……」という所見は意味深い。[3] ところで前例と少し異なるが、外側の環状配石と住居が複合している修善寺町大塚遺跡9号址は、双方が一体となった構造であるという点で重要である。[4] そして、これらの見方を少しかえて、同心円状の重なりという点で考えると、厚木市下溝稲荷林遺跡の環状配石や、[5] 修善寺大塚の円形配石などの状況も同一なものと見做せよう。[6] すると稲荷林の配石断面にみられるマウンドや、花弁状に配列して中央を凹めた修善寺大塚の配石の様態も、内なる円に特別な意味をもたせた意識的な造作と解釈できる。住居は確かに住まうところだが、一方で内なる円としての意味を有しているようだ。

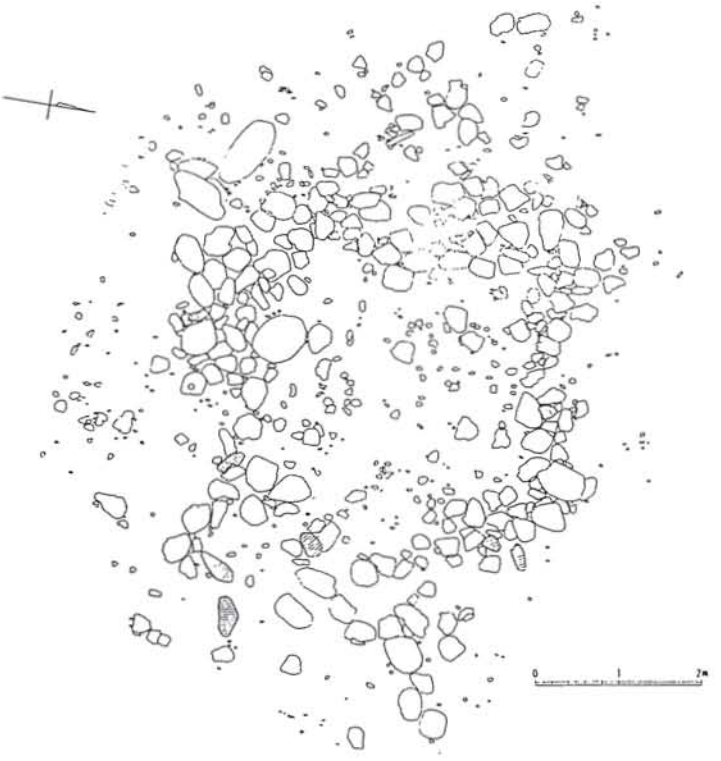
このように配石を比較してくると、内容はかなり複雑だが遺構の状況はそれぞれ近似しており、これらが一つのものを表した変種または個体差であって、写実的なものから写意的なものの構造物であろうという仮定が立てられそうだ。そこで、以前に若干の検討をしたことがあるが、[7] 改めて土器の図文と対比しながら検討してみよう。

## 配石の意味

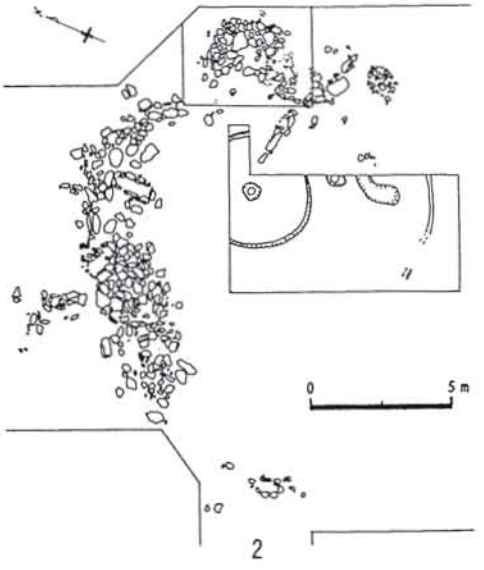
まず形のうえからも単純で、しかもよく整っている下溝稲荷林からみていこう。これとよく整合するのは、藤内遺跡から出土した有孔鍔付土器に表された図像であろう。ペン先状に飛び出た部分は双環把手に、二重の環状の配石は円環文に、外側の環状配石から発する東西の石列は、下手から円環をU字形に囲む隆帯に対応合致する。それは、模式図を介することによって一層了解できよう。また、環の中心部の火焚場とする部分がマウンド状に高くなっていること、ペン先状に飛び出た部分から内側の火焚場へ延びる配石などは、同じ土器のいま一方に描かれた人物像の背中の表現と一致する。

ところで、この土器文様に関しては小林公明の解釈があり、他の土器と比較しながら当時の世界観にまで言及している。[8] 詳細はそれに拠るとして、この文様解釈の大略は「双環把手と組み合さって、蛙・女性器・月を表象するもの」で、環状文とそれを囲む隆線は「新月とこれから甦る旧い月」だという。つまり双環把手は眼であると同時に頭、環状文は胴体、下手の隆線は腕に相当する。これにより同様な形状の稲荷林の配石は、三者を合わせもったものと理解されよう。つまりペン先状の部分が頭、二重の円環が背中ないし胴体、そして南北に延びた石列が腕に対比できる。すると、同類の茂沢南石堂や修善寺大塚9号址も同様の解釈ができる。

つぎに、修善寺大塚遺跡の円形配石とした小ぶりな配石を見てみよう。これは井戸尻4号住



1

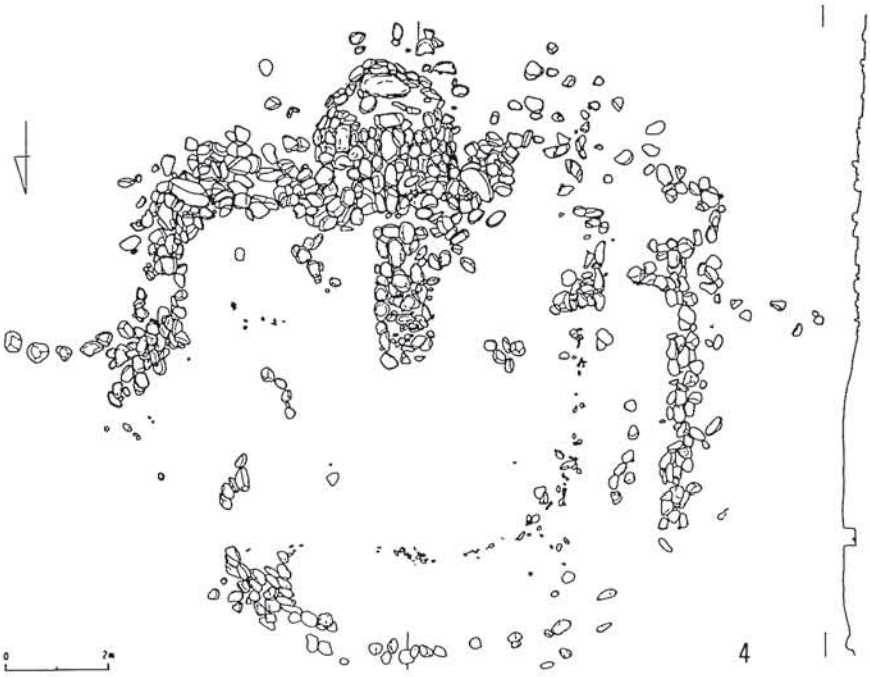


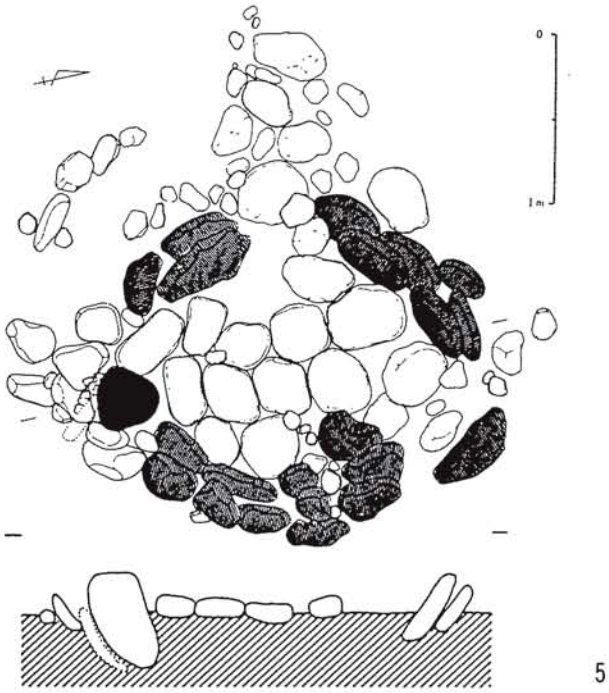

2

3

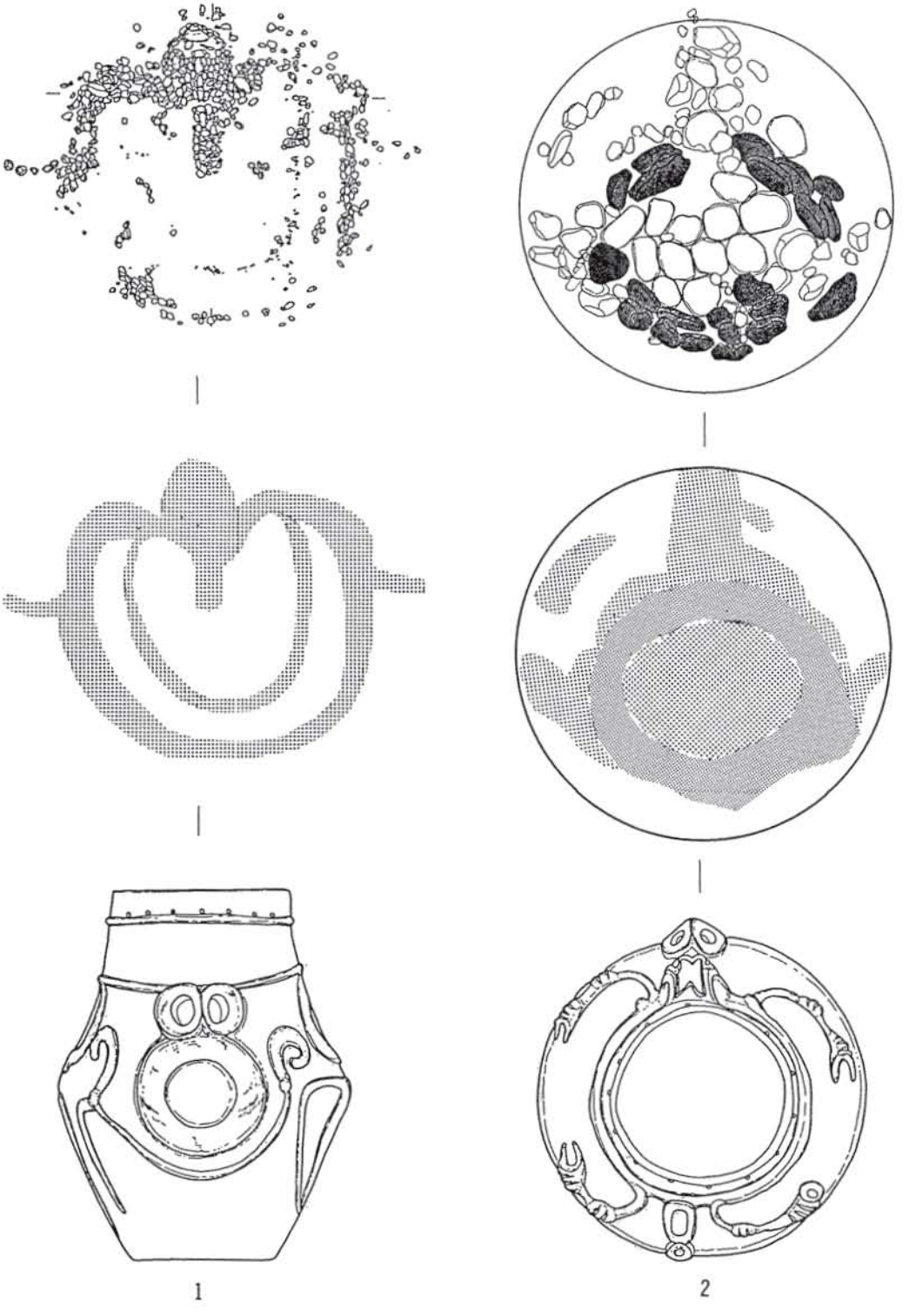
第214図　配石遺構の比較　（右頁につづく）

1；下北原　　2；茂沢南石堂　　3；修善寺大塚



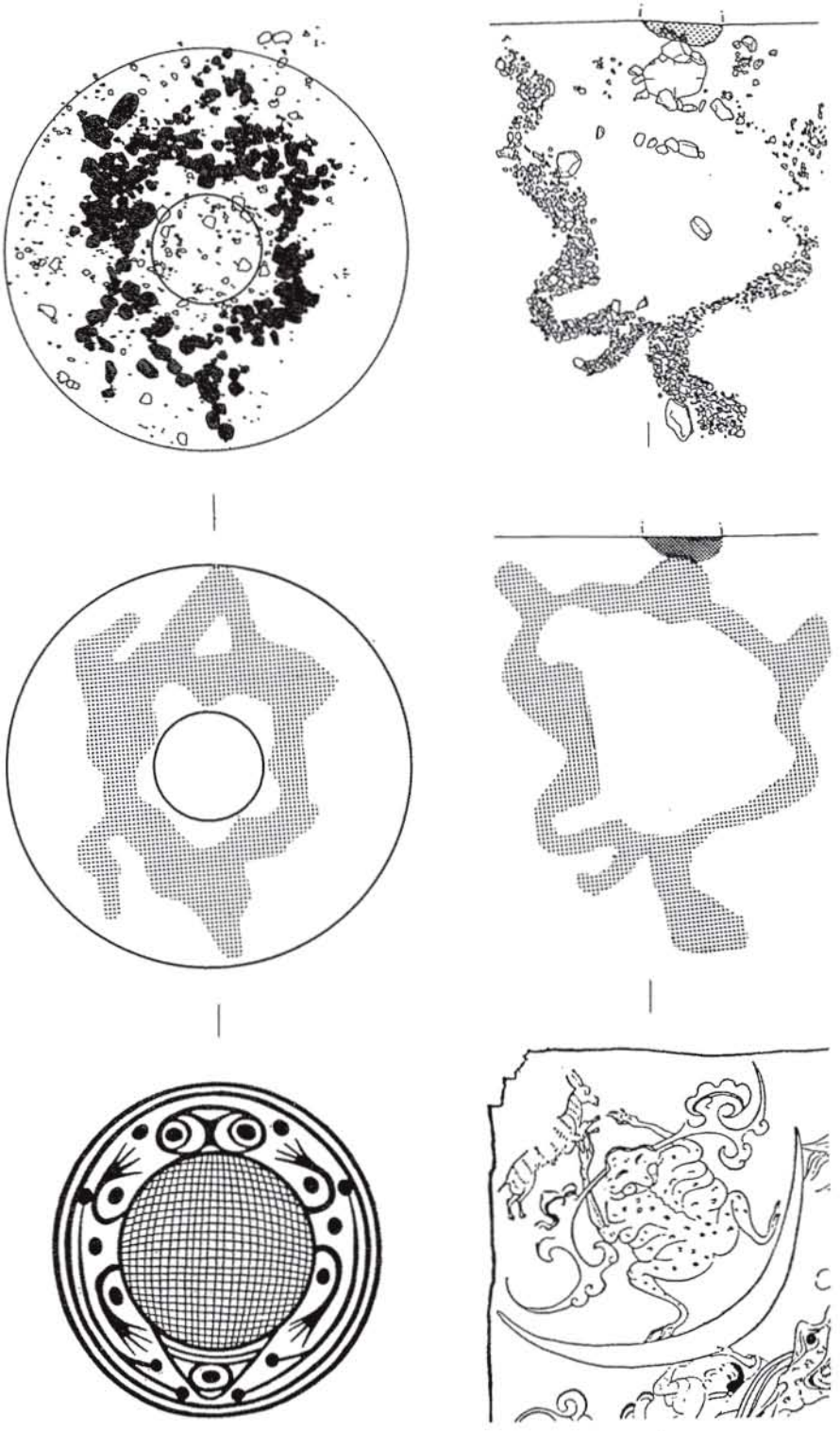




4；下溝稲荷林　　5；修善寺大塚




第215図　図 像 の 比 較　（右頁につづく）

1　上；下溝稲荷林　中；模式　下；土器に付された蛙文（藤内出土）
2　上；修善寺大塚　中；模式　下；土器に付された蛙文（井戸尻出土）



3　　4

3　上；下北原　　中；模式　　下；彩陶に付された蛙文（馬家窯出土）
4　上；唐渡宮地上絵　　中；模式　　下；非衣に描かれた蛙（馬王堆１号墓出土）

居址から出土した有孔鍔付土器に符合する。真上から見た様は、まさに遊泳する蛙である。配石の西側へ突出する部分は双環の頭に、二重に配列した花弁状の部分は土器の口辺部分に、そして花弁状の石組から飛び出た石列は、前肢・後肢の各部分に対比できる。同じように下北原の配石を眺めると、三角形に配列した西側部分は双環把手に、配石中央の空白部分は土器の口辺部に相当する。そして東側へ延びる石列は、粘土を輪にして連接させた尻尾に対応し、比較資料として挙げた中国の馬家窯類型の蛙文にも似たような表現をみることができる。配石の前肢・後肢の表現（北側部分は不明）は、外側にそれぞれ「く」字状に折れ曲がっていて、井戸尻のものよりは馬家窯の蛙文の四肢の向きに合っている。また、配石の頭部から尻尾を結ぶ外郭線の内側には、沢山の小石が弧状に配され、井戸尻の蛙文の吻端から尻尾を結ぶ土器の肩部を思わしめる。

以上のように比較してくるとこれらの配石は、蛙を題材としたいくつかのバリエーションとして結論づけられる。これらと同じ観点からみるならば、本址は小竪穴を頭とし、石敷で胴体と前肢・後肢を表した蛙だと認識することができよう。そして前肢・後肢の不均衡さは、今まさに斜面をのぼっている様と解せば、納得がいくだろう。とすれば、頭に接する土壇は何であろうか。蛙像という認識からすれば、この土壇の解釈も間接的ながら理解することができる。間接的にとしたのは、論証の手続きとして古代中国の古典と文物に当たらねばならないからである。

今のところ最もよく納得できるものは、長沙馬王堆一号漢墓の棺に掛けられていた“非衣”（絹で織ったＴ字形をしたもの）に描かれた図像である。[9] 蛙は三日月にふんばるようにしていて、雲気を銜えている。この図像について小林は、「兎がこれから満ちていこうとする月の将来を予測的にあらわしていること、蟾蜍（ヒキガエル）が死せる古い月、しかしこれから甦ろうとしている月をあらわしている」とし、「新月にどっかと腰をおろしたり、後足を踏んばった蟾蜍のさまは、陽をよるべとする陰、すなわち新しい月に抱かれた古い月の形容にぴったりである」とし、古典中の記載どおりだという。[10] これらを前提にすれば、土壇は雲気つまり月となろう。よって本址は「月の雲気を食す蟇蛙（ヒキガエル）」と理解できる。

つぎに先住者の住居をすっぽりと覆い重ねているという状況だが、今までの延長で考えてみよう。先住者の住居、つまり古い時期のものであることは、即ち死んでいると解することができる。配石は明らかにそれを覆い、抱いているから、双方を古い月と新しい月に比定できよう。したがって、住居は甦ることを前提に死んでいることになる。先に示した下北原の、配石下面の「黒土層が厚く……」という状況は、古い月しかしこれから甦る光らざる月を暗示しているようだ。

これらから思われる祭祀の内容は、遠い先住者の住居を覆うことによって死に至らしめ、それを前提に新しく住まう居住者たちの場として、その地の再生（復興）を願うというようなこと

であろう。したがって、そのことを表現するには、何よりも不死・再生を象徴する生物である蛙をおいては他になかった、と解釈できよう。

さて、遺構の性格については概ね説明がついたので、最後に一点だけ付記しておきたい。それは「小さな円形に小石を敷きつめたものが密接していた」という発掘の記録である。図面をとれなかったのは惜しまれるが、東西に並ぶ配石の下方にあったことが重要な意味をもっている。この円形集石は、ちょうど配石を東西で二分する中軸線上に位置しており、外側の配石と一体となっていたことは疑いない。これを図像的にみると、本遺跡出土の埋甕に描かれたお産絵画に合わさってくる。密接した配置は別の意味を重ねていると目されるが、左右の乳房と認識でき、女性像の意味も兼ねているようだ。形態的には少し異なる稲荷林の配石中にも、小石を五つ固めてある箇所が右側にあり、何らかの共通点があると思われる。

以上を要するに、本址は蛙・月（新月と甦る古い月）・女性という三者の意味を重ねていると判断できる。

こうして解釈をすすめてくると、中心的主題はやはり「死と再生」という太陰的世界であって、すくなくとも中期中葉以降、悠久の時を経て子々孫々に至るまでその精神が受けつがれていたことを感じとることができる。

## おわりに

小稿には、前提となるいくつかの認識がある。ここでは、それらの一つ一つについて触れる余裕がなく十分な説明ができなかったが、以下にあげる文献を参照していただければ幸いである。

（樋口　誠司）

注

（1）『下北原遺跡』　神奈川県教育委員会　1977
（2）『軽井沢町茂沢南石堂遺跡』　軽井沢町教育委員会　1968
（3）注1に同じ
（4）『修善寺大塚』　修善寺町教育委員会　1982
（5）『稲荷林遺跡調査概報』　稲荷林遺跡調査会　1981
（6）注4に同じ
（7）樋口誠司　「大地の月」山麓考古17　1986
（8）小林公明　「月神話の発掘」　山麓考古16　1984
（9）湖南省博物館・科学院考古研究所編・関野雄ほか訳『長沙馬王堆一号漢墓』　平凡社　1976
（10）注8に同じ

本稿に用いた図版については、転載にあたって若干の加除筆をさせていただいた。

# 第六節　前期中葉の土器の様相

今回の向原・唐渡宮両遺跡の調査により、前期中葉の集落が八ヶ岳南麓にも確実に存在したことが分かった。諏訪地方においても、該期の好資料が増えつつあるという時でもあり、ここでは当地方の該期土器について概観することにし、一，二の問題点を指摘してみたい。

## 長野県の編年

長野県における縄文前期中葉の土器編年は、確実な住居址を伴った良好な資料に恵まれなかったこと、さらには、当地が東西両文化の接点にあたっており出土土器が複雑な要素を多く含んでいたこと等が主な要因となって、これまでかなりあいまいな点を残したままで来ていた。が、しかし、ここ約10年前頃からは、研究者の積極的なアプローチと相次ぐ良好な資料に恵まれたことが相まって、該期の土器編年もほぼ確立した感がある。

従来、『信濃史料』に見られる「黒浜式即ち有尾式」という捉え方が影響し、土器型式の片方の側面である時間的尺度の方により重きを置いた理解の仕方が強調され、「黒浜式と同時期の長野県の土器は有尾式である」という声さえ珍しくはなかった。しかし、「神ノ木式・有尾式土器の研究（前）」（戸田・大矢1979）における型式内容の検討をはじめとして、「縄文前期有尾式土器の再検討」（金井1982）の論考、さらに同じ年に鼻屋敷（しゅうとやしき），阿久（あきゅう）両遺跡の報告書が相次いで発刊され、縄文前期中葉の土器編年は内容的に整理されより充実したものとなり、おおむね以下の如く一般的に理解されているとみてよいであろう。

縄文時代前期中葉の長野県には、関東地方に広く分布する黒浜式土器の影響を受けているものの、前段階の神ノ木式からの流れをくむ、地域的で独立した内容をもつ有尾式土器が確実に存在している。その型式内容は、黒浜式土器が胎土中に植物繊維を混入しているのに対し、有尾式土器は基本的には無繊維であること、文様は、櫛歯状工具を用いての列点状刺突文による菱形ないしは三角形という黒浜式には見られない独特のモチーフにより飾られる、といった主だった特徴をもっている。ところで、この有尾式土器は、数多くの該期住居址が検出された阿久遺跡からは全く出土せず、その代わり阿久Ⅲ期Ⅰ群ａとして分類された独特な土器が、黒浜式を伴って多量に出土したのである。その土器の特徴は、有尾式同様無繊維であること、器面全体が縄文のみによって施文されいわゆる文様というものをもたないこと、器形はバランス的にみて底が非常に小さく不安定な格好であること、薄手で内面には製作時についた指頭圧痕を顕著に残すこと等があげられる。この特徴ある土器群は、阿久遺跡での安定した在り方、ま

た共伴している黒浜式土器の型式的検討等から、黒浜式の後半に併行する、とされた。すなわち、前期中葉の時期は全般を通じて黒浜式と接触をもちながらもそれぞれ独自の内容をもった有尾式が前半に、阿久Ⅲ期Ⅰ群土器のグループが後半に位置づくという図式ができたのである。

## 諏訪地方の様相

さて次に、諏訪地方の前期中葉の土器の様相について少しみてみよう。古くから表面採集等により該期の土器はいくつかの地点から出土している様であるが、遺構を伴った確実な資料が得られたのは、中央道西宮線建設に伴う緊急発掘による千鹿頭社遺跡が最初であろう。千鹿頭社遺跡は諏訪湖西岸の高台に位置し、昭和49年に調査された。縄文前期の住居址が6軒検出されているが、そのうちの1軒、3号住居址が阿久Ⅲ期と同時期と考えられる。土器は阿久Ⅲ期Ⅰ群が主体で若干の黒浜式を伴う。

昭和49，50年にかけて調査された十二の后遺跡は千鹿頭社遺跡と同一遺跡と考えられ、縄文前期に限ってみても60軒の住居址が検出され該期の大集落址であることが判明した。そのうち前期中葉に属するものは、遺構の重複が多く時期の分かりかねるものもあるが、20軒前後であろう。土器は、櫛歯状工具による列点状刺突文を有する有尾式が若干出土しているが、全体の土器出土量からすればとりたてて問題にすることはないと考える。主体は阿久Ⅲ期Ⅰ群土器で、胎土中に繊維を含有した黒浜式とみなされる土器が割合多く出土している。出土土器の内容は中葉の時期に限らず、前半の中越期、後半の諸磯a，b期にいたるまで、阿久遺跡とよく似ている点注意しておきたい。

諏訪市中洲神宮寺に所在する武居畑遺跡は、昭和52年の第2次調査の時に、土壙から諸磯b式の完形深鉢が出土し、縄文前期の集落址が眠っているのではと注目されてきた。昭和61年に実施された第4次調査では遺構こそ確認されなかったものの、前期の土器がほぼ全般にわたって出土し、その中には黒浜式，有尾式，阿久Ⅲ期Ⅰ群のそれぞれの土器が確実に存在していることが確認された。今後この遺跡は縄文前期中葉における諸問題を解決する鍵を握る重要な遺跡としてクローズアップされることであろう。

よせの台遺跡は、茅野市米沢塩沢に位置し、昭和51年に工場建設に伴う緊急発掘調査が行われ、合計13軒の縄文時代の住居址が検出されたが、前期の住居址は3軒で、そのうちの2軒5，7号住居址が中葉に属する。出土土器は、胎土中に繊維を含んだ黒浜式とみなされる土器と、無繊維の縄文のみが施文された土器の2グループであるが、後者の方が量的に多い。ここで問題となるのは、無繊維の縄文施文の土器の所属についてである。形を成す土器が出土していないので断定は出来ないが、これらの土器の大半は、色調，口唇部の形態，器厚等から総合的に判断して、阿久Ⅲ期Ⅰ群土器の仲間とは異なる存在であると考えられる。では一体どの範疇に

含まれるのか。一番可能性が高いのは有尾式の中に含まれる、すなわち有尾式の中の文様帯をもたない土器という考え方であろう。櫛歯状工具による列点状刺突文をもつ有尾式土器は、上記2軒の住居址からは直接出土していないが、小竪穴と遺構外の包含層からは確実な資料が確認されている。個々にみると何とも判断し難い土器も多少あるが、大筋において誤りはないと考える。以上のことから、よせの台遺跡の5，7号住居址は有尾式期に属するものと考えられる。

高風呂（たかふろ）遺跡は、よせの台遺跡よりやや北寄り東方へ約2kmの位置、茅野市北山湯川に在る。昭和59年に県営圃場整備に伴い調査され、前期を主体に計51軒の縄文時代の住居址が検出された。そのうち前期中葉に属する住居址は5軒である。出土土器をみると、縄文施文の文様帯をもたないものが殆どで、胎土中に繊維を含むものと含まないものがある。後者が量的には多いが、含有量の多い少ないのバラツキはみられるものの繊維を含むものもかなり目につく。これらの土器に伴って若干の有尾式と神ノ木式土器が出土している。文様帯をもたない縄文施文の無繊維土器についてであるが、無繊維で縄文となるとこの時期はまず阿久Ⅲ期Ⅰ群土器が浮かぶが、それとは趣を異にしている。櫛歯状工具による列点状の刺突文をもつ有尾式土器がやや量的に少ないきらいはあるが、確実に存在している点、色調，内面成形の特徴等から、やはり有尾式の中の文様帯をもたない土器と捉えるのが妥当な線であろう。

“縄文前期観の転換”として世間の注目を集めた原村の阿久（あきゅう）遺跡は、昭和51～53年にかけて調査され、環状集石群，方形柱列址，立石と列石群とともに60軒を越える前期の住居址が検出された。そのうち中葉に属する阿久Ⅲ期の住居址は18軒で、そこからは先に千鹿頭社遺跡から出土し在地的な土器として注意された、無繊維で内面に製作時の指頭圧痕を顕著にのこし、全面に縄文が施文された底の小さな不安定な形の深鉢形土器が多量に出土した。これらの土器は、それぞれの住居址から安定して出土しており、形を復元できるものも数多く、共伴した黒浜式土器の型式学的検討等から黒浜式の後半に併行するとされ、これを機に長野県の該期編年がより充実したものとなったことは先述した通りである。

今回本書で報告されているところの富士見町の向原，唐渡宮遺跡の前期中葉に属する7軒から出土している土器の内容は、それぞれの土器の説明の項で触れた様に、阿久Ⅲ期Ⅰ群土器が主体で、若干の黒浜式土器を伴うという、阿久遺跡のそれと非常によく似たものとなっている。

以上、諏訪地方の前期中葉の土器についてざっと見てきた訳であるが、その内容からして大きくふたつに分けることができる。そのひとつは、よせの台，高風呂遺跡で、やや資料的に不十分な点はあるものの有尾式期と考えられるグループである。もうひとつは、阿久Ⅲ期Ⅰ群土器を主体的に出土する。千鹿頭社，十二の后，阿久，向原，唐渡宮遺跡のグループである。これらどちらのグループも胎土中に繊維を含んだ関東系の黒浜式土器を共伴しており、前期中葉全般に亘ってその影響を受けていたことは重要な点として注意しておきたい。

## 諸磯期への流れ

長野県の前期中葉の土器編年は、関東地方に広く分布する黒浜式に併行し、それと少なからず接触を持ちながらも、前半の有尾式，後半の阿久III期I群、両者共に独自性を貫いた存在として認識されてきていることは先にも述べた。しかし、有尾式，阿久III期I群が、前期前葉の中越式から始まる、より地方色の濃い土器型式の系統下に含まれるのは明らかではあるが、はたしてそれが、有尾式から阿久III期I群へという様に時間的にすんなり変化していったとみていいのかという疑問が残るのである。阿久III期I群の中には、何故か文様帯をもつ土器が見当たらず、それがまた大きな特徴となっているのではあるが、型式学的に前後関係を検討する上において最大のネックとなってしまっており、先の疑問を解くのを一層困難なものにしている。一方、最近県外の該期の資料の増加が目につくようになったことは喜ばしい限りである。群馬県では、有尾系土器が多量に出土しているが、阿久III期I群に類似する土器は見当たらない。逆に山梨県の釈迦堂遺跡からは、阿久III期I群とみて間違いないと思われる土器が安定して出土しており、その様子は阿久遺跡に酷似し、有尾式土器を欠如している。これらの事実は、先の問題を解決する上で大いに役立つと思われる。

土器編年はいうまでもなく時間的側面と地域的側面を合わせもっているのであって、どちらか片方を固定して考えようとすると、その本質を説明しきれないという不備を生ずるということを承知した上で、未だ検討不十分ではあるが、ここでひとつの考えを仮説として提示しておきたい。それは、在地的な土器型式としての流れをくむ有尾式は、全体的に足並みをそろえて阿久III期I群、さらには諸磯a式へと移行していったのではなく、阿久III期I群はいわばひとつの支流とみるべきであって、本流すなわち有尾式は、黒浜式の影響を受けつつも基本的にその内容を貫き、次の諸磯a式へと移行していったのではないだろうかというものである。つまり、有尾式→阿久III期I群→諸磯a式という流れは諏訪地方を中心にした地域に見られる現象であって、おそらく、中東信から群馬県方面にかけて、阿久III期I群の介在を許さない、有尾式→諸磯a式という流れが存在するであろうことを予想したいのである。この仮説を裏付けるのには、塩尻市の舅屋敷遺跡の他にも、有尾式土器を安定して出土する遺跡の発見が望まれるところである。そして、土器だけに止まらず、石器，住居址形態等、当時の文化内容を探れる様々な資料を用いての総合的な検討がなされるべきであることは言うまでもない。特に黒浜式との関係についての追求が不可欠であることはもちろんである。

最後に、向原7号住居址から出土している阿久III期I群的要素をもちながら、半截竹管による平行沈線文をもつ土器に関して触れておきたい。何故、阿久III期I群土器が文様帯をもたないかという疑問はここでは措くとして、当時の人々が文様帯をもつ土器といくらでも接触をも

ちながら、縄文だけが施文される土器をかたくなに保ちつづけたという事実は、阿久遺跡のみならず釈迦堂遺跡においても示されているところである。それは、当時の人々の心の中のあるひとつの重大な約束事であったことは間違いないであろう。それだけに、この資料の取り扱いについては、余計慎重な態度が要求されることになる。ここでは、いたずらな推論は避け、関連資料—特に後続する諸磯a式古段階の増加を待ちたいと思う。そこに解決の糸口があるものと信じたい。

（岩崎　孝治）

主要参考文献（五十音順）

新井和之　1980　「黒浜式土器小考」　『日本考古学研究集報II』　日本考古学研究所
秋池　武・新井順二　1983　「群馬県における神之木式・有尾式土器について」　『信濃』第35巻4号
梅沢太久夫　1978　『八幡遺跡』　都幾川村教育委員会
大場磐雄他　1955　『信濃史料』一巻下　信濃史料刊行会
同　　1957　『上原』　長野県教育委員会
小野正文　1986　『釈迦堂I』　山梨県教育委員会
小野和之・谷藤保彦他　1986　「中畦遺跡・諏訪西遺跡」　『関越自動車道発掘調査報告書第9集』　群馬県埋文調査事業団
河西清光・大久保知巳他　1969　『有明山社』　長野県考古学会研究報告書9
金井正三　1982　「縄文前期有尾式土器の再検討」　『信濃』第34巻4号
黒岩文夫・富沢敏弘　1985　「中棚遺跡」　『関越自動車道発掘調査報告書』　群馬県昭和村教育委員会
児玉卓文　1980　「縄文時代前期」　『編年—中部高地における型式—』　千曲川水系古代文化研究所
小林公明　1980　「縄文前期における南方的要素」　『山麓考古』12号
小林達雄他　1965　『米島貝塚』　庄和町教育委員会
小林正春　1974　「千鹿頭社遺跡」　『中央道報告諏訪市その3』　長野県教育委員会
笹沢　浩・岩崎孝治他　1982　「阿久遺跡」　『中央道報告原村その5』　長野県教育委員会
谷藤保彦他　1986　「糸井宮前遺跡II」　『関越自動車道発掘調査報告書第14集』　群馬県埋文調査事業団
戸沢充則　1950　「古期縄文式文化」　『諏訪考古学』5号　史実会
戸田哲也他　1978　『堂ノ上遺跡第1次～5次調査概報』　久々野町教育委員会
戸田哲也・大矢昌彦　1979　「神ノ木式・有尾式土器の研究（前）」　『長野県考古学会誌』34号
鳥居龍蔵　1924　『諏訪史』　第一巻
樋口昇一　1957　『上原』長野県教育委員会
藤沢宗平　1969　『中越遺跡—昭和43年度緊急発掘調査概報—』　宮田村教育委員会
同　　1970　『中越遺跡—昭和44年度緊急発掘調査概報—』　宮田村教育委員会
藤沢宗平他　1974　『有明山社』　長野県考古学会研究報告書9

宮沢恒之・樋口昇一他　1976　「十二ノ后遺跡」　『中央道報告諏訪市その4』　長野県教育委員会
宮坂虎次他　1978　『よせの台遺跡』　茅野市教育委員会
森嶋　稔・笹沢　浩　1966　「長野県埴科郡戸倉町巾田遺跡調査報告その1」　『信濃』18巻6号
同　1967　「長野県埴科郡戸倉町巾田遺跡調査報告その3」　『信濃』19巻3号
同　1975　「男女倉C地点」　『男女倉』　和田村教育委員会
山根弘人他　1981　『御所遺跡』　山梨大学考古学研究会
山下勝年・杉崎　章　1976　『清水ノ上貝塚』　南知多町教育委員会

# あ と が き

遺物の実測など報告書作りの作業に手を着けてから、足掛け十年の月日が経ってしまった。今日まで刊行が遅延した理由はいくつかあるが、何といってもそのご増大してきた緊急発掘に忙殺されていることが大きい。

けれども、無為に時は過ぎたわけでなく、この十年の間に各方面の研究はそれなりに着実な進展をみた。本書にはそうした最新の動向が汲まれている。すなわち、八ヶ岳南麓における新石器農耕文化の実体を把握すべく、基礎的な資料と認識の蓄積を心がけたつもりである。ただ、集落の動態や社会組織の問題、また中期後半を特徴づける埋甕や伏甕の習俗などについて考察する余裕がなかったのは、ひとえに我々の力不足である。もちろん他にも考察すべき課題は山積しているが、その点に関して少しふれておきたい。

おおざっぱにみてこの地域では、曽利II期の集落とIV～V期の集落が場所を違えて営まれ、III期の営みは中断していると言って過言でない。いっぽうこの十年来、同じ八ヶ岳南麓の山梨県北巨摩郡下で何箇所か発掘された曽利文化期の集落址は、断然III期が優勢であって、II期の集落が見当たらない。一見してそこには、II期からIV期の間に生起した集落移住の有り様が示されているものと思われる。より広い視野に立って、そうした集落の動態をとらえ、曽利期の社会の動きといったことを問題にのぼさなければならない。

それぞれの集落のあり方については、各章で一通りの検討を行った。だが、これまでに指摘されてきているような事実関係にとどまり、人間の関係にまで踏み込むことはできなかった。二軒一対あるいは三軒一組といった集落構成の基本単位がどのような人間関係を意味するかについては、水野正好「縄文時代集落復原への基礎的操作」(古代文化21-3・4　昭和44)ほかの先駆的な論考がある。我々もまた有効な論証方法を探ってゆきたいと考えている。

埋甕についてはこの二十年来おおくの人々が関心を抱き、近年も相次いで様々な論考が発表されている。そうしたなかにあって、多分に感性的ではあるが藤森栄一氏の「踏みつけられる精霊」という着想は、今日なお新鮮なイメージを失わない。埋甕という習俗が当時の人々の思惟のあらわれだとすれば、同時代の世界観の基調をなすものが何であるかを知る必要があろう。その点に関して近時われわれは、土器文様の図像学的解釈を通して探究しているところであるが、その根幹に横たわるのは「死と再生」である。いずれ、そのような方面から埋甕の問題について考えてみたいと思う。

ところで、発掘された遺構の中で特に注目されるのは敷石地上絵と呼んだものである。これの性格と意義については、最近の研究成果を踏まえて解釈を試みた。事の当否は別として、地

上に遺されたこうした石敷遺構を図像としてはっきり認識しようとする立場は、従来みられなかった全く新しい視点であろう。

さて、出土遺物のうち石器は全点を網羅し、記述は『曽利』を踏襲した。いうまでもなく、石器すなわち石の道具こそ人々の生活を支えた第一義的な労働手段である。その石器が何に使われた道具であるかを問うことなしに、当時の生活を知ることはできない。ところが驚くべきことに、その問いにまともに答えることもなく採集経済論がまかり通っているのが、日本考古学の偽らざる実態である。〈打製石斧〉という名の〈土掘り具〉などといった戯言を、このさき何世代つづけてゆくのであろうか。笑止を通り越して、事態は深刻である。学の体をなさぬとは、このようなことを言うのである。

つぎに土器についても、石器論を援用して生活用具としての体系的な把握を試みた。それが成功したかどうかはともかく、型式編年論とは別な土器文化論の枠組みは設定しえたものと思う。

遺物のなかで特筆すべきは、炭化麦である。その遺存状態からして曽利Ⅴ期に属すことは疑う余地がない。しかし、こうもずばり出られると、却って半信半疑になってしまうというのが率直な気持ちである。これについてはいずれ専門家の鑑定を仰ぎたい。

ただ我々は、これによって曽利期における麦栽培を云々しようというのではない。もちろん栽培作物の遺体が出るにこしたことはないが、「論者よく栽培植物の未発見をもって、その反論の根拠としているが、私はいまも、籾がでた麦が出た、里芋も有り得た、クリも栽培し得たといった論拠によろうとは思っていないのである。……掘り出されたこの文化構成は、どうしても農耕があったと考えなくては、理解がつかないという論法がとりたいのである」と述べた藤森栄一氏の態度こそ新石器農耕文化論の本筋であろう。

翻って後になったが、向原から唐渡宮にわたる黒浜並行期の集落は、当地方における定着的な集落の営みが前期中葉に遡ることを教えてくれた。その後の発掘調査で、切掛川右岸の森平（もりだいら）と母沢川右岸の机原（つくえばら）三本松に同期の集落が存在することが知れている。阿久遺跡の発掘を契機としてこの十年来、八ヶ岳山麓から諏訪湖盆地域では前期の集落址が次々と発掘された。この地方において前期観を確立すべき材料は揃ったといえよう。これまた眼前の課題である。

以上、本書で及び得無かったことや意図したところなどを補ってみた。昭和33年の春先、井戸尻遺跡において初めて組織的な発掘が行われてから、ちょうど三十年の歳月が流れる。多少の紆余曲折はあれこの三十年、八ヶ岳南麓における中期文化の研究は一貫した道を歩んできた。本書がこれからもずっとつづく遥かな道程の一里塚となることを念ずるとともに、まだまだ多くを残すこれらの遺跡群が子々孫々の未来にまで受継がれんことを切に願って、結びとしたい。

（武藤　雄六・小林　公明）

坂上・向原遺跡附近航空俯瞰　(昭和44年10月17日　協同測量社撮影)

坂上遺跡　（中央の尾根）

坂上遺跡発掘風景

坂上１号住居址

坂上２号住居址

坂上３号住居址

坂上５号住居址

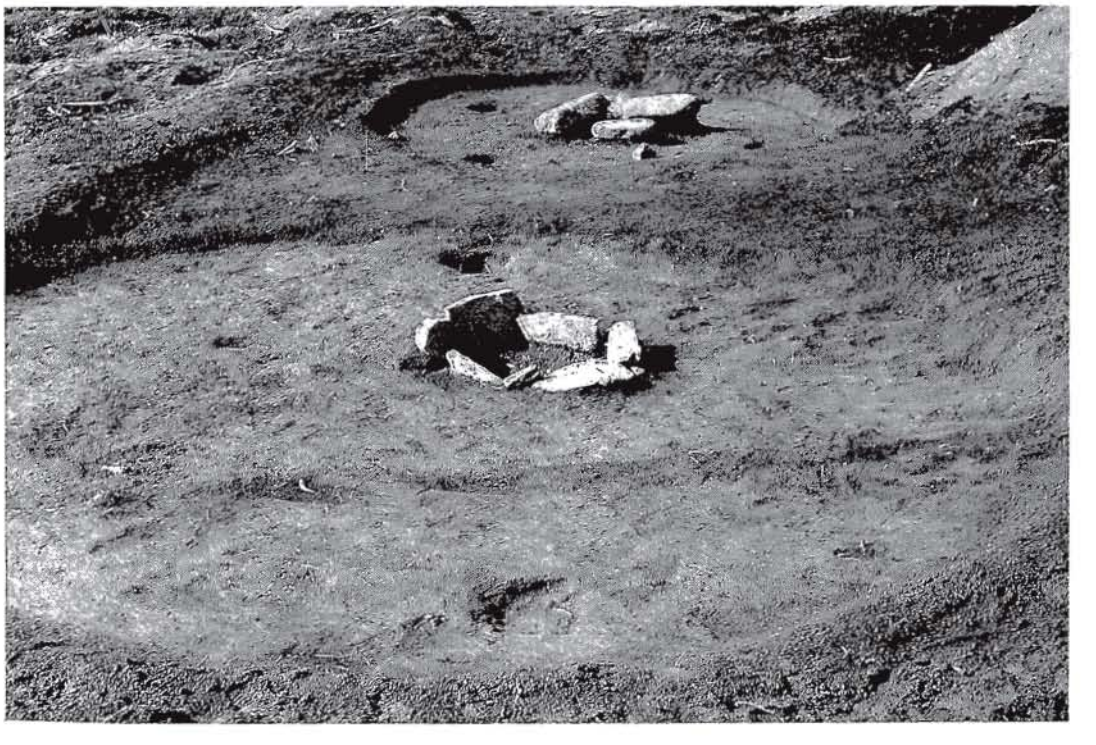
上　坂上４号住居址　　下　４号址北側の配石　(北側から)

図版　6

坂上6，7，8号住居址

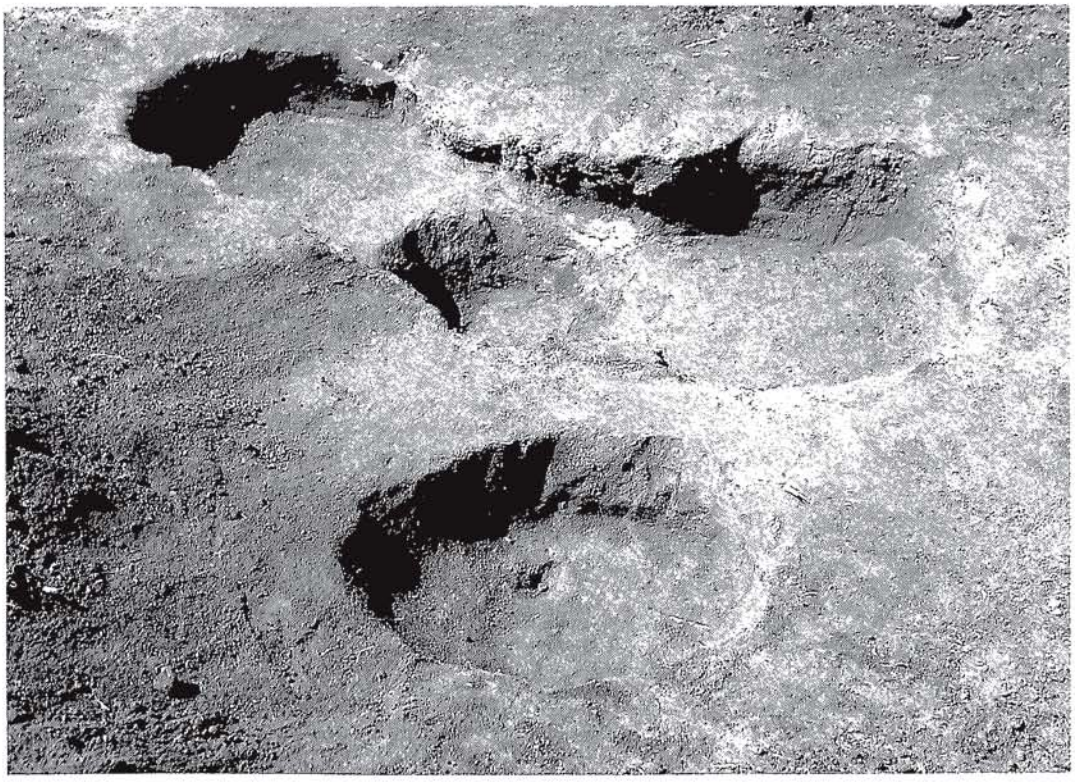
坂上6号住居址　（手前）

坂上８号住居址



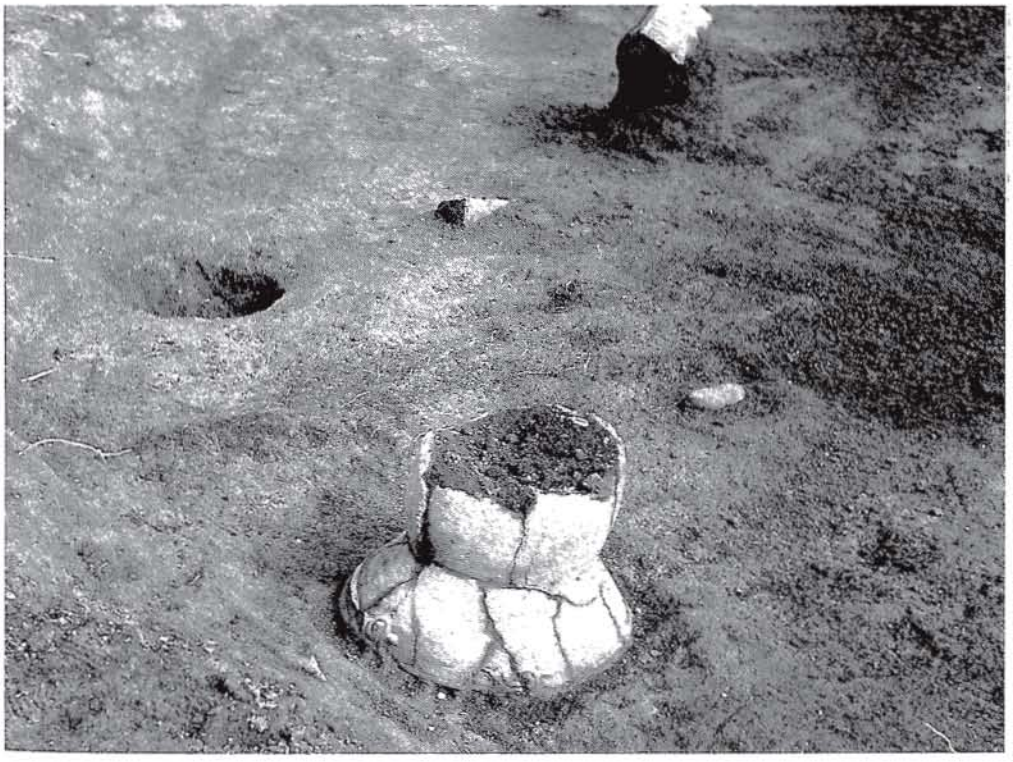
坂上７号住居址　（手前）

坂上１号墓坑検出状態



坂上１，２号および８号墓坑

土偶出土状態　(ただし首は後で置いたもの)



坂上４号址伏甕

図版 10

向原遺跡　(中央右手)

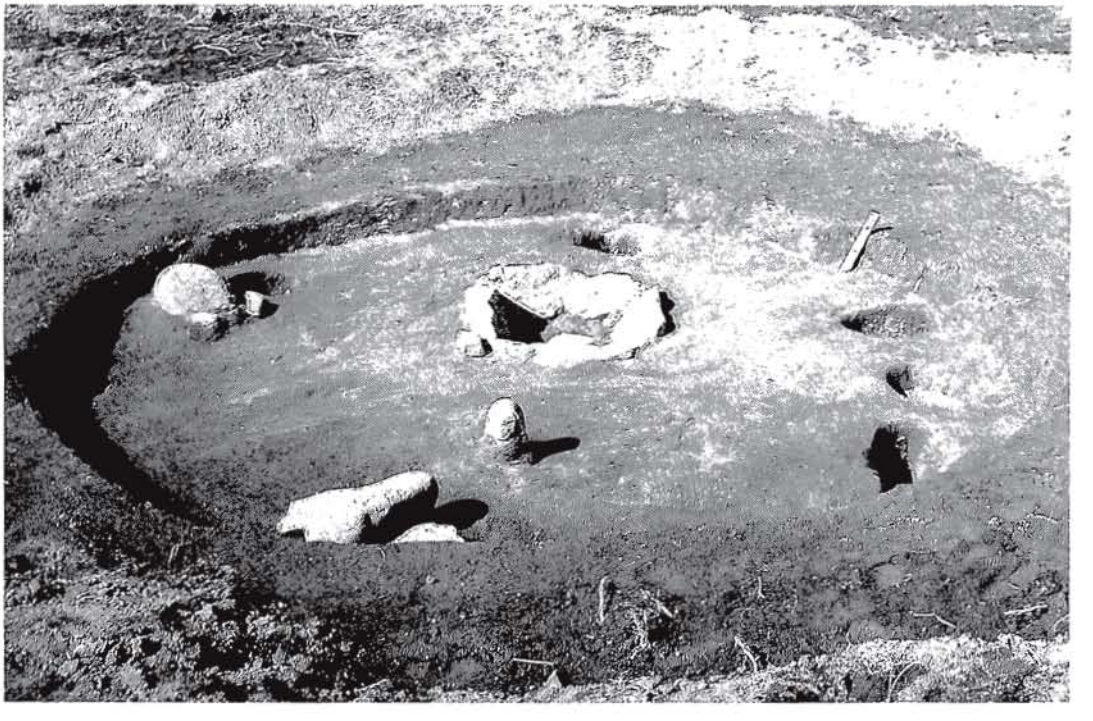
向原遺跡発掘風景

向原 7 号住居址 （前期）

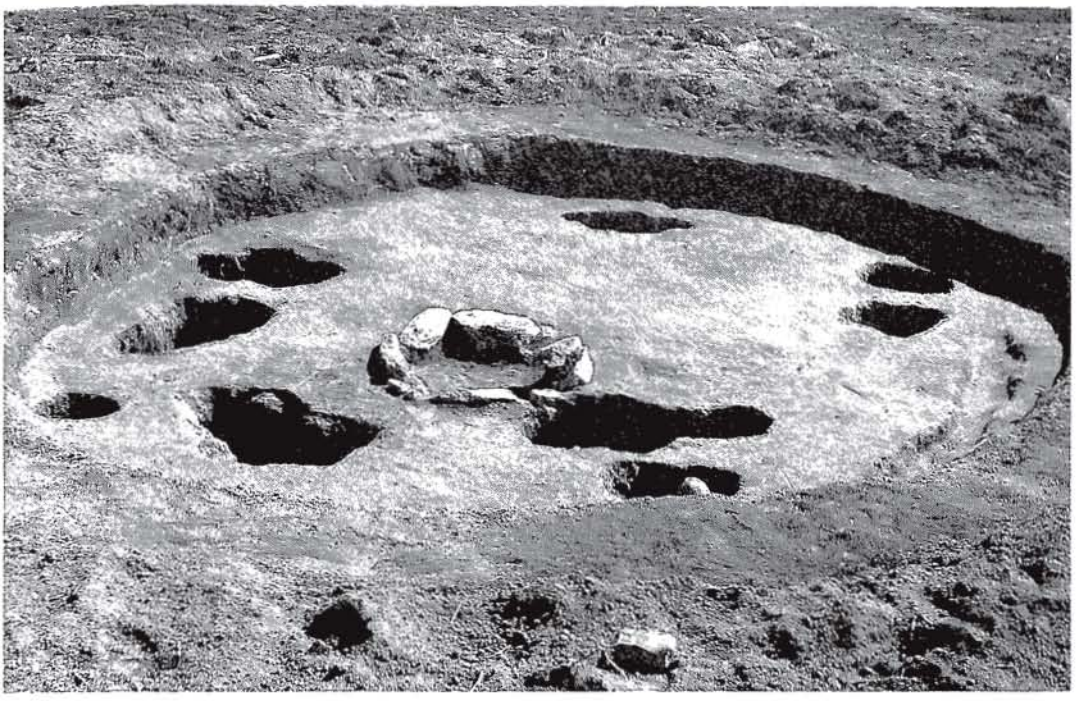
向原 8 号住居址 （前期）

図版 12

向原 2 号住居址

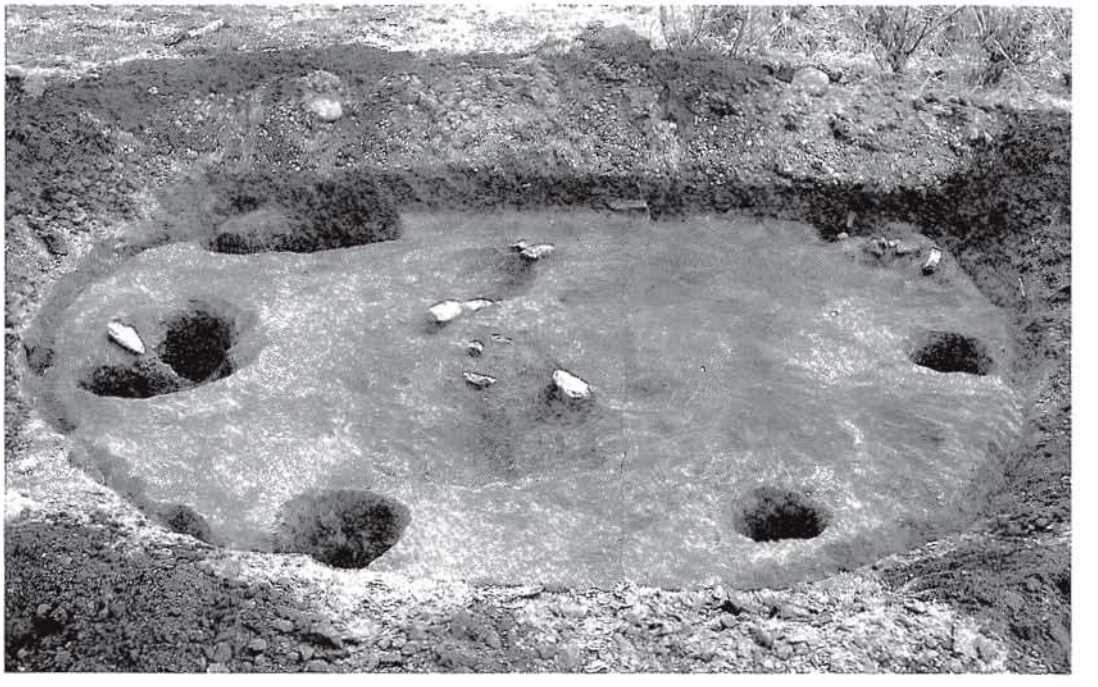


向原 5 号住居址

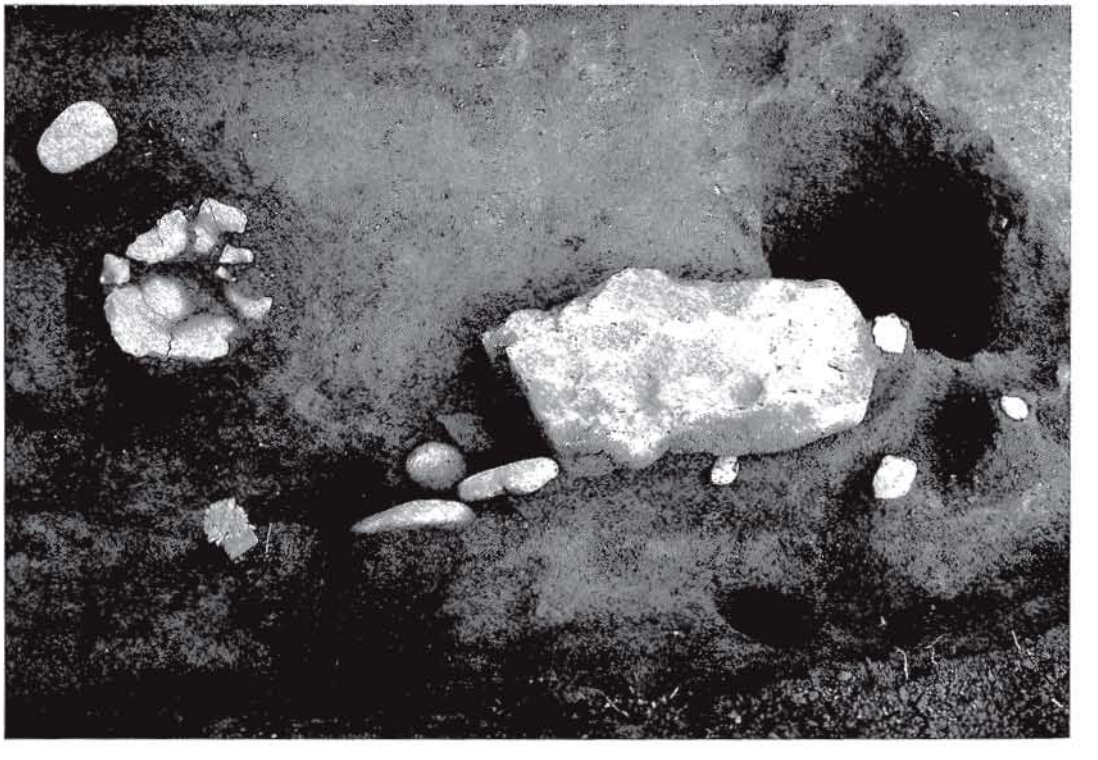


向原 3 号住居址

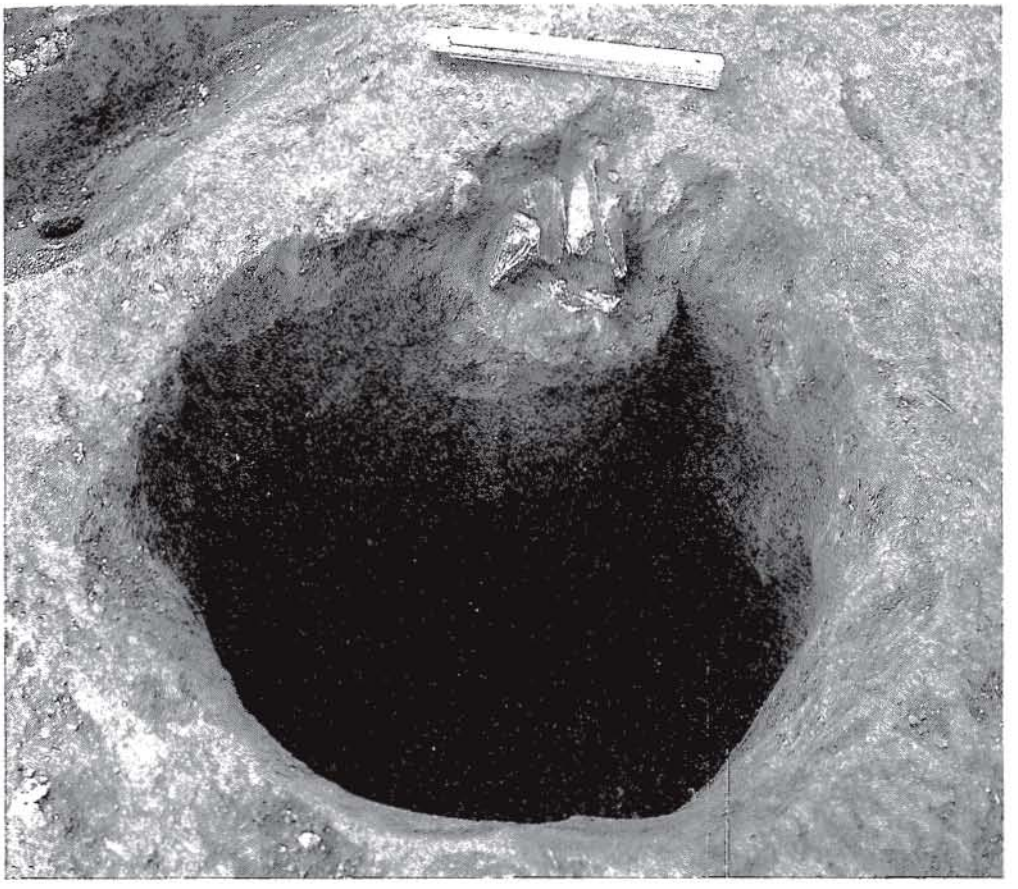
向原 6 号住居址



向原 9 号住居址



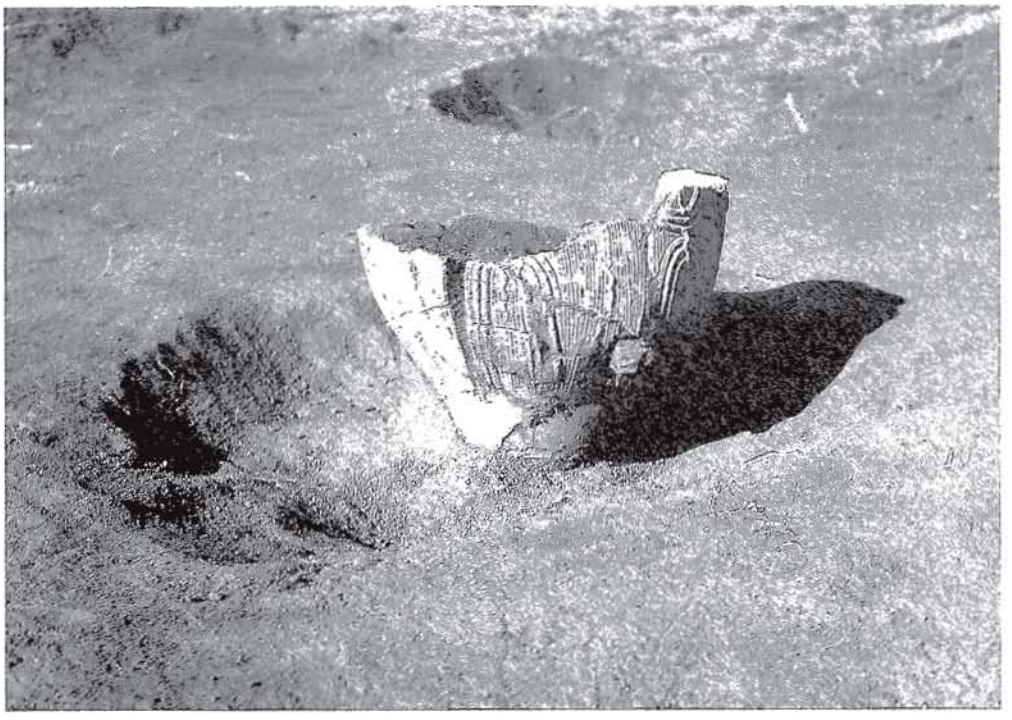
9 号址石器出土状態



9 号址黒曜石埋納状態

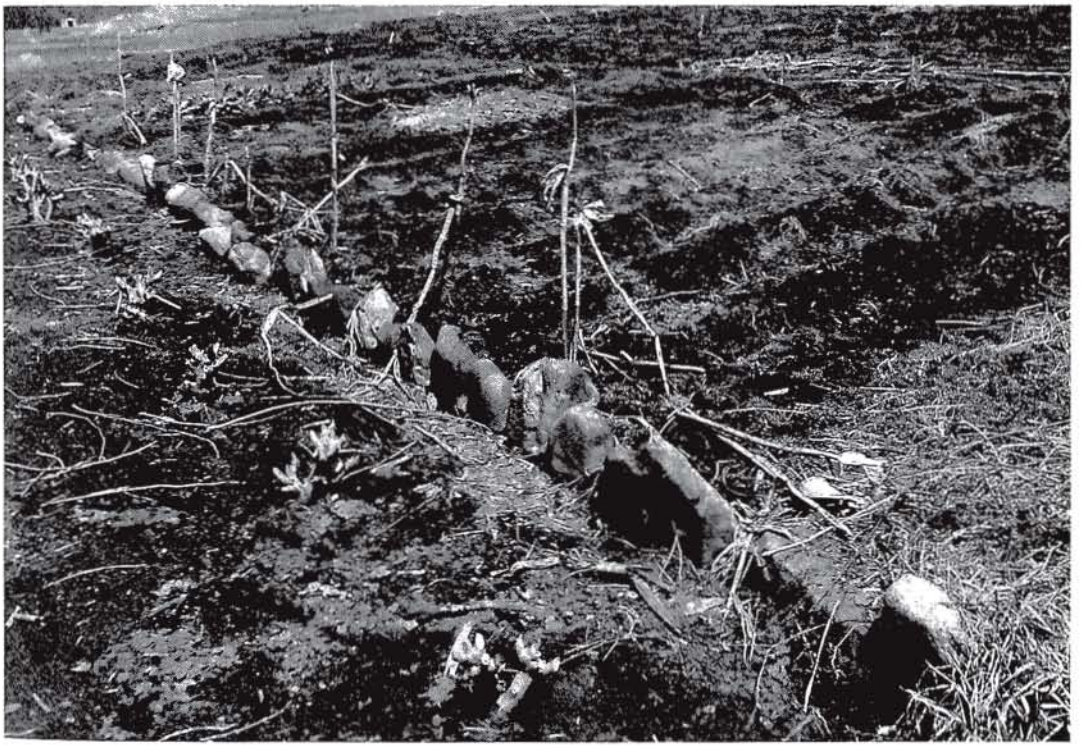
3 号址石うす出土状態

図版 16



屋外設置土器

向原 6 号址埋甕



向原遺跡　開墾時以降に掘り出された石　（上　昭和34年撮影　　下　39年撮影）

図版 18

掘り起された環状の配石(上)とその発掘状況(下)

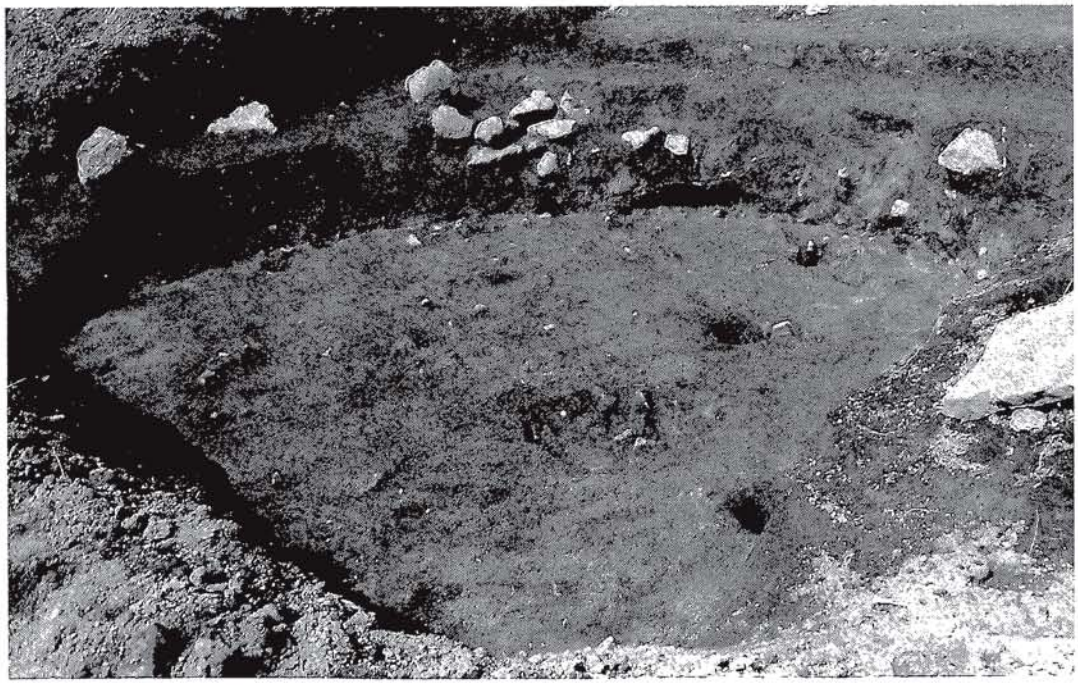
向原　配石遺構　（上　西北側　　下　東南側）

向原　配石遺構　（上　西北から　　下　東南から）

唐渡宮・居平遺跡附近航空俯瞰　(昭和44年10月17日　協同測量社撮影)

図版 22

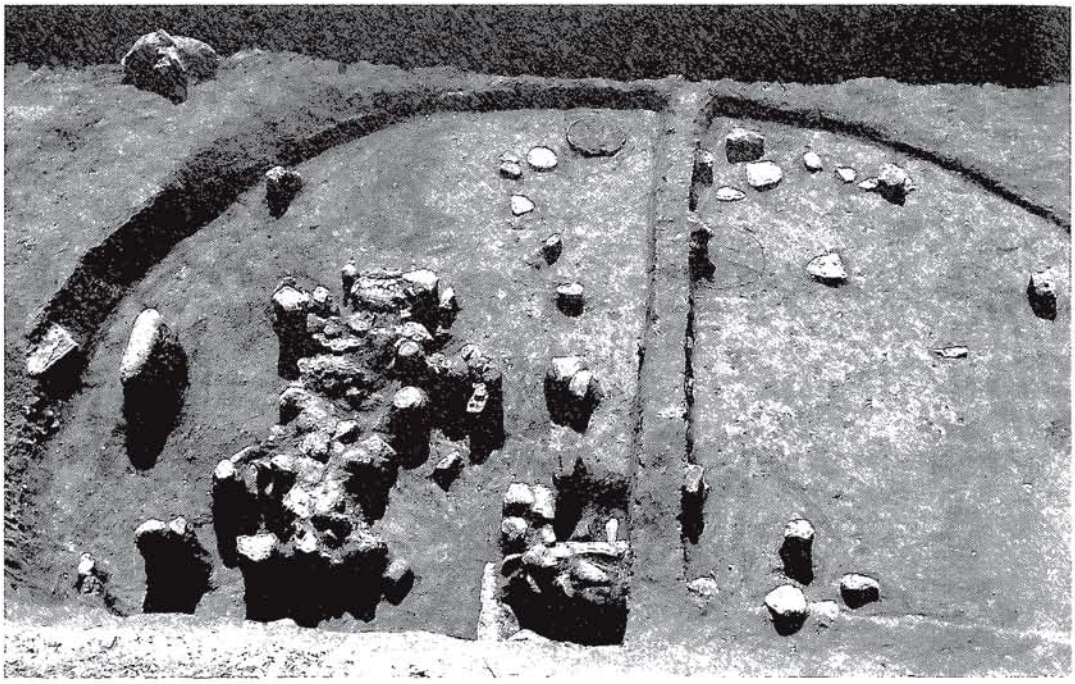
唐 渡 宮 遺 跡 （昭和49年）



唐渡宮17号住居址 （前期）

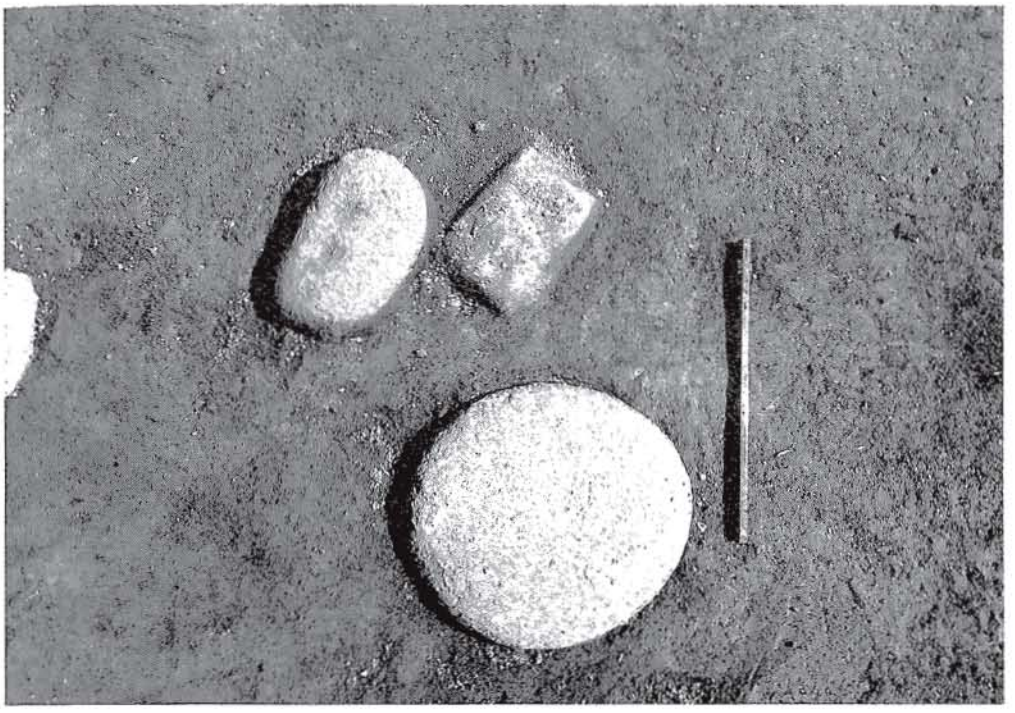
唐渡宮１号住居址　礫の堆積状態

唐渡宮１号住居址



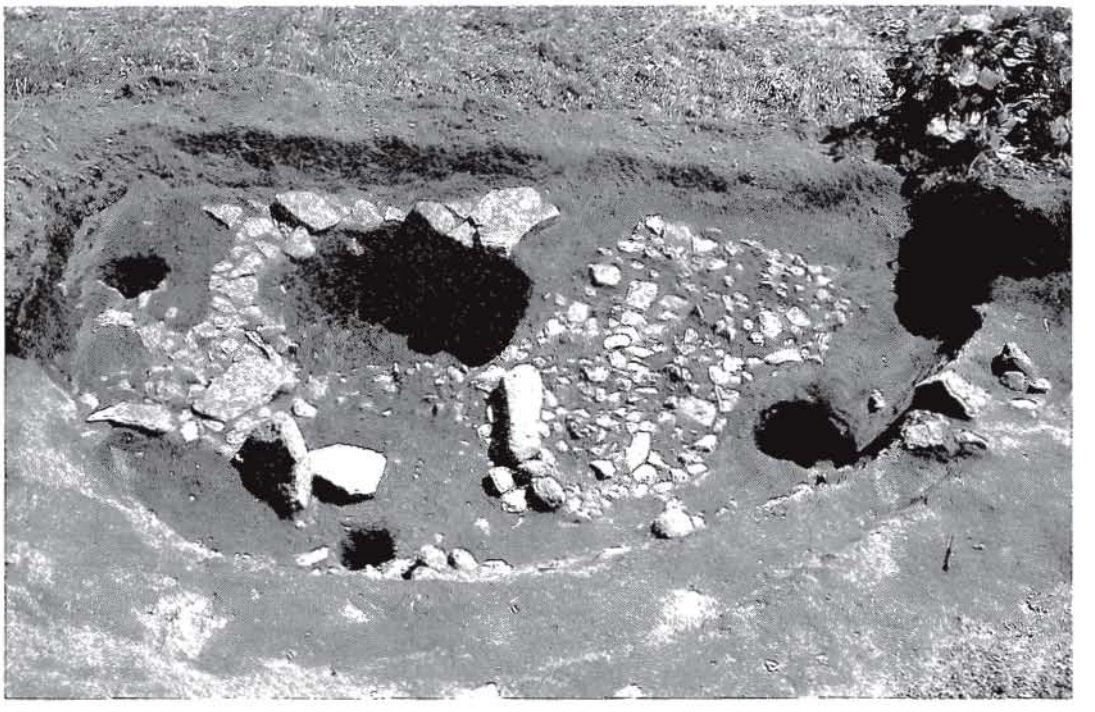
唐渡宮16号住居址　遺物出土状態

唐渡宮16号住居址



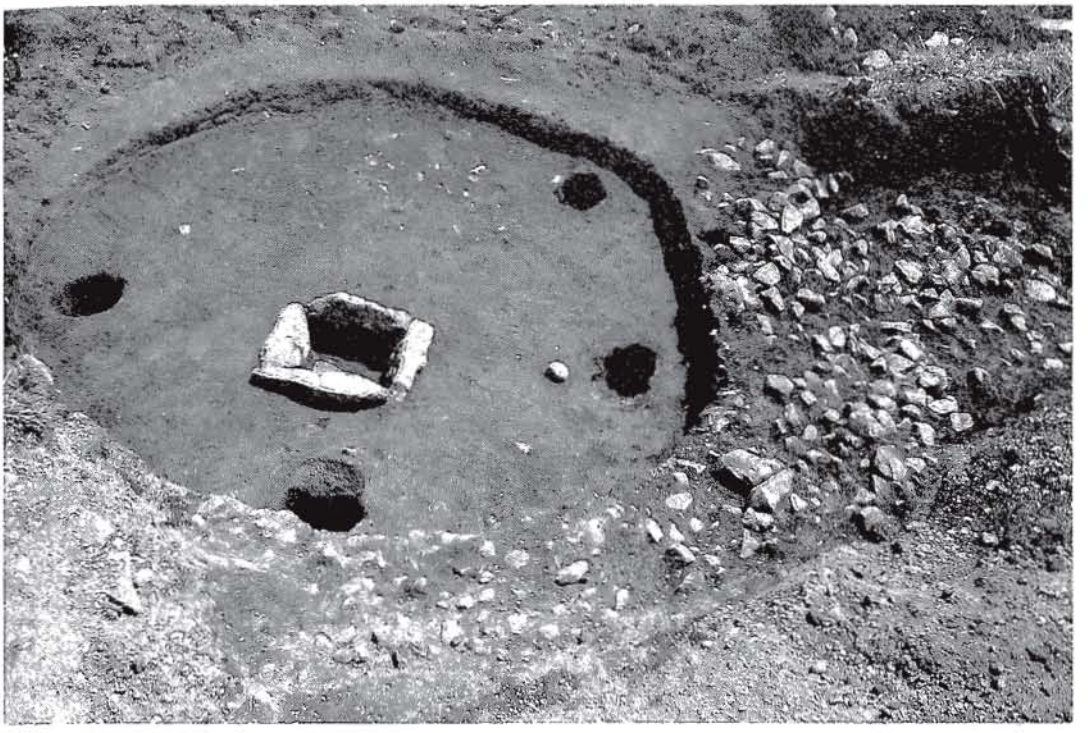
16号址　石餅と磨り石の併出状態　(右手に添えたのは鉛筆)

17号址上面の墓坑の検出状態

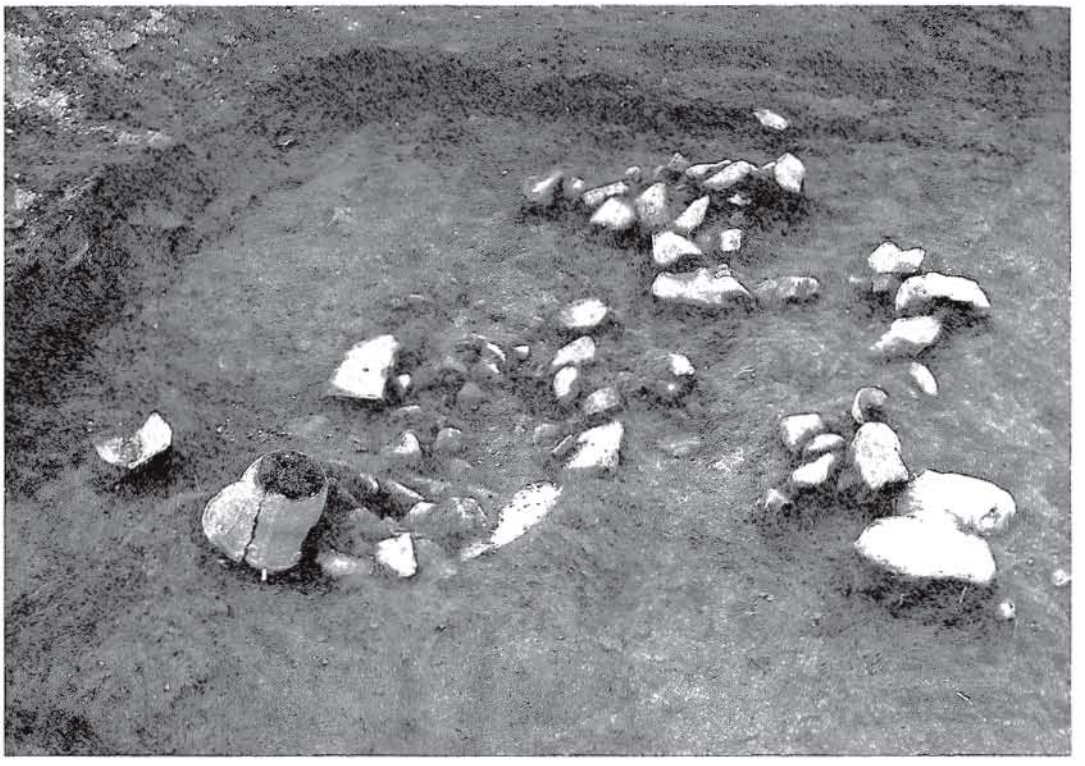


唐渡宮33号住居址

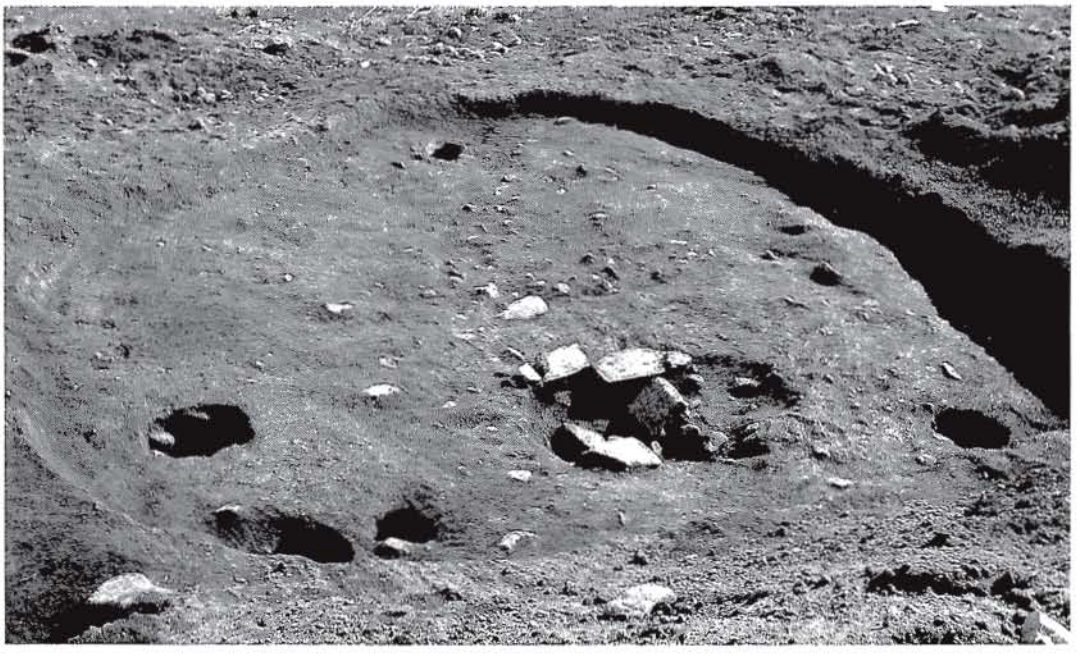
唐渡宮 2 号住居址



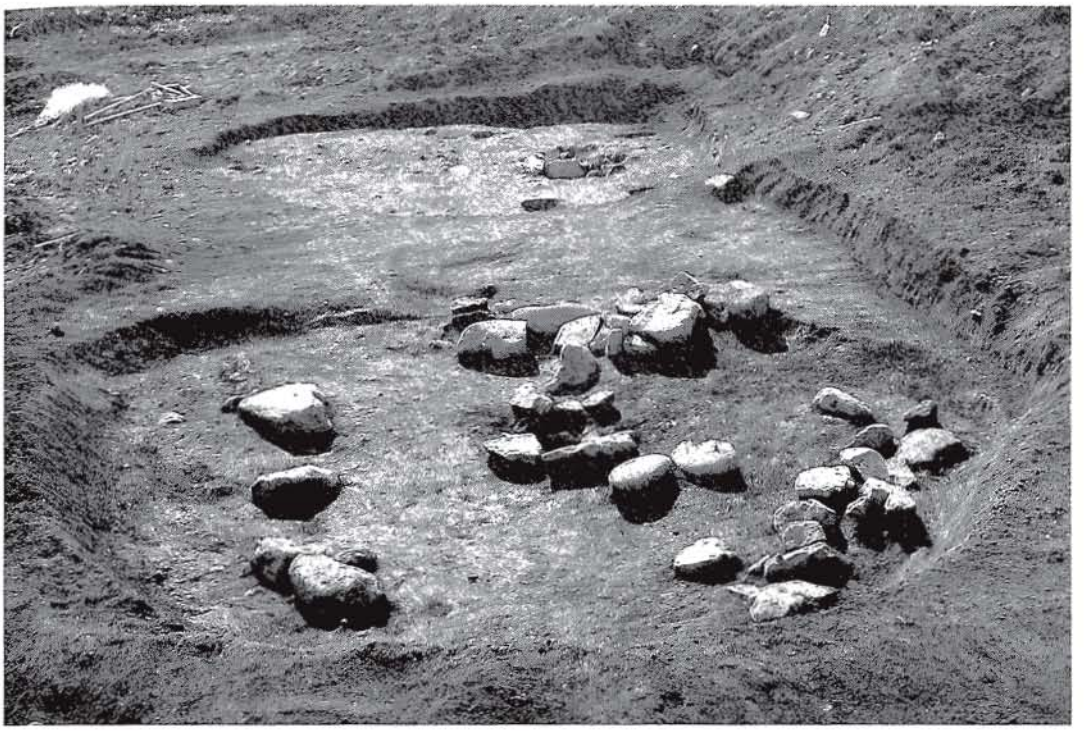
唐渡宮29号住居址



唐渡宮 3 号住居址　伏甕と礫溜まり

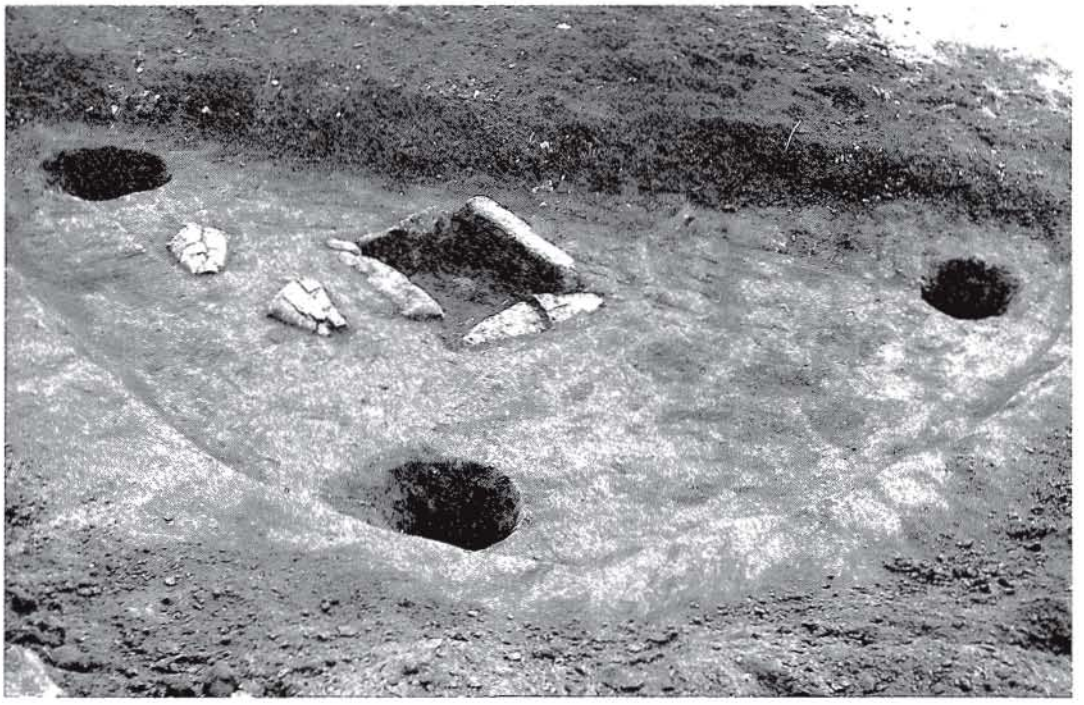


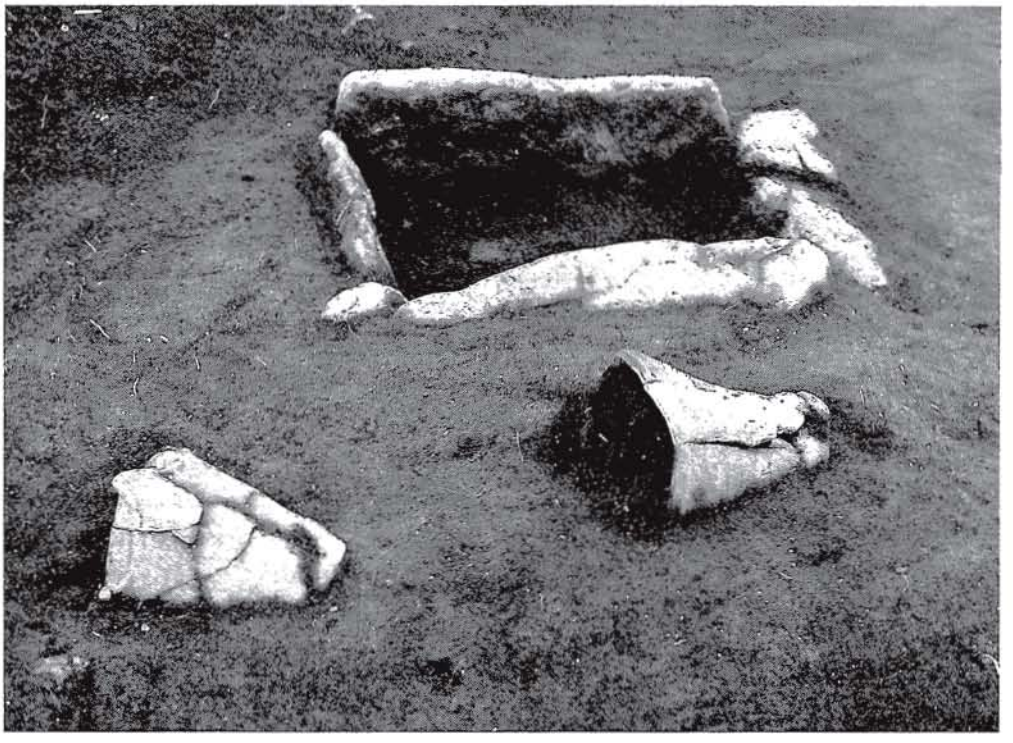
唐渡宮 3 号住居址



唐渡宮 5 号(手前)および 3 号住居址

唐渡宮 5 号住居址



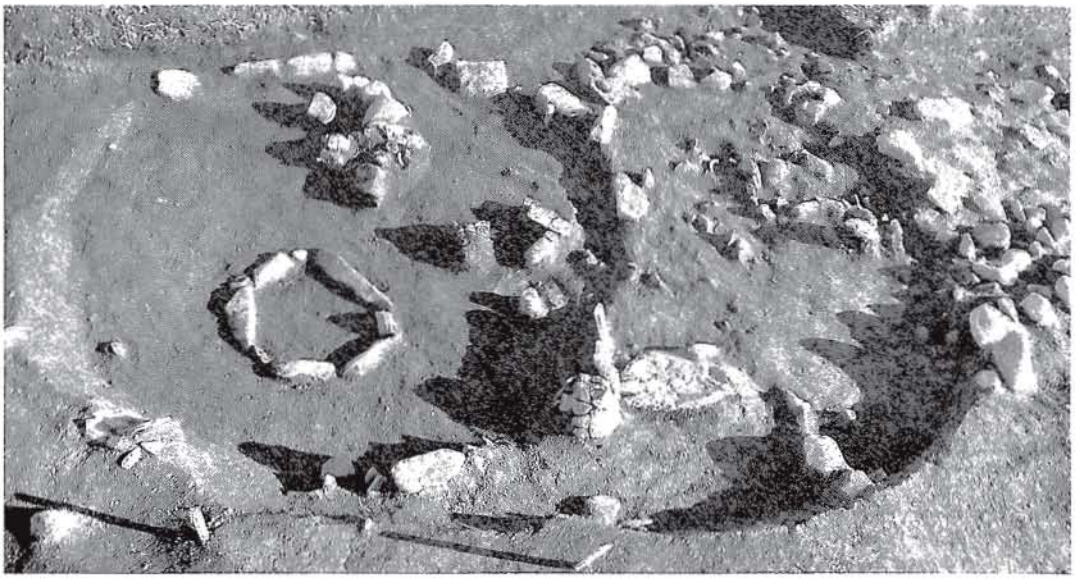


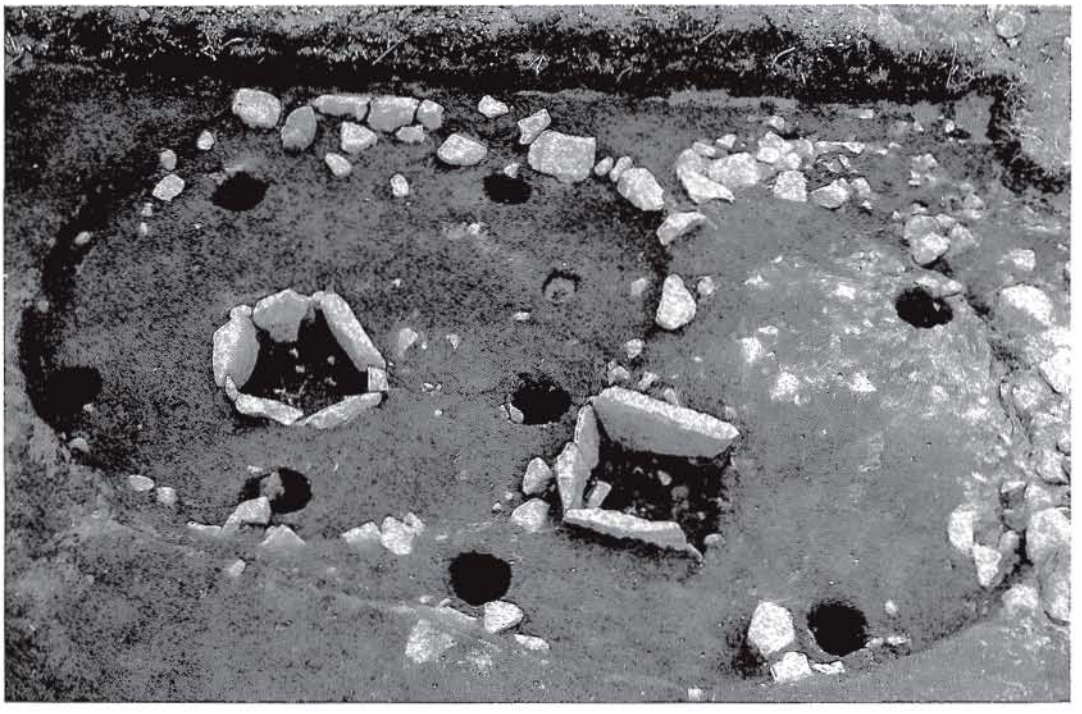
唐渡宮13号住居址

唐渡宮 6，7 号住居址

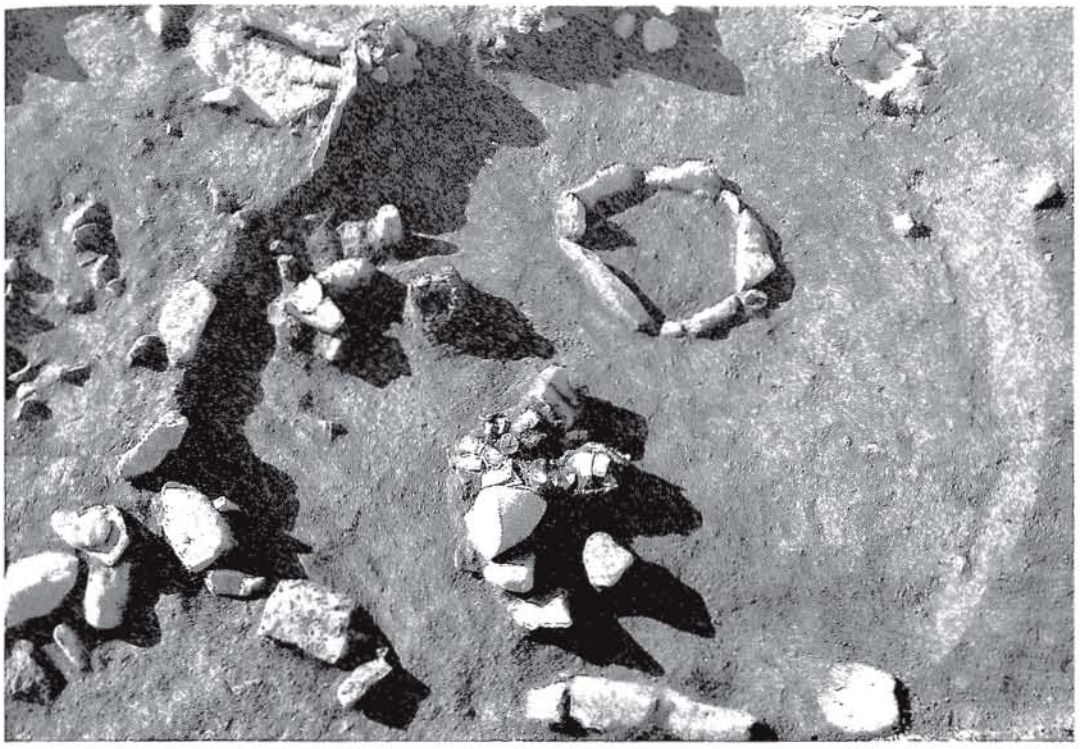
6 号 址 埋 甕

図版 32

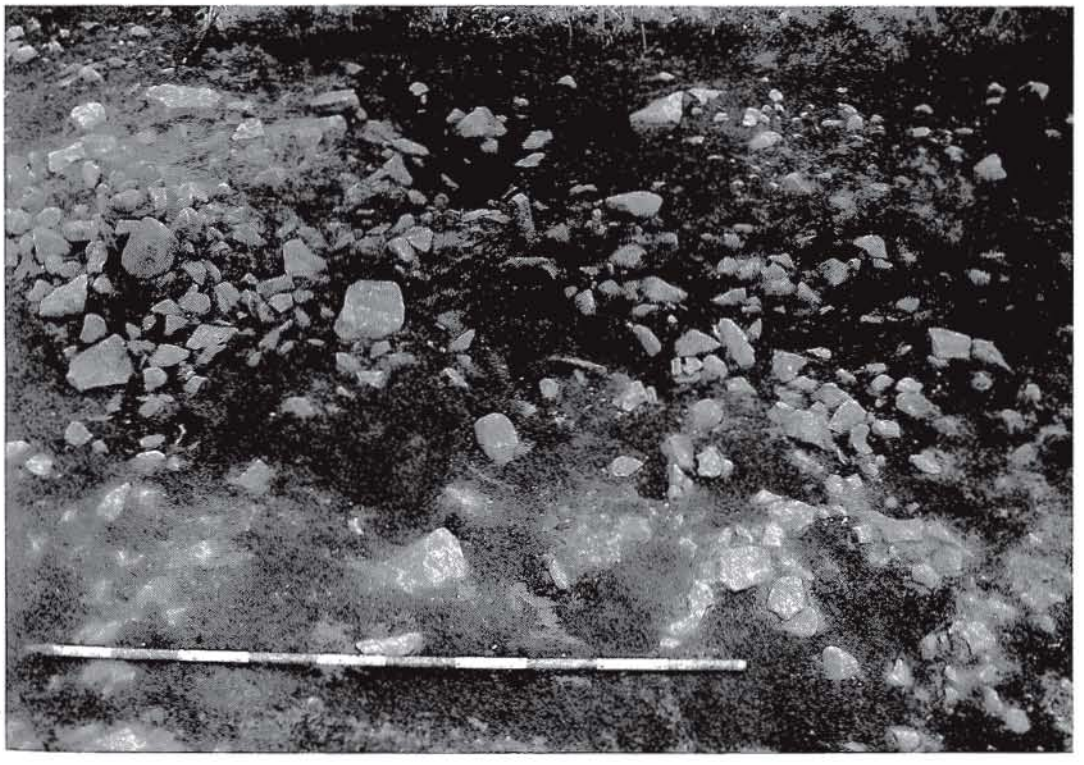




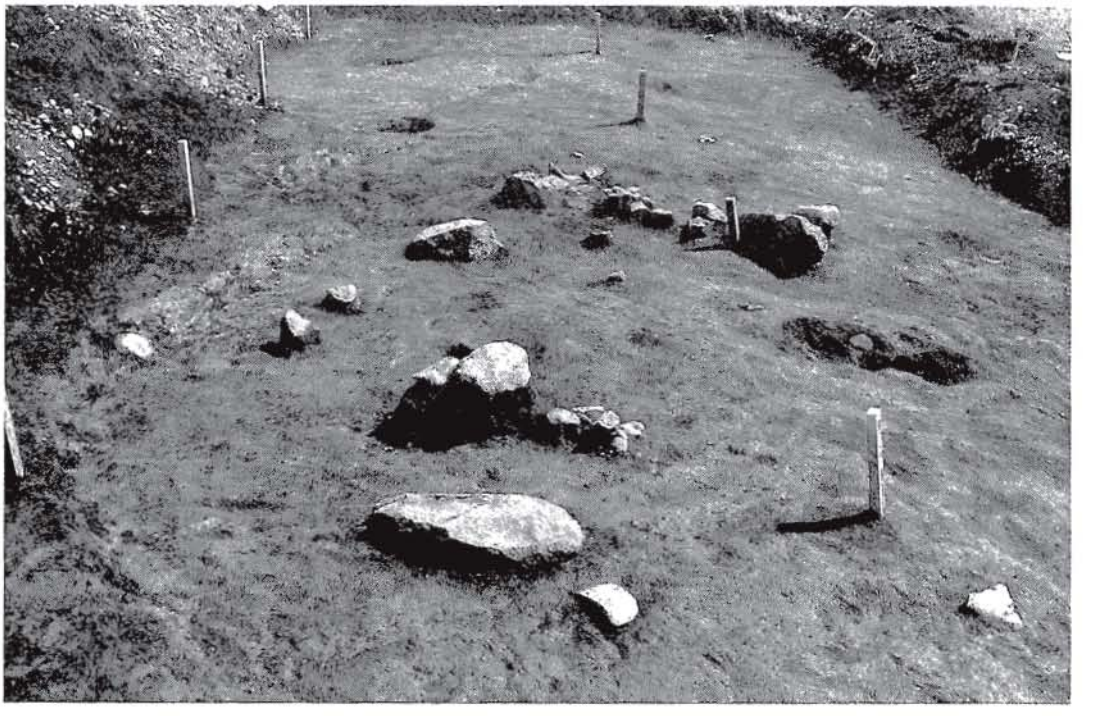
唐渡宮28，30号住居址



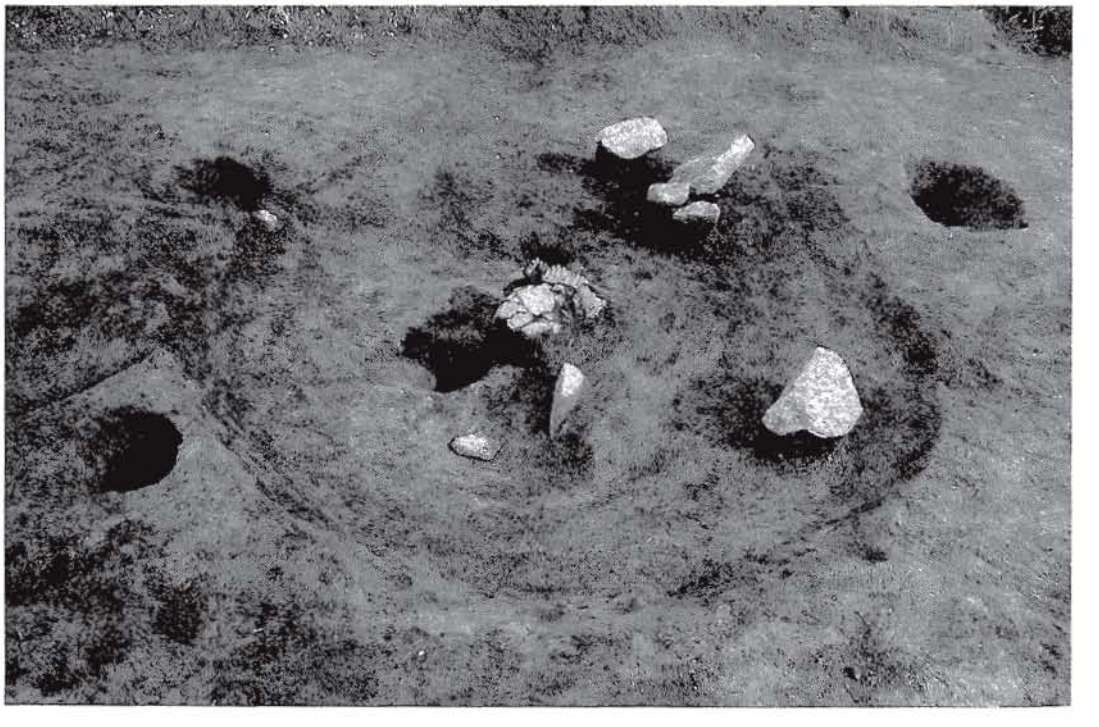
唐渡宮28号住居址　遺物出土状態



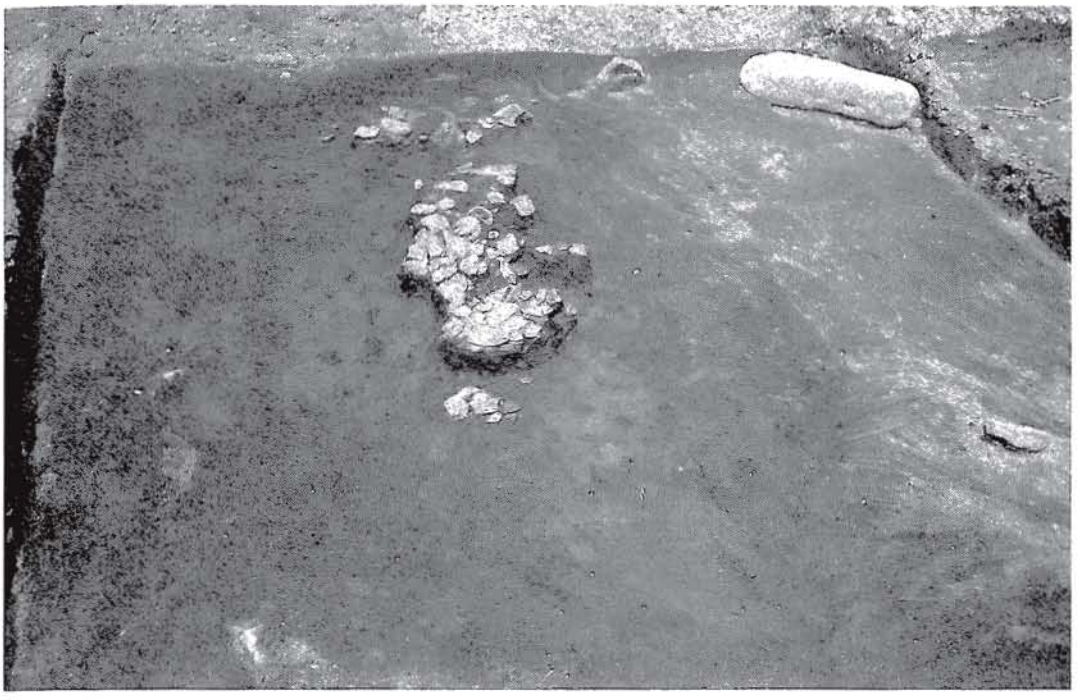
30号址西方の礫群



唐渡宮31，32号(手前)住居址

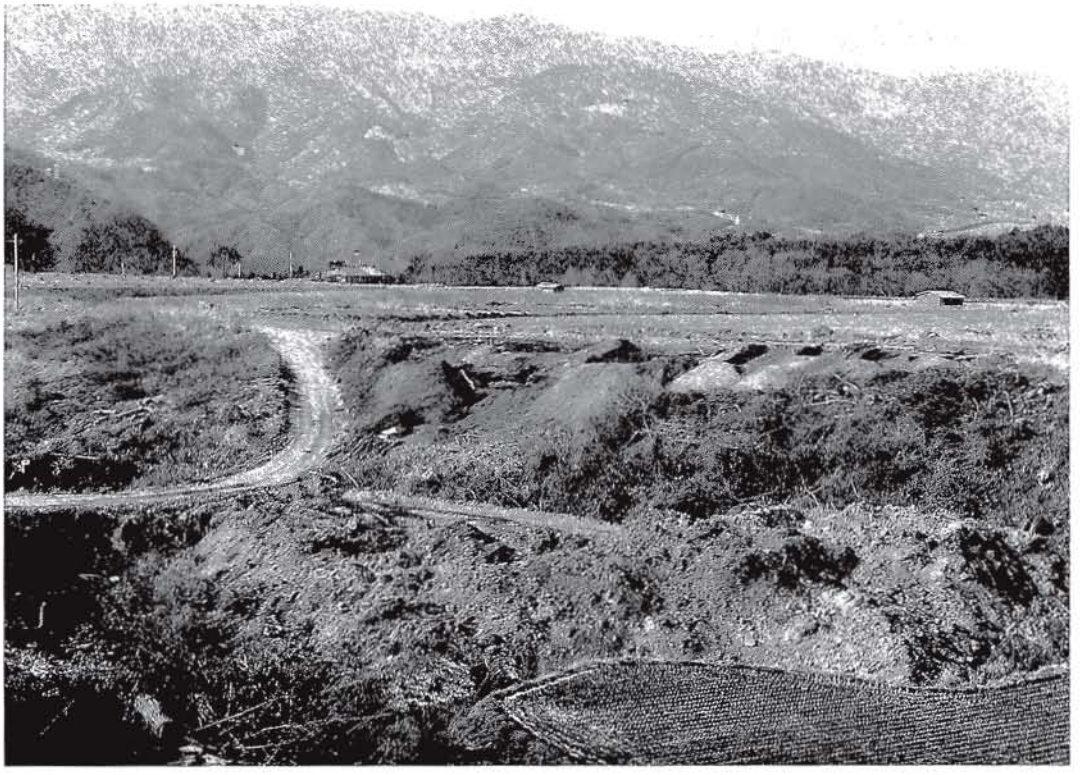


唐渡宮31号住居址



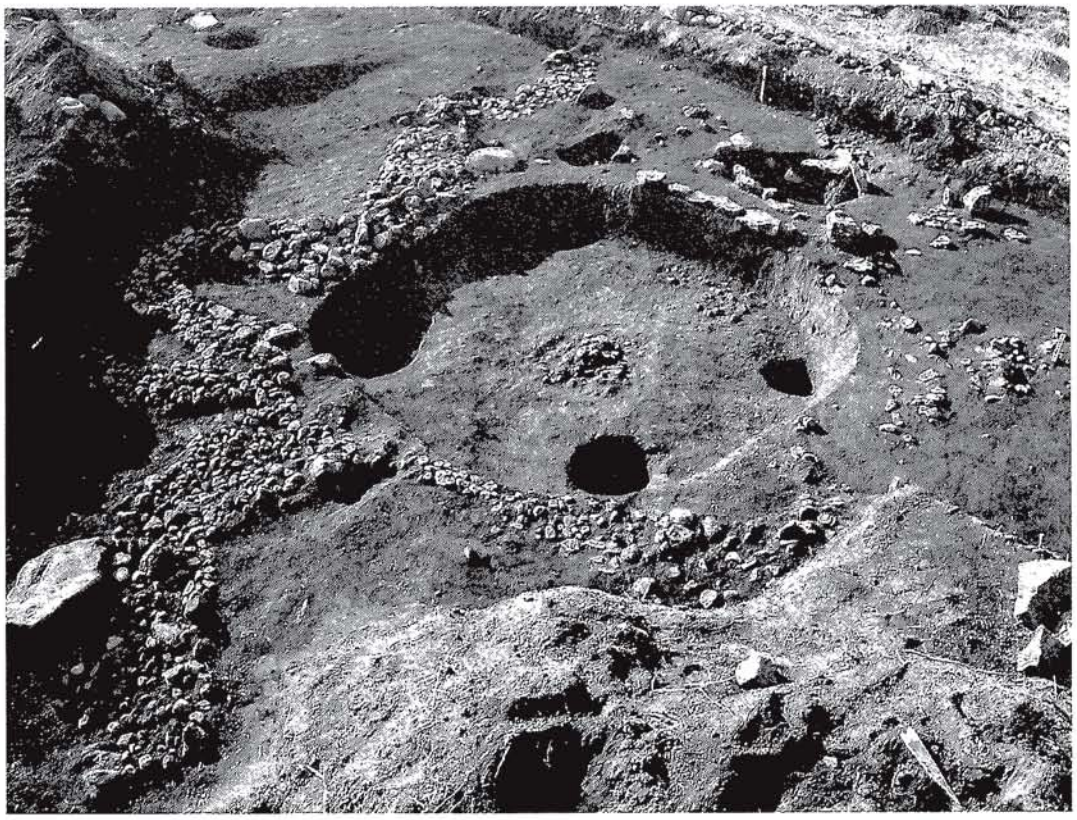
31号址東方の土器溜まり

31号址東方の土器溜まり　炭化麦の出土状態　(中央左端寄り)

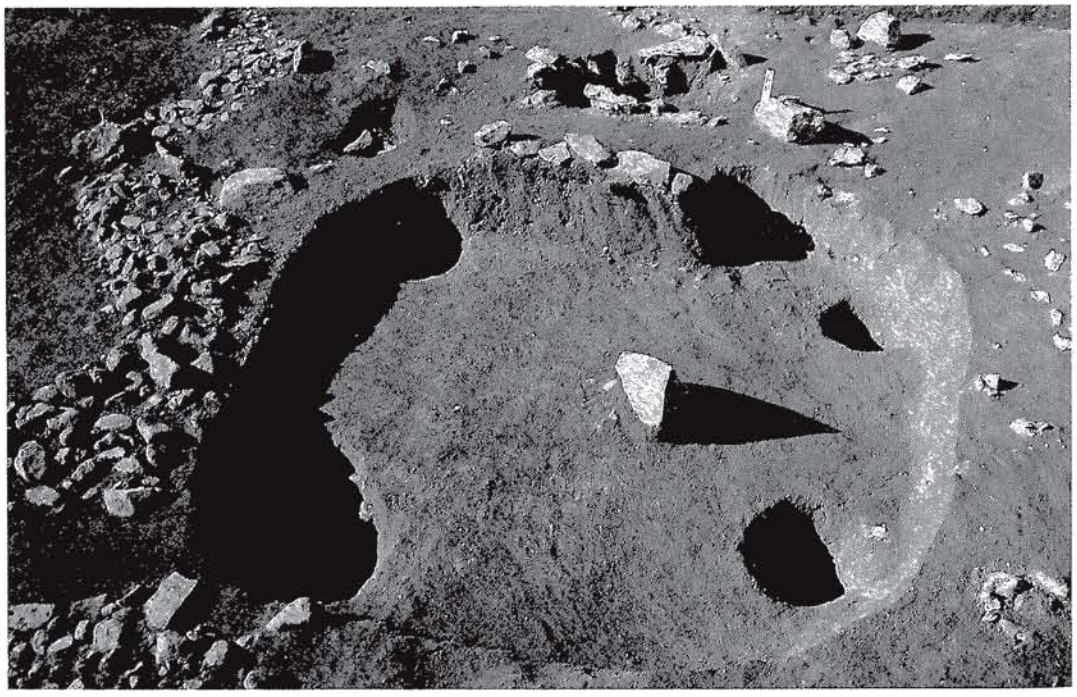


唐渡宮遺跡発掘風景　(昭和51年)

埋甕を伴う配石址



敷石地上絵の祭祀遺構

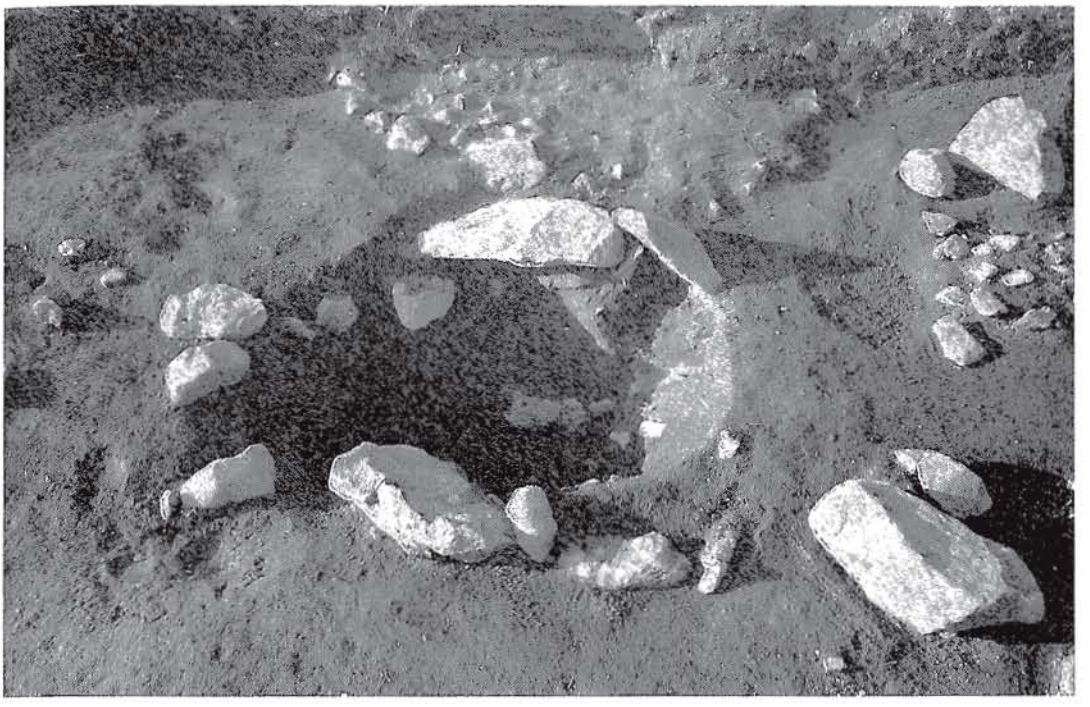


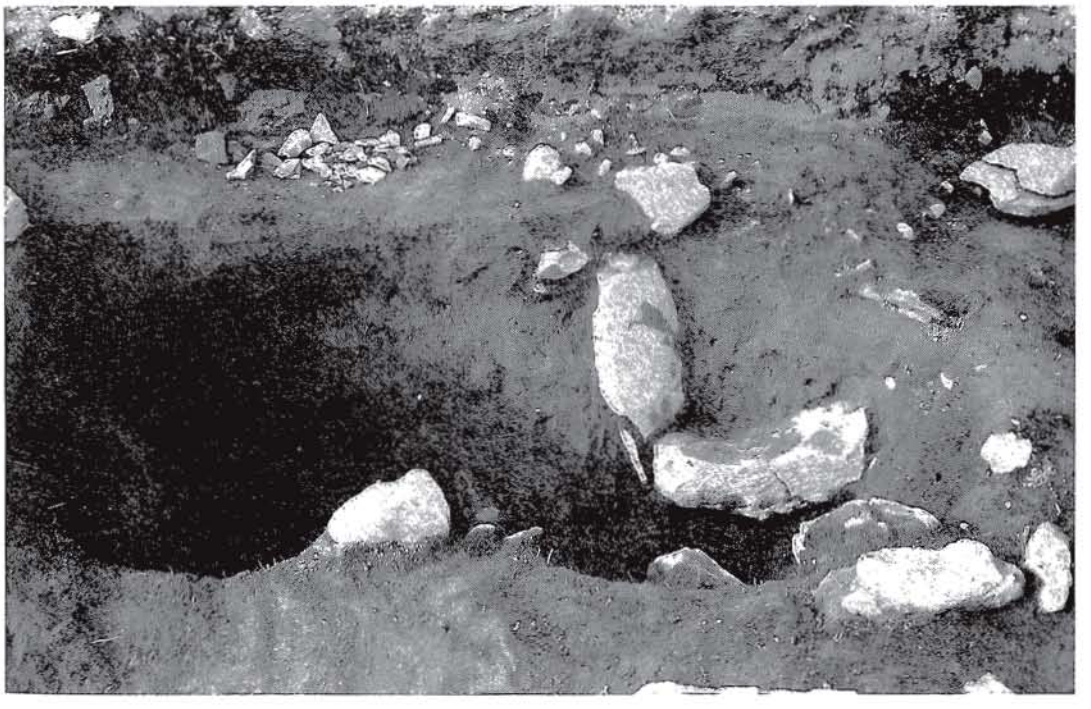
唐渡宮25号住居址　(前期)

蛇行する石敷

敷石地上絵の祭祀遺構

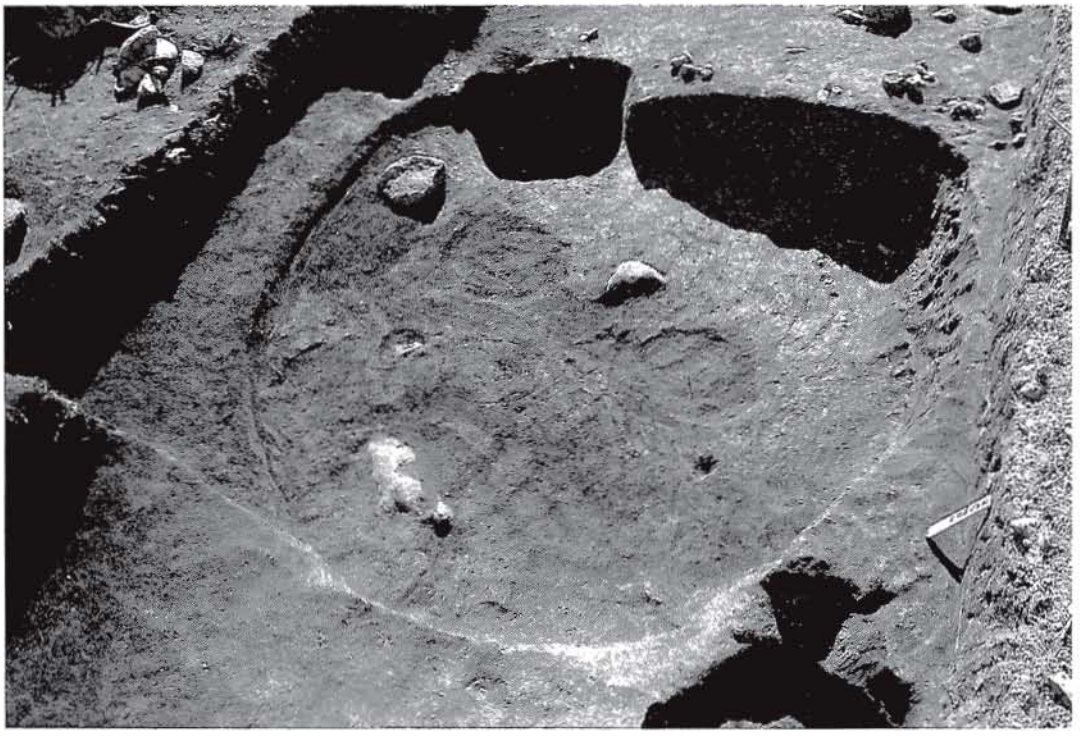
石囲小竪穴と土壇



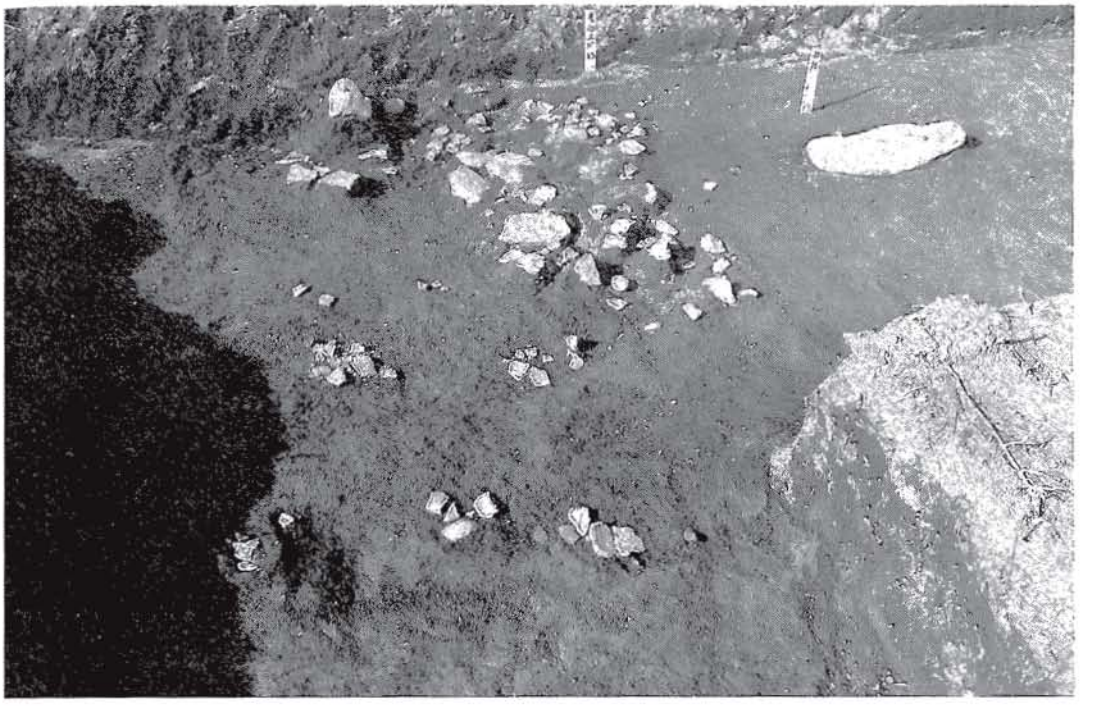


石 囲 小 竪 穴

礫と遺物の散布址　(24号址西縁)

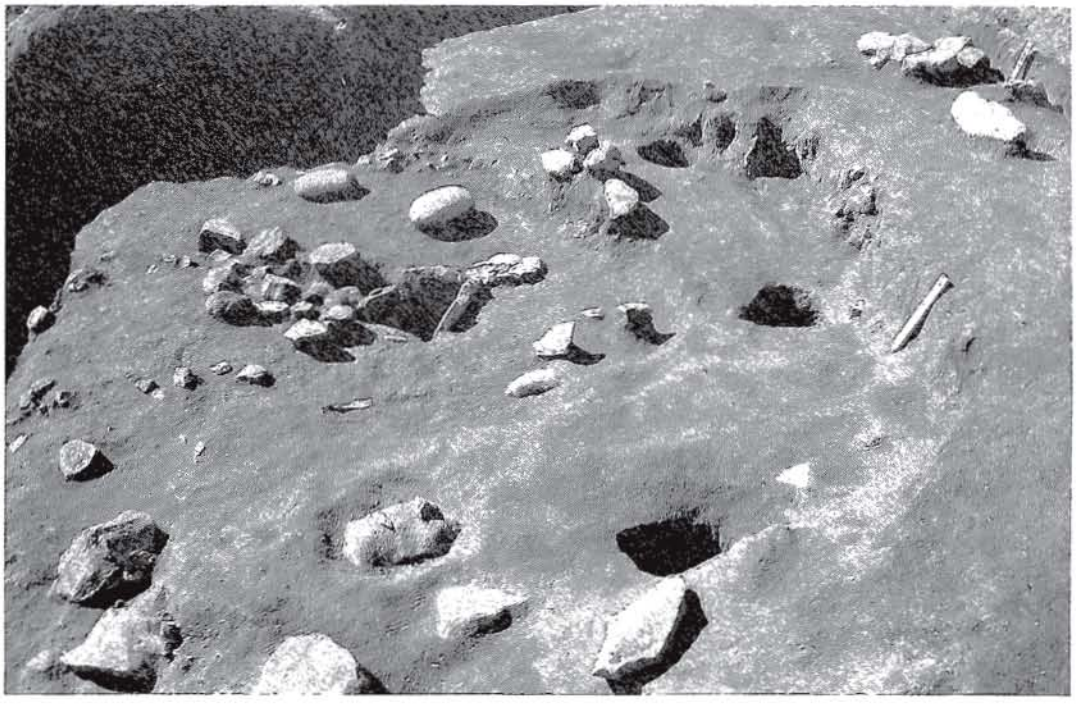


唐渡宮24号住居址　(前期)

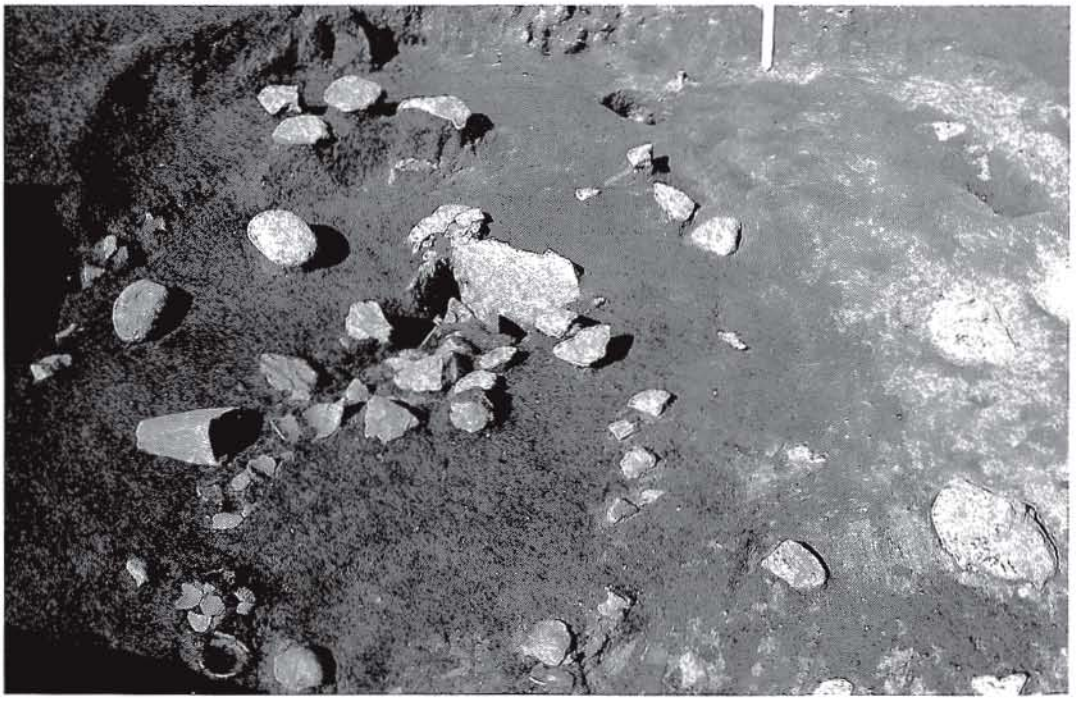


遺物溜まり　(27号址の山側)

唐渡宮23，27号住居址付近

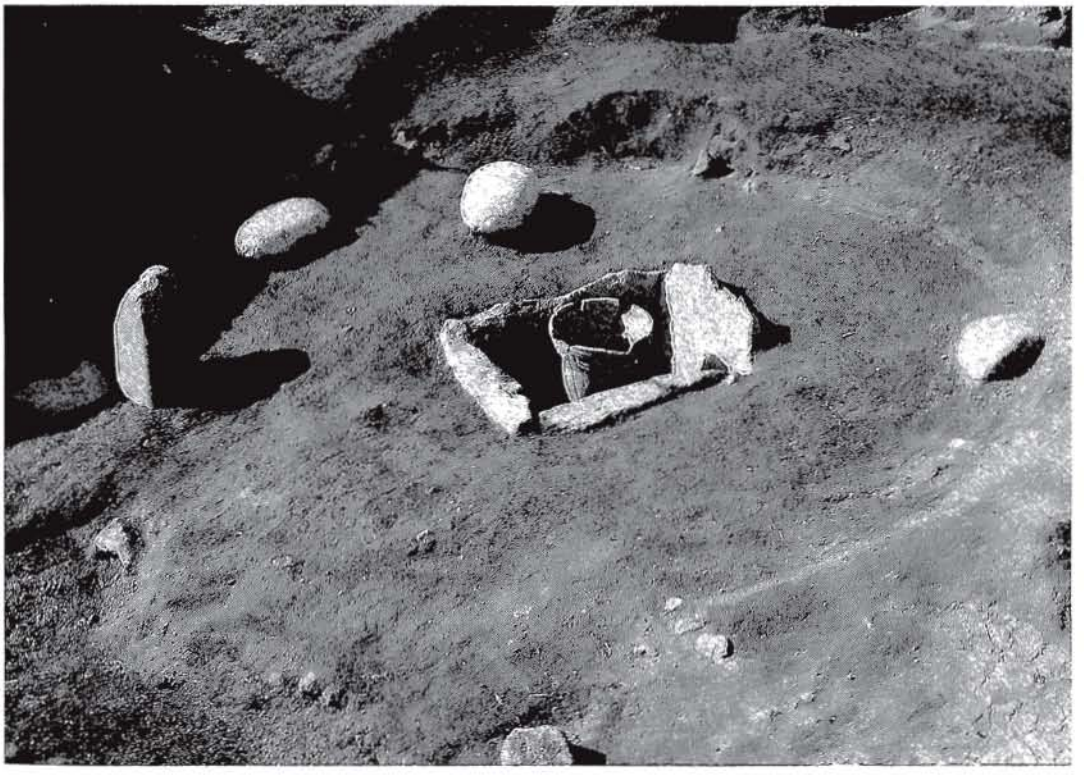


唐渡宮23号(外側・前期), 27号住居址

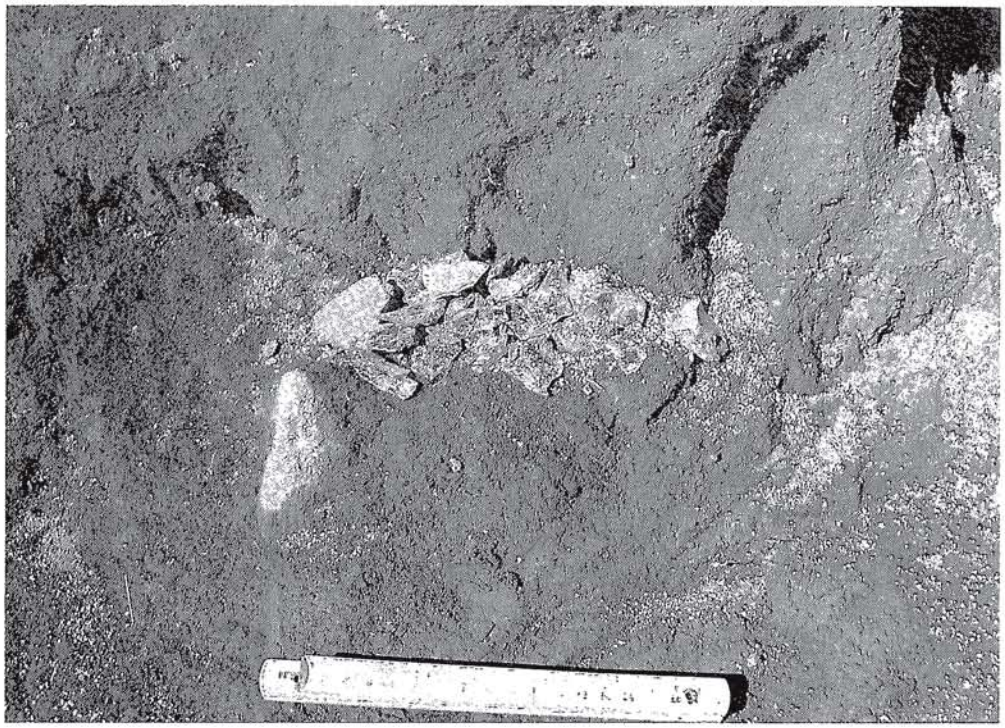


唐渡宮27号住居址

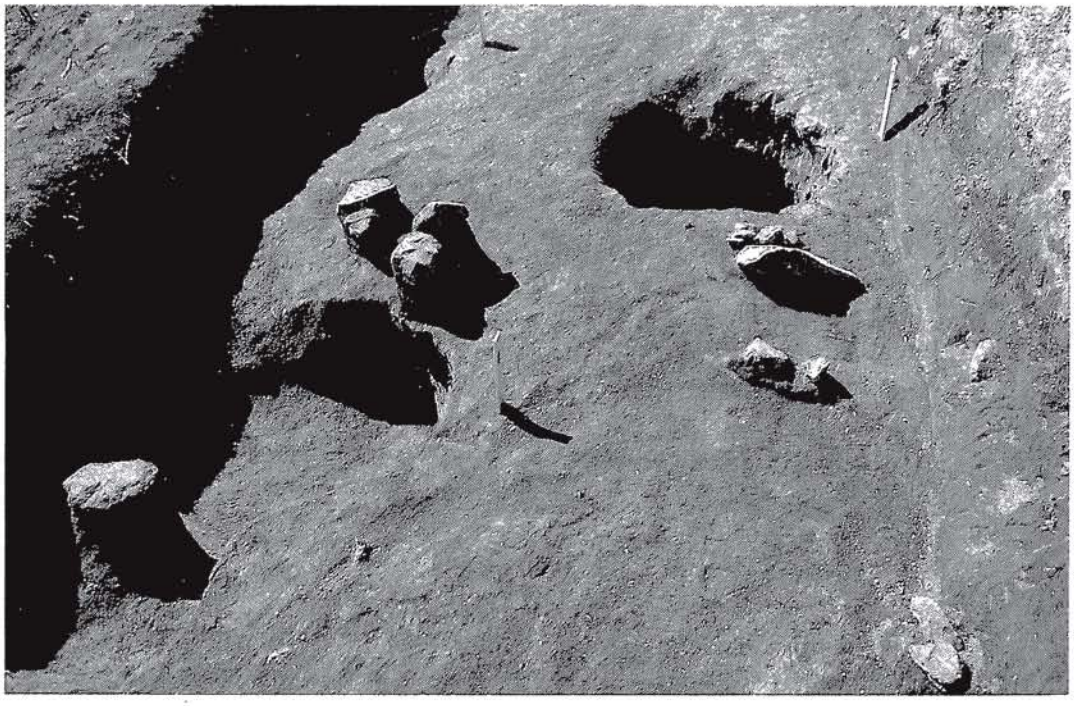
27号住居炉址



唐渡宮27号住居址 （復元）



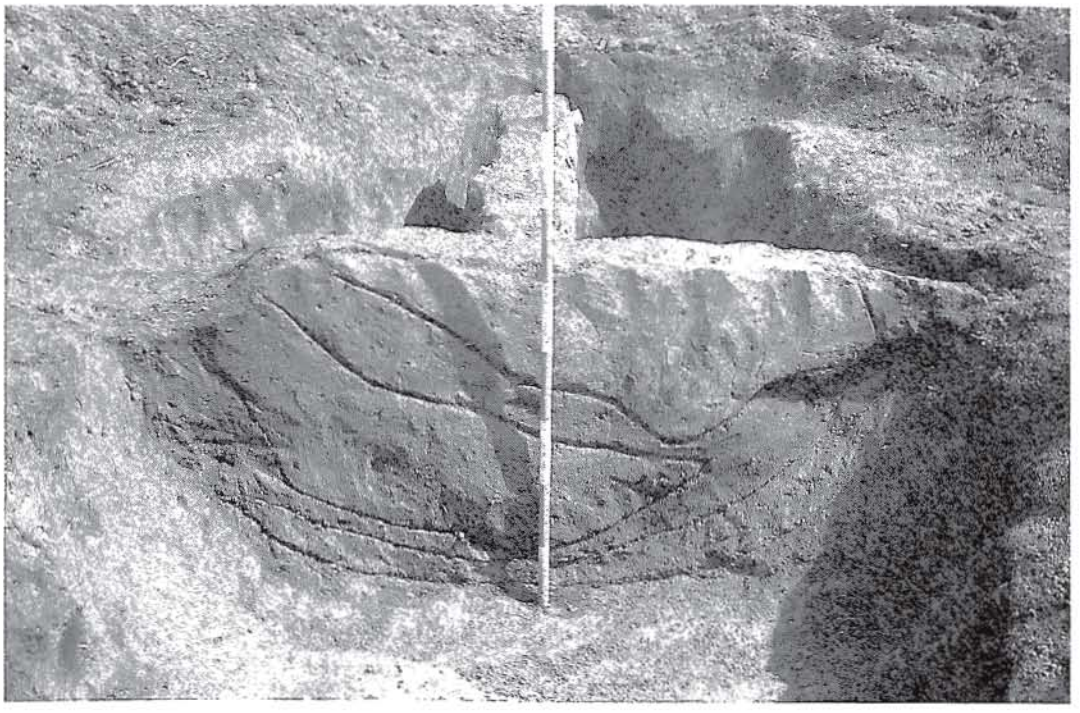
27号址　黒曜石剥片の一括出土状態



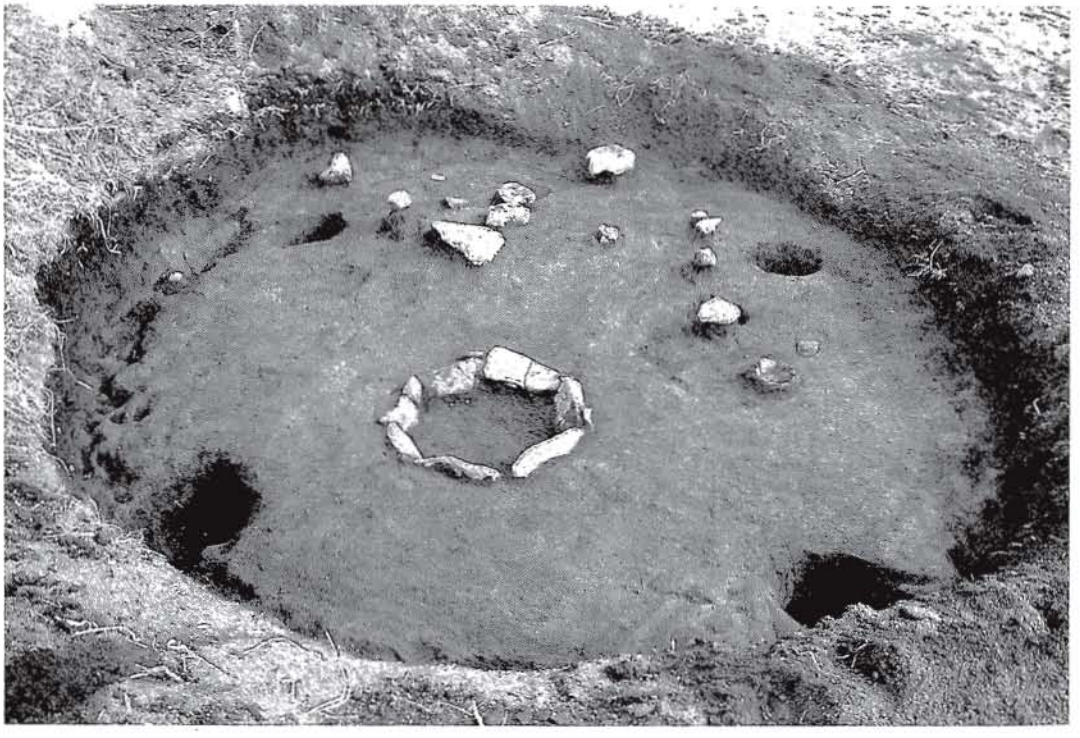
10・11，12号小竪穴

唐渡宮18号住居址

性格未詳の遺構

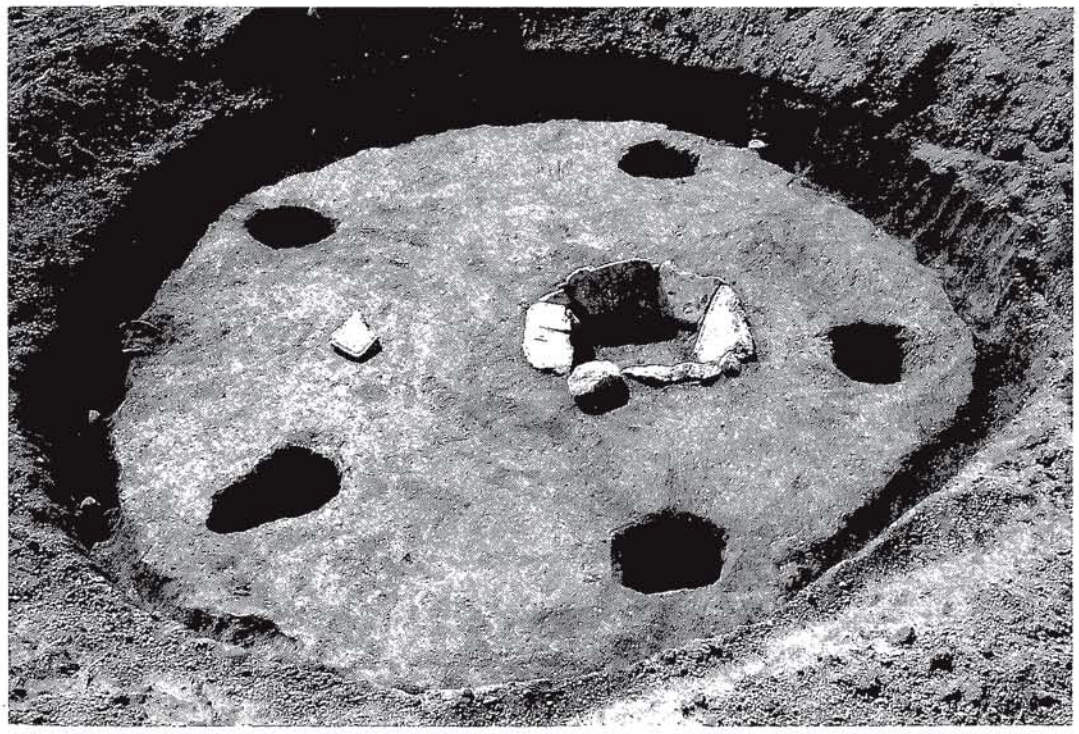


浮島状にロームを抱く竪穴

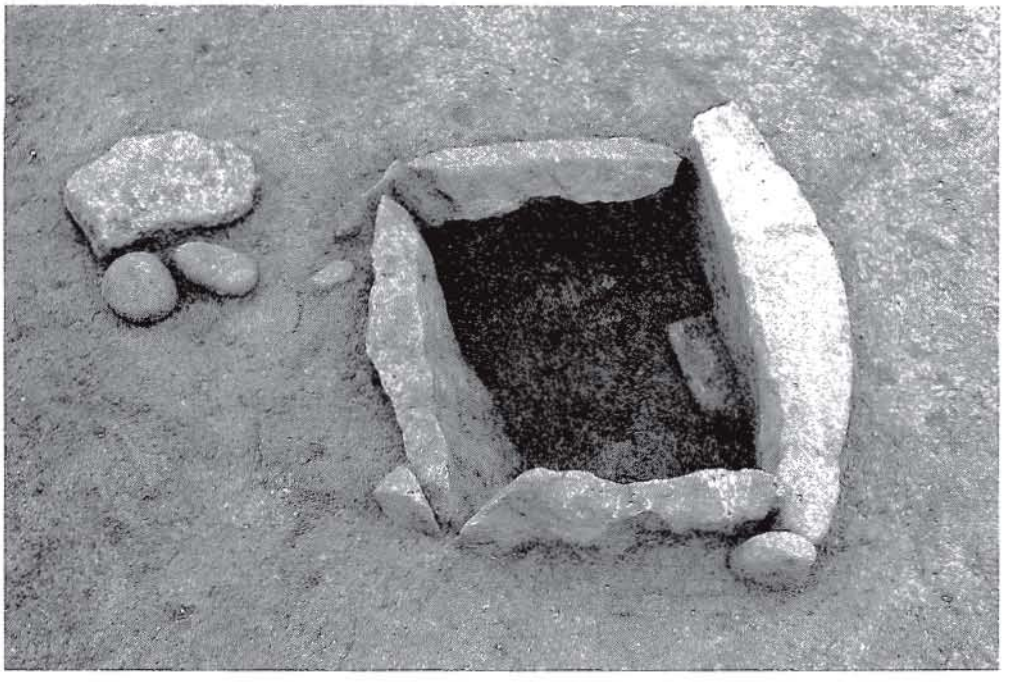


唐渡宮20号住居址

唐渡宮21号住居址　遺物集積状態



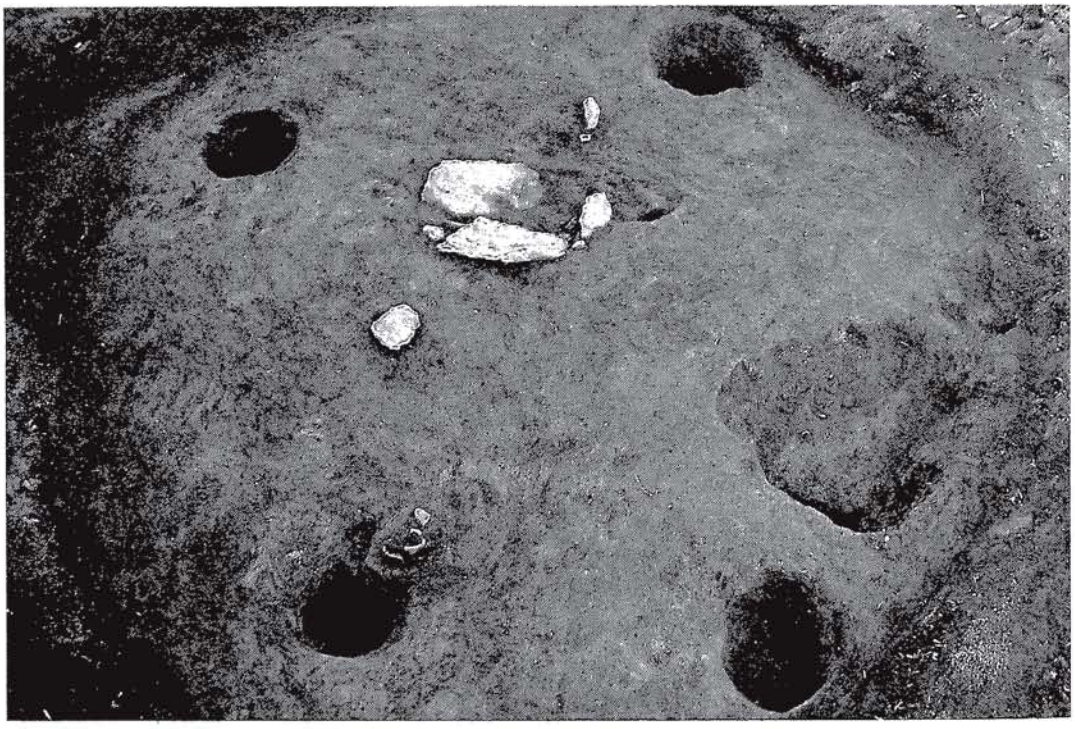
唐渡宮21号住居址



居平 9 号住居址

居平10～14号住居址

居平10～12号住居址



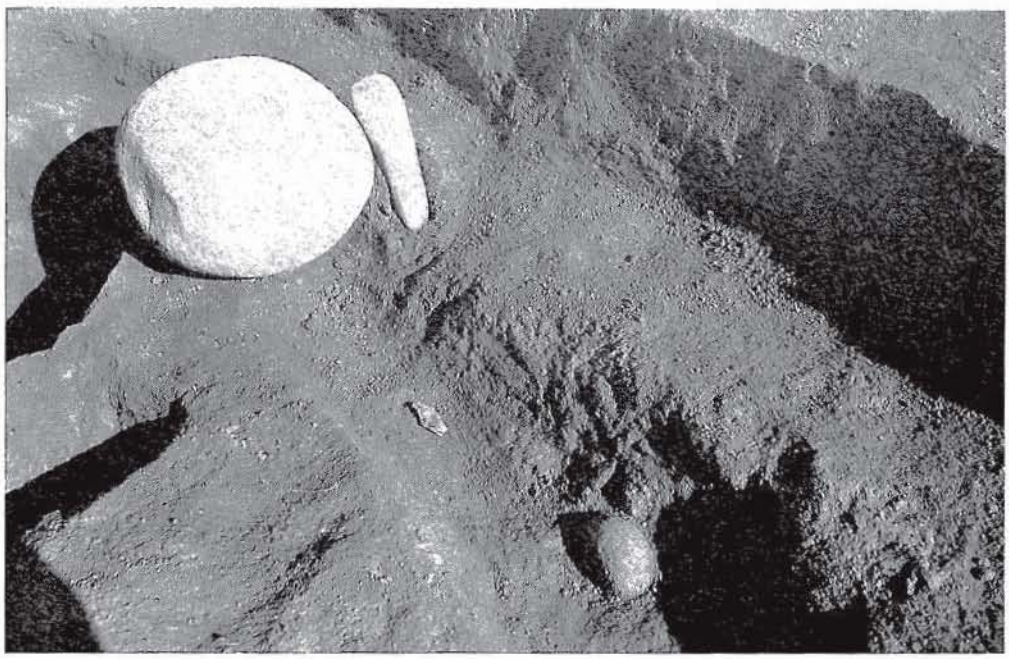
居平10号住居址

居平12号住居址

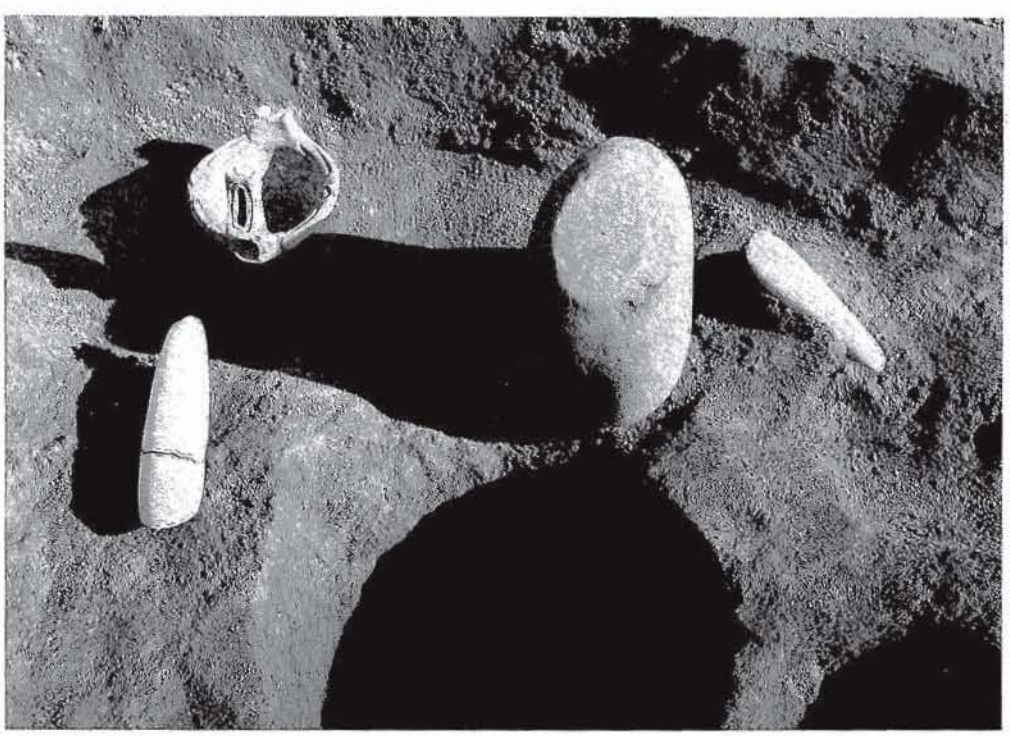
居平11号住居址

居平13号住居址および4，5号小竪穴

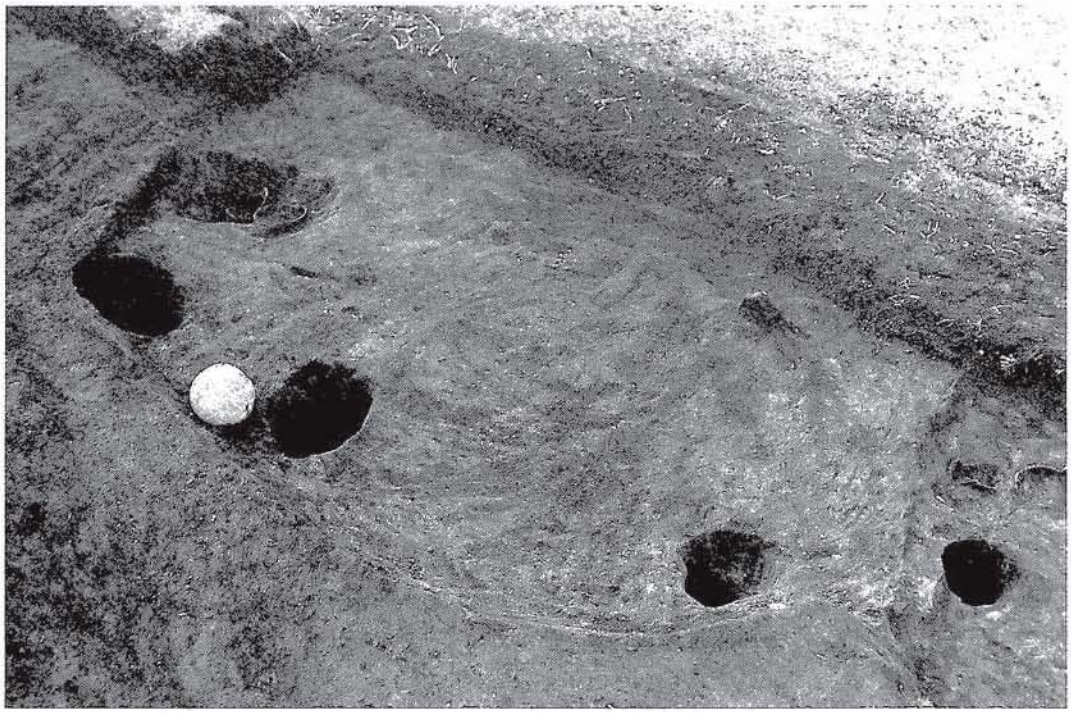
13号址遺物出土状態



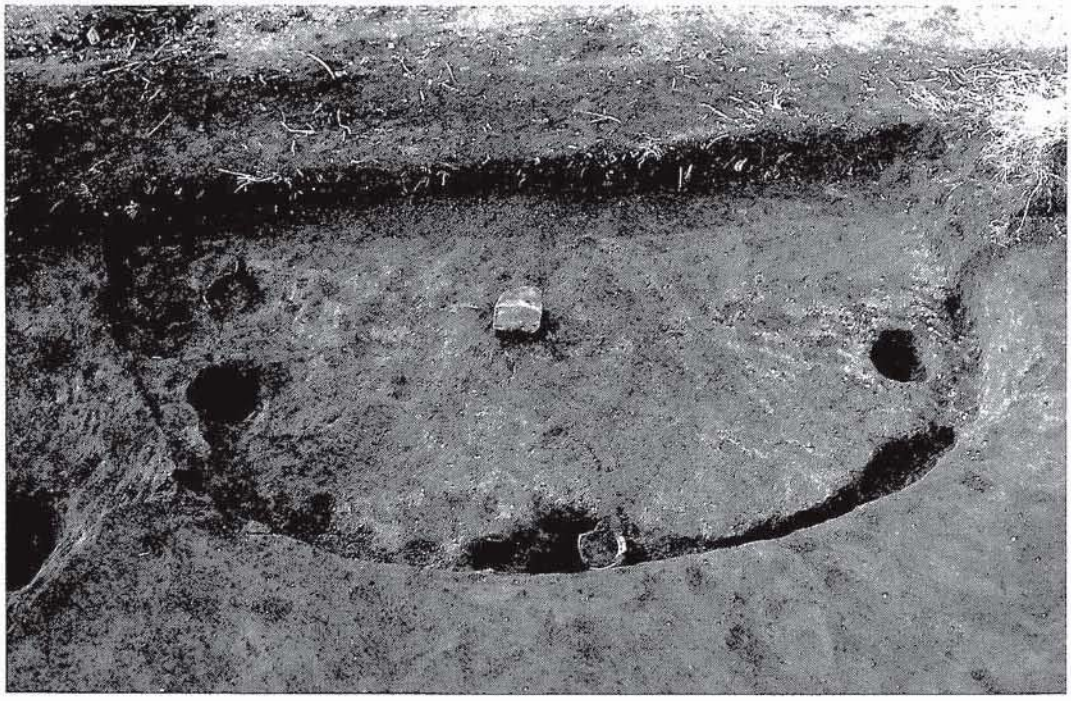
13号址遺物出土状態



13号址遺物出土状態の復元

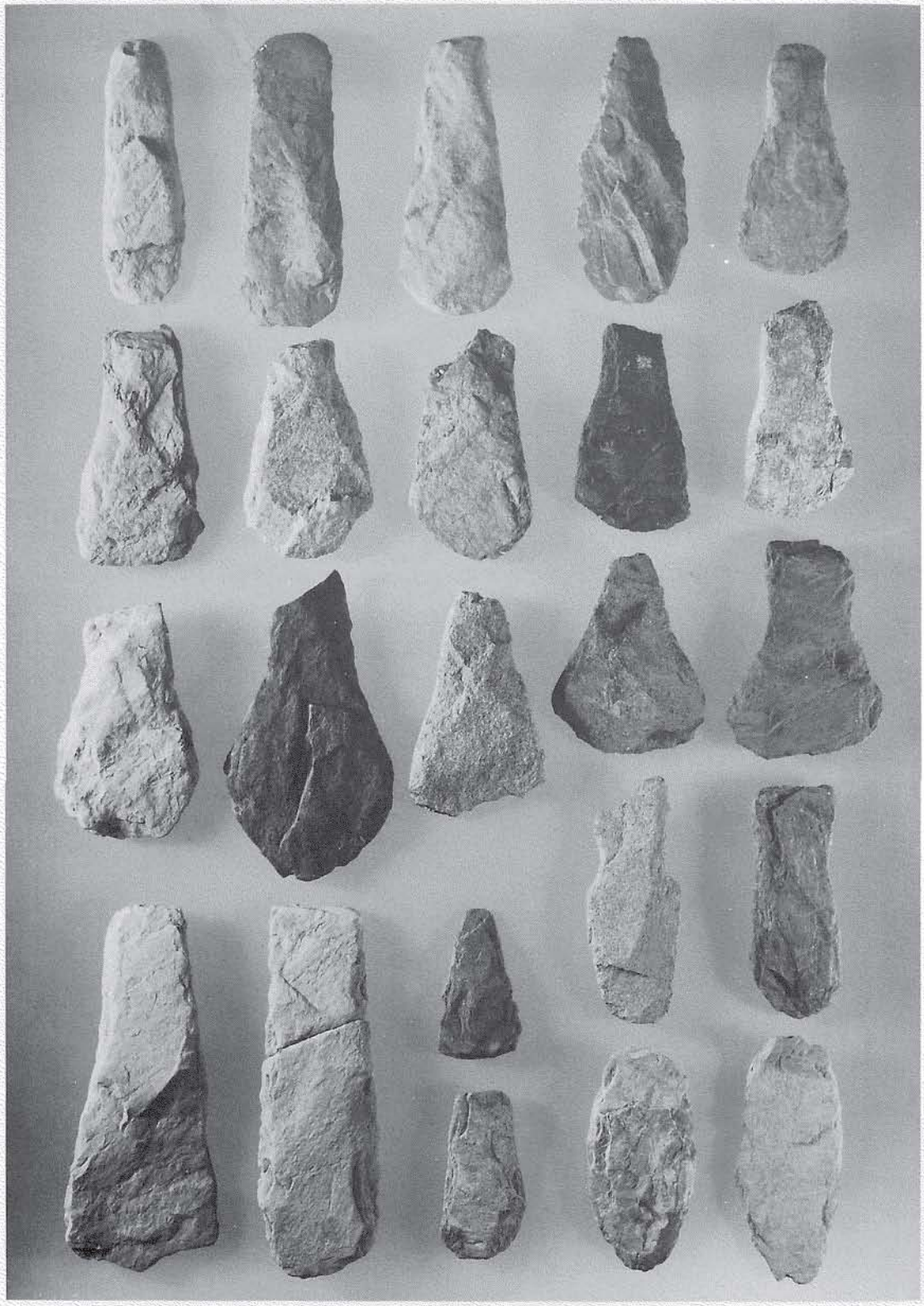


居平13号住居址

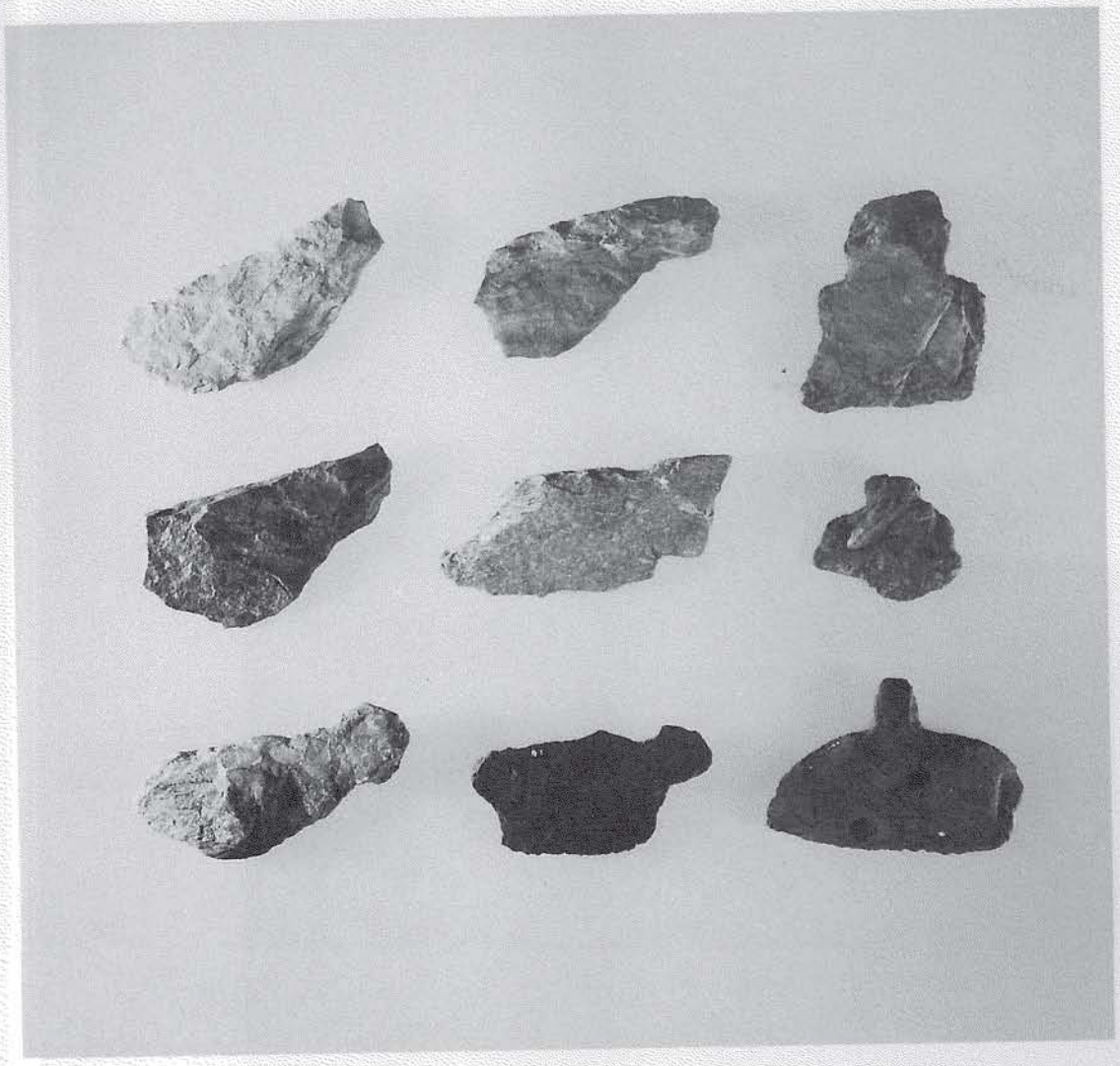


居平14号住居址

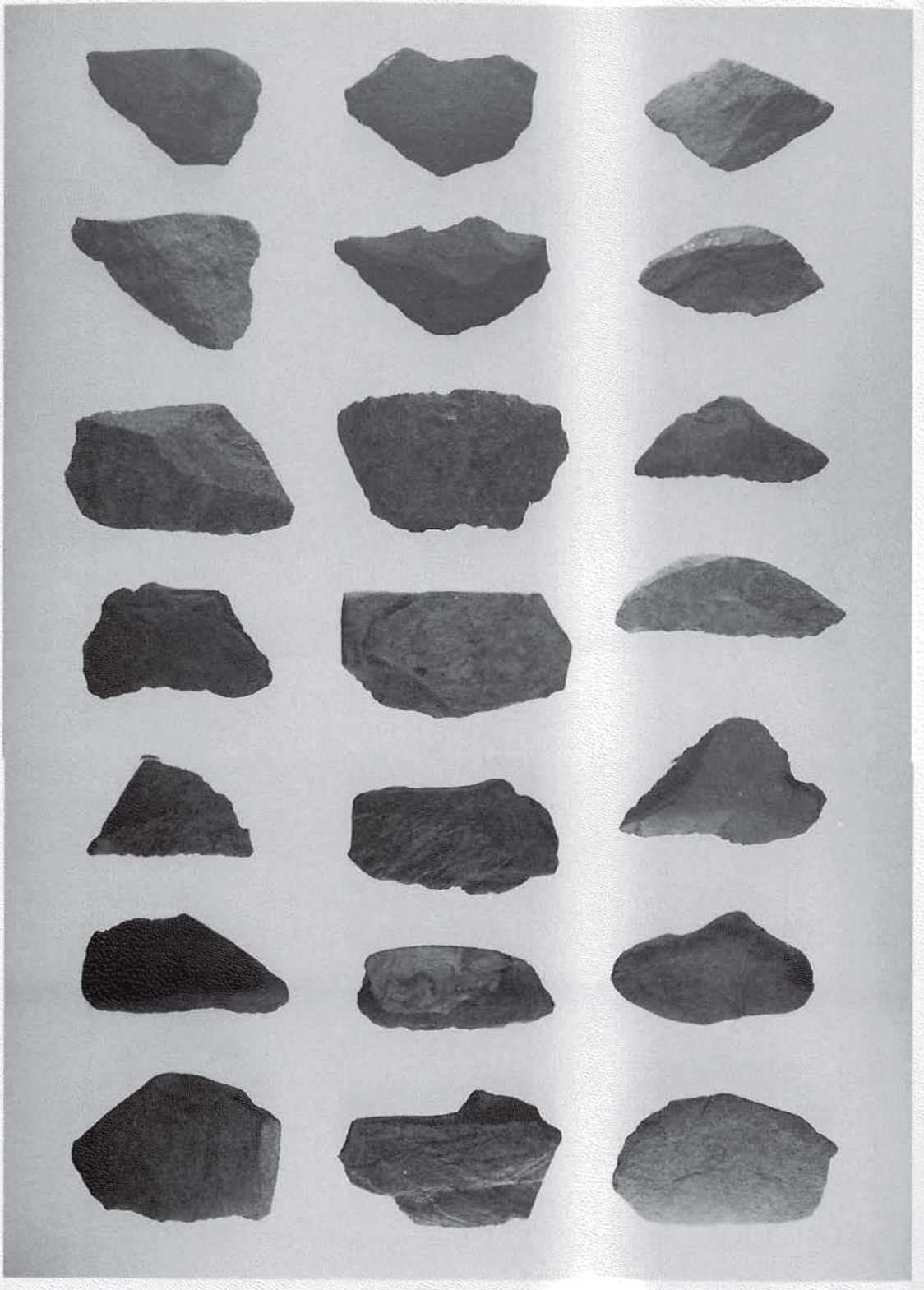
13 号 址 埋 甕



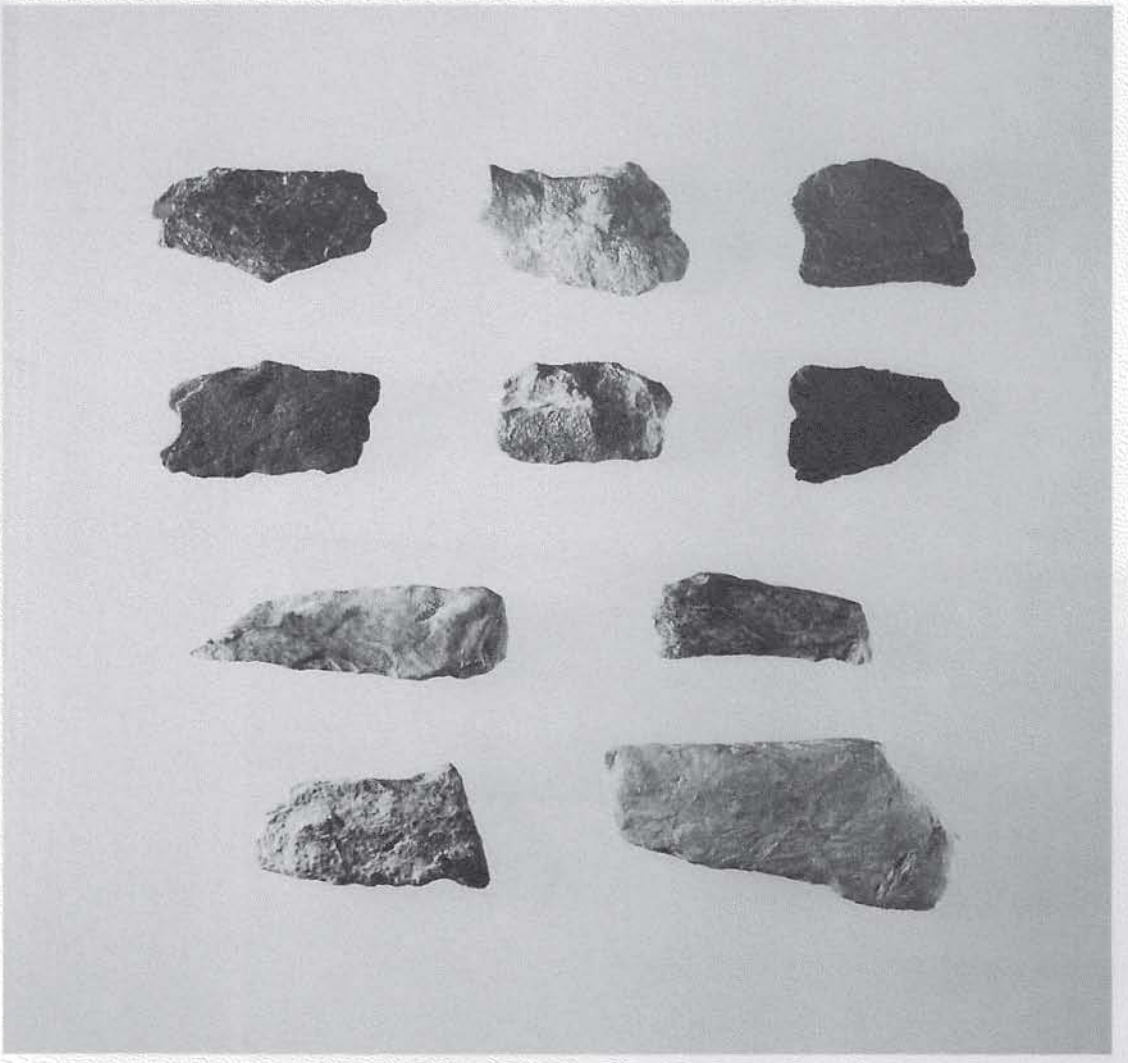
石　　鏃　（右下２例は石鋤　約⅓大）



靴形鍬と有肩刃広鍬 （約⅓大）

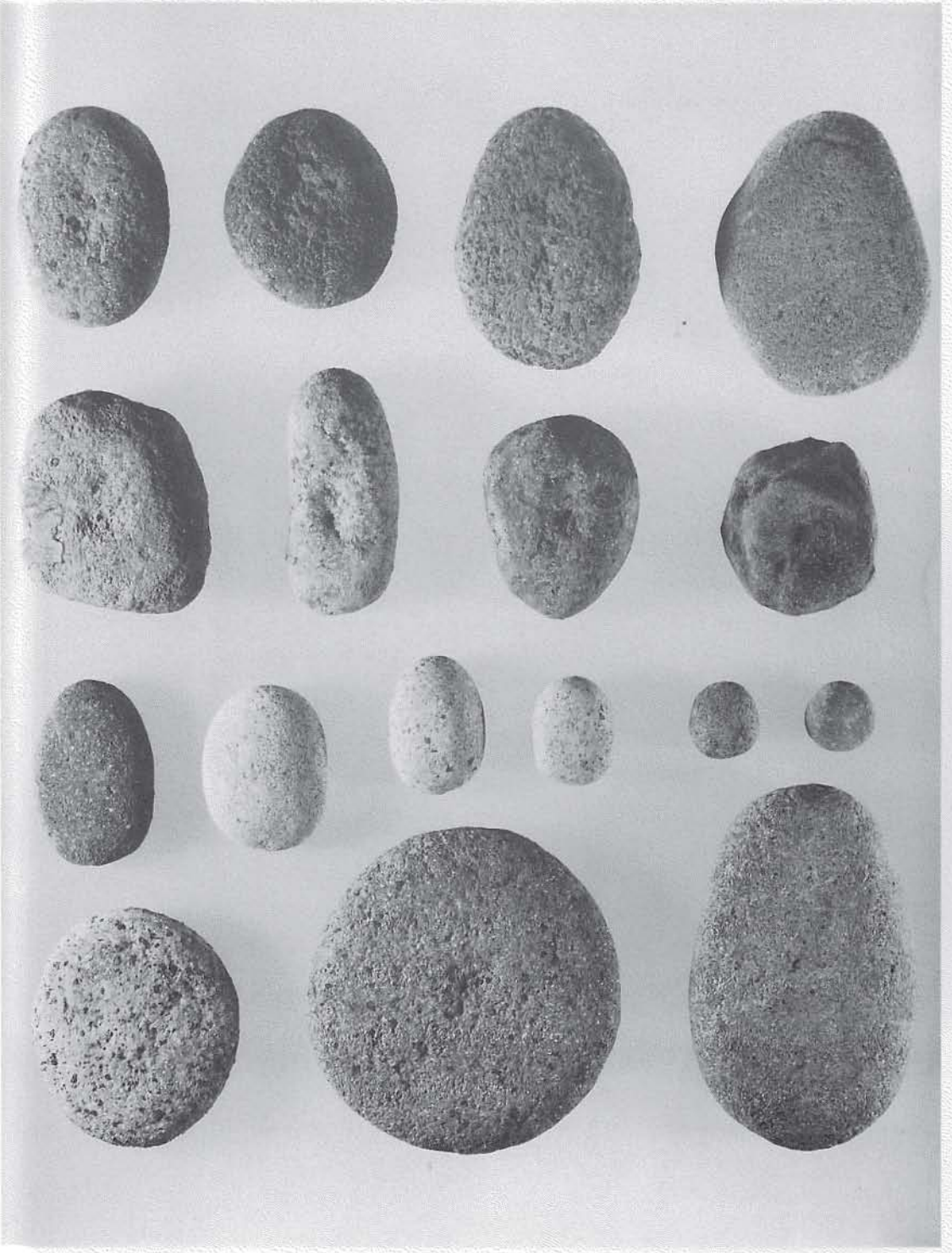


石　庖　丁　(約⅓大)

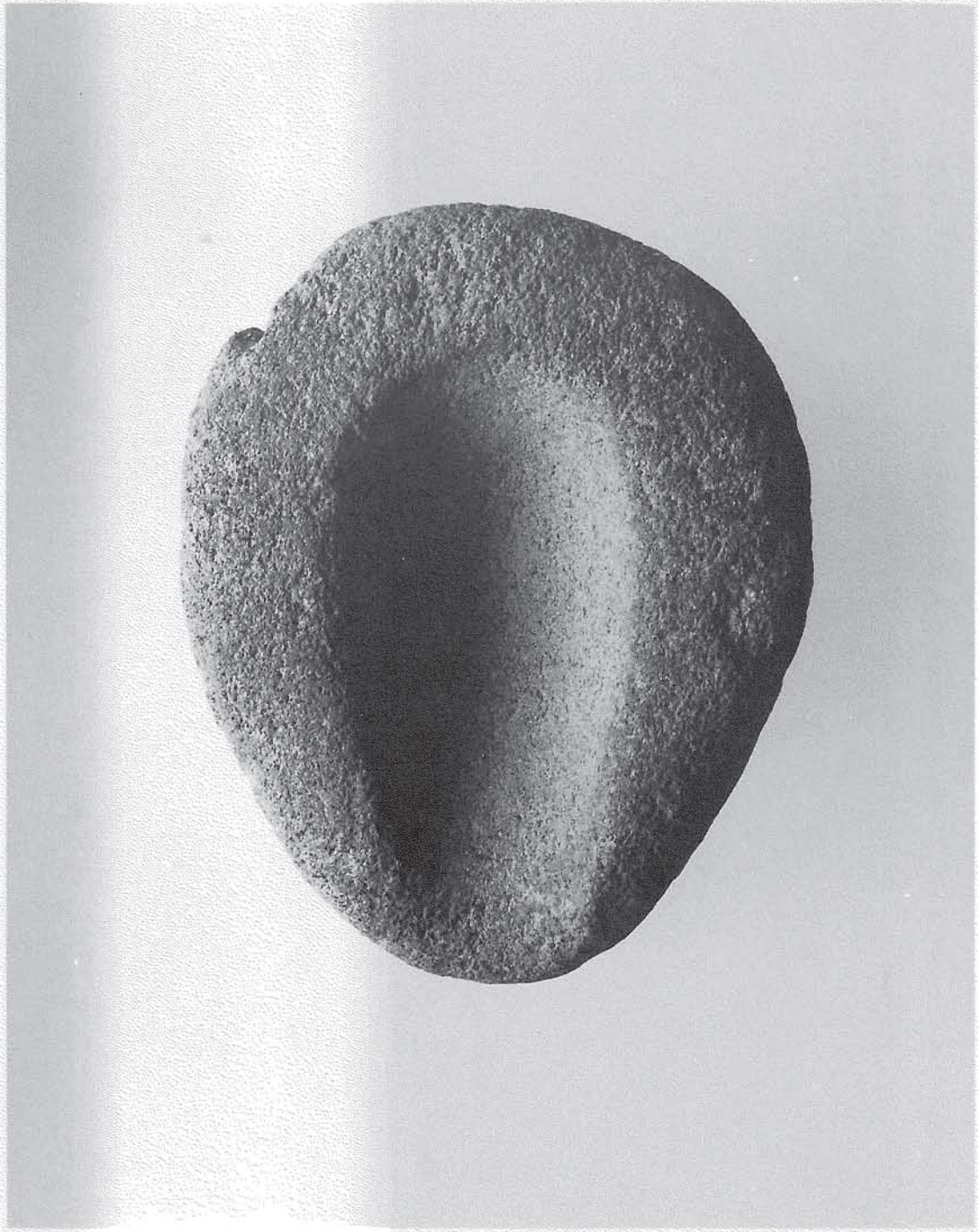


側端抉入石庖丁と石鎌・石鉈 （約⅓大）

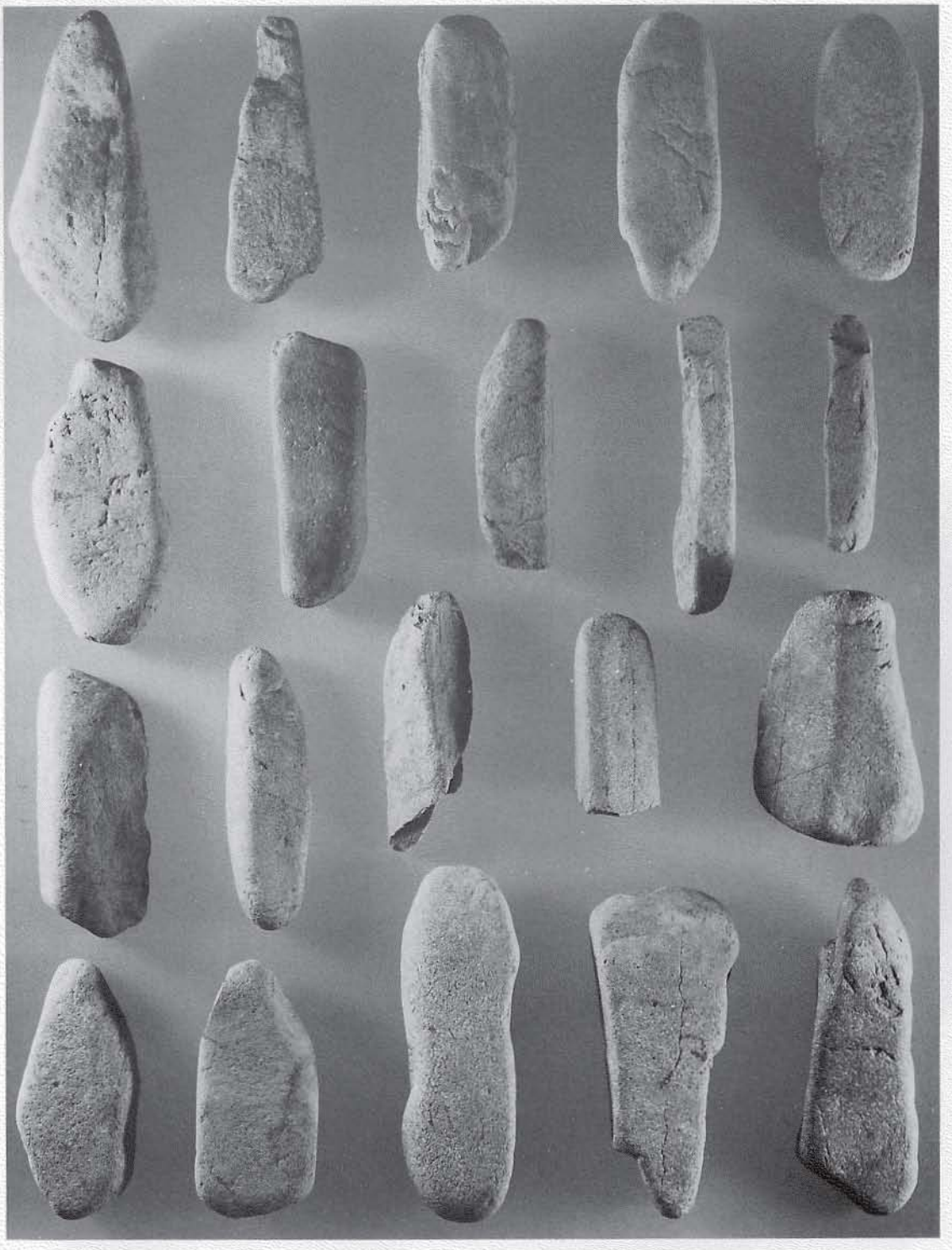
磨　り　石　(約⅓大)



凹石・粗形凹石と石団子・石餅　(約⅓大)



石　う　す　（約⅓大　向原）

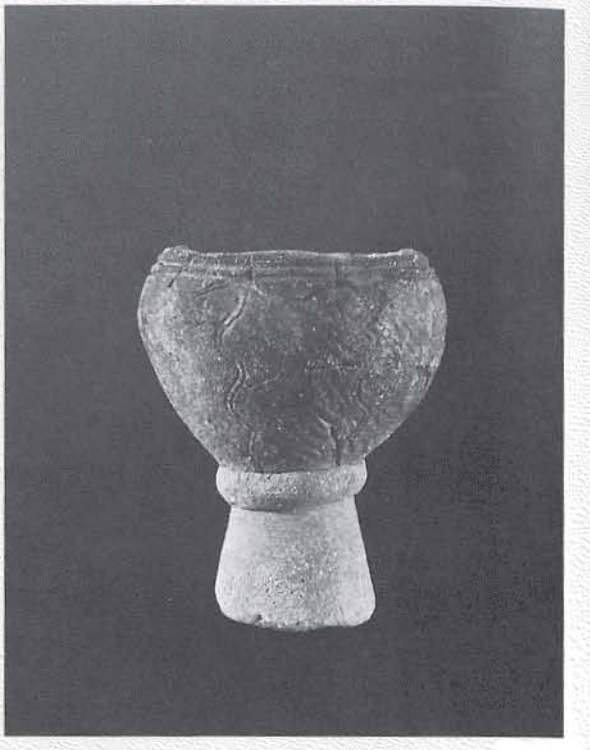


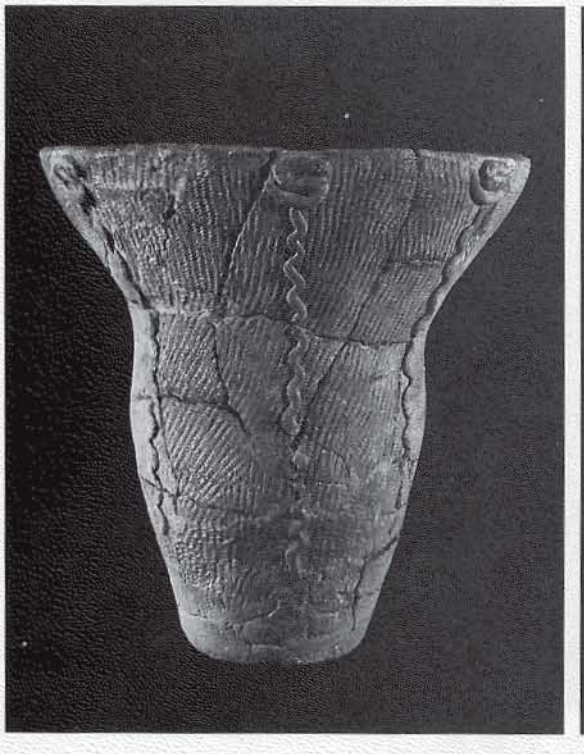
礫 石 器 (約⅓大)

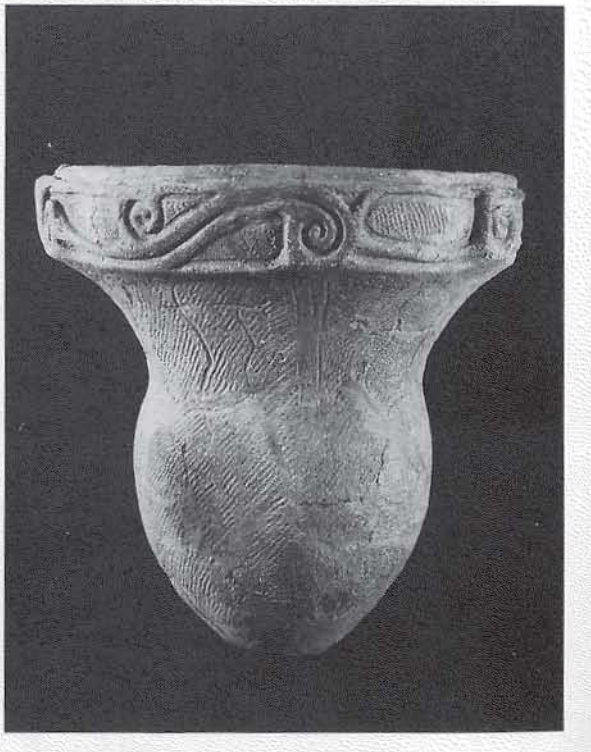
上段より　浅い打痕凹みを有すもの，先端を使ったもの，
稜を使ったもの，特に使用痕のみられないもの

渦巻文深鉢　唐渡宮

X字状把手付大深鉢　　向　原





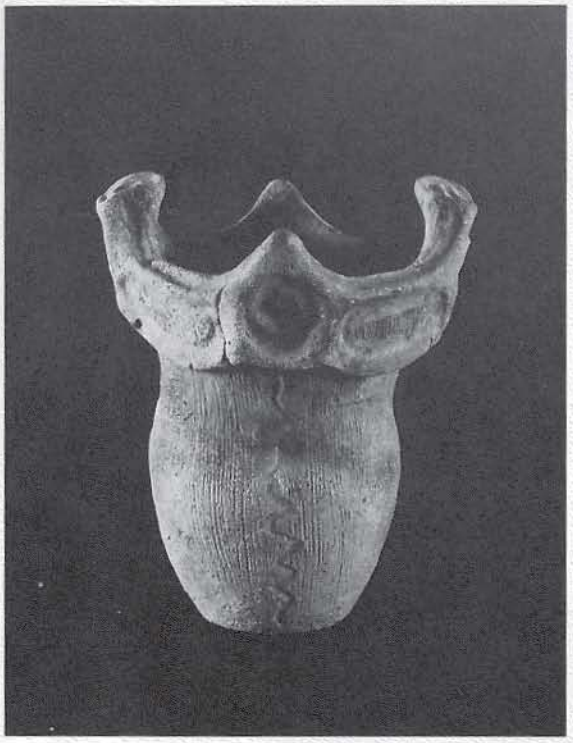


重弧文深鉢　向原

縄文地深鉢　向原

台付鉢（口縁部を欠く）向原

加曽利E系深鉢　坂上

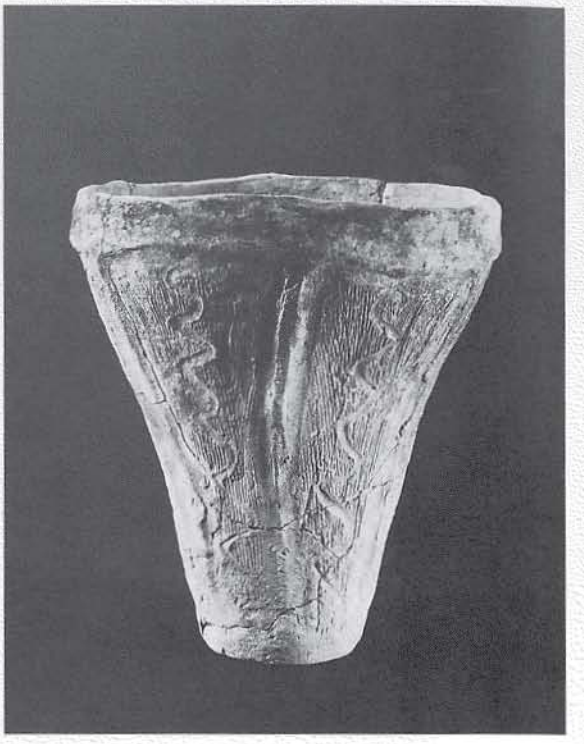


肥厚帯口縁深鉢（底を欠く） 唐渡宮

肥厚帯口縁系深鉢 唐渡宮

横帯文口縁深鉢 唐渡宮

櫛描流水文深鉢 唐渡宮



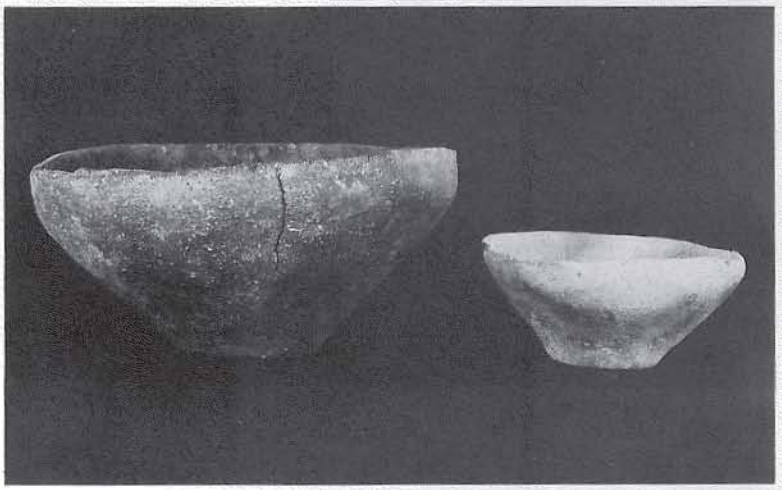
条線文地深鉢　居　平

条線文地深鉢　居　平

条線文地深鉢　居　平

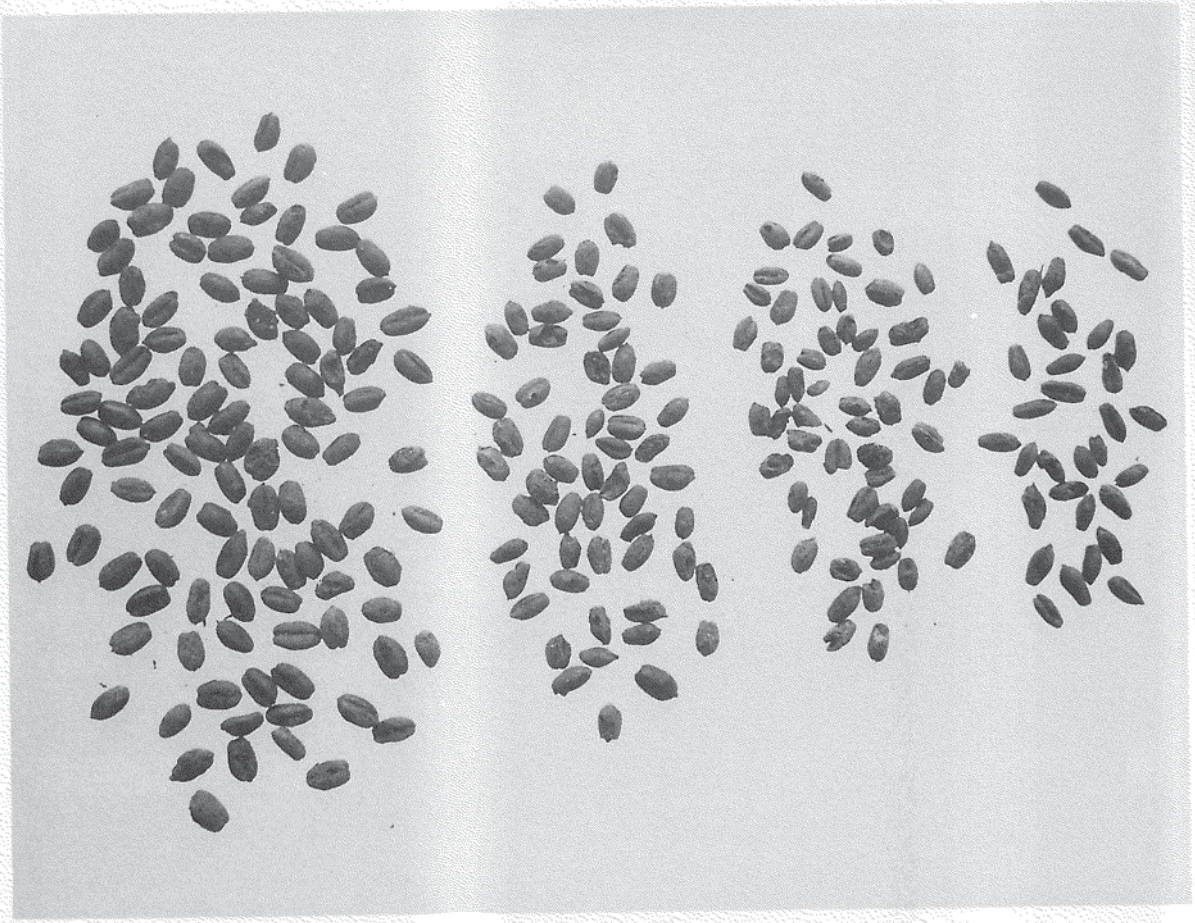
笹杢目文地深鉢　向　原

両耳壺　唐渡宮



浅鉢（口縁を欠く）・椀鉢
坂上・唐渡宮

両耳甕（口縁を欠く）
居平



炭化した麦粒（実大）　唐渡宮遺跡出土

唐　渡　宮

八ヶ岳南麓における曽利文化期の遺跡群発掘報告

1988年　9月

発　行　　富士見町教育委員会

印　刷　　ミ ウ ラ 企 画 書 籍
岡谷市御倉町2の21　TEL 0266-22-4892

# 「唐　渡　宮」

## 付　　図

第 3 図　坂　上　遺　跡　(1:1000)

第 4 図　坂上遺跡　遺構配置全体図　(1:200)

第 35 図　向　原　遺　跡　(1:1000)

第 36 図　向原遺跡　遺構配置全体図　(1:200)

第 78 図　唐 渡 宮 遺 跡　(1:1000)

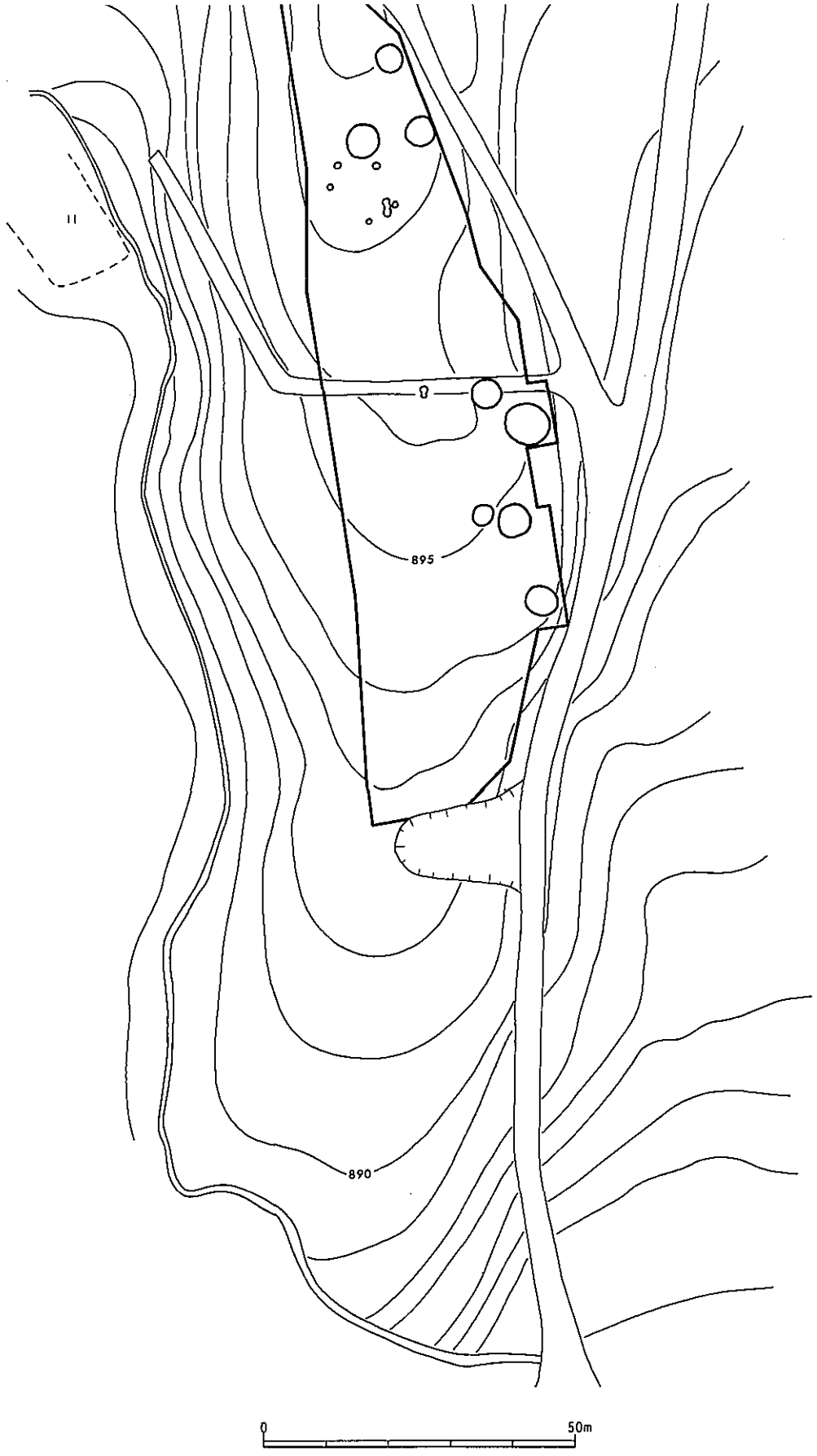
第 79 図　唐渡宮遺跡　遺構配置全体図―その 1　(1:200)

第 80 図　唐渡宮遺跡　遺構配置全体図―その 2　(1:200)

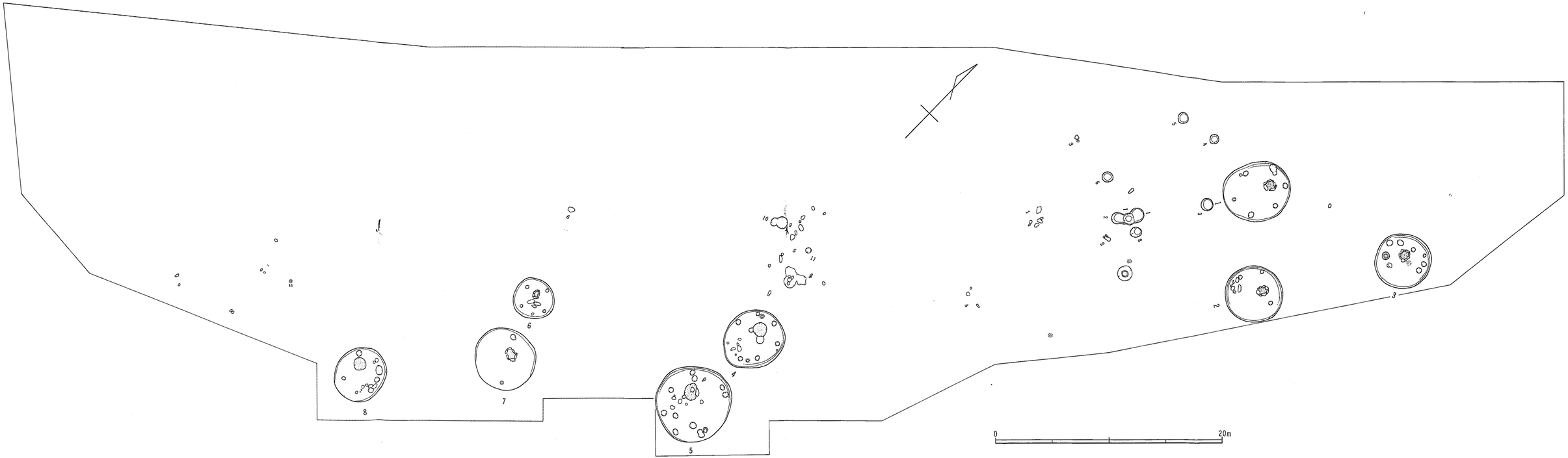
第 81 図　唐渡宮遺跡　遺構配置全体図―その 3　(1:200)

第160図　居　平　遺　跡　(1:1000)

第161図　居平遺跡　遺構配置全体図　(1:200)

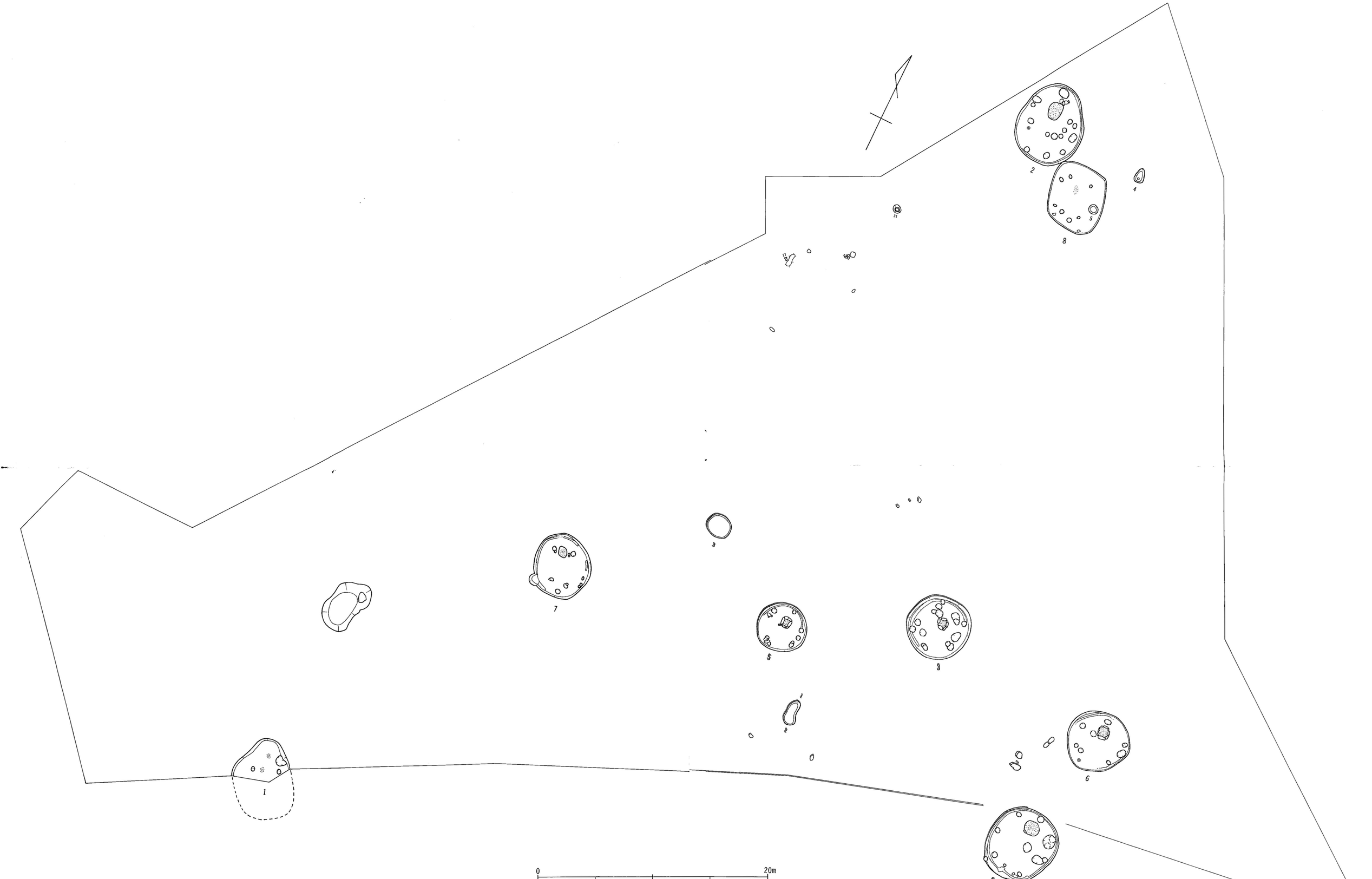



第3図　坂　上　遺　跡　（1：1000）

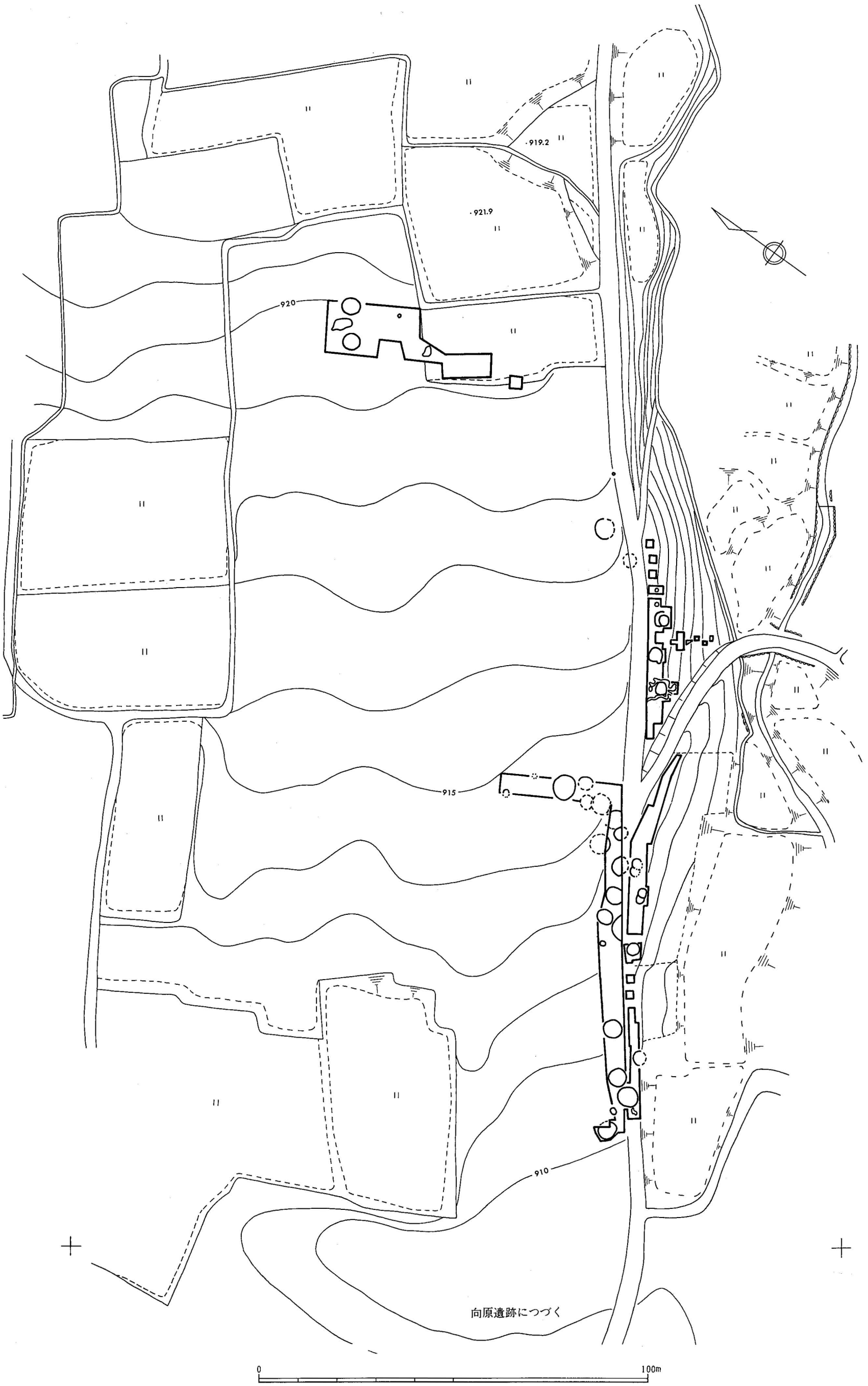



第４図　坂上遺跡　遺構配置全体図　（1：200）

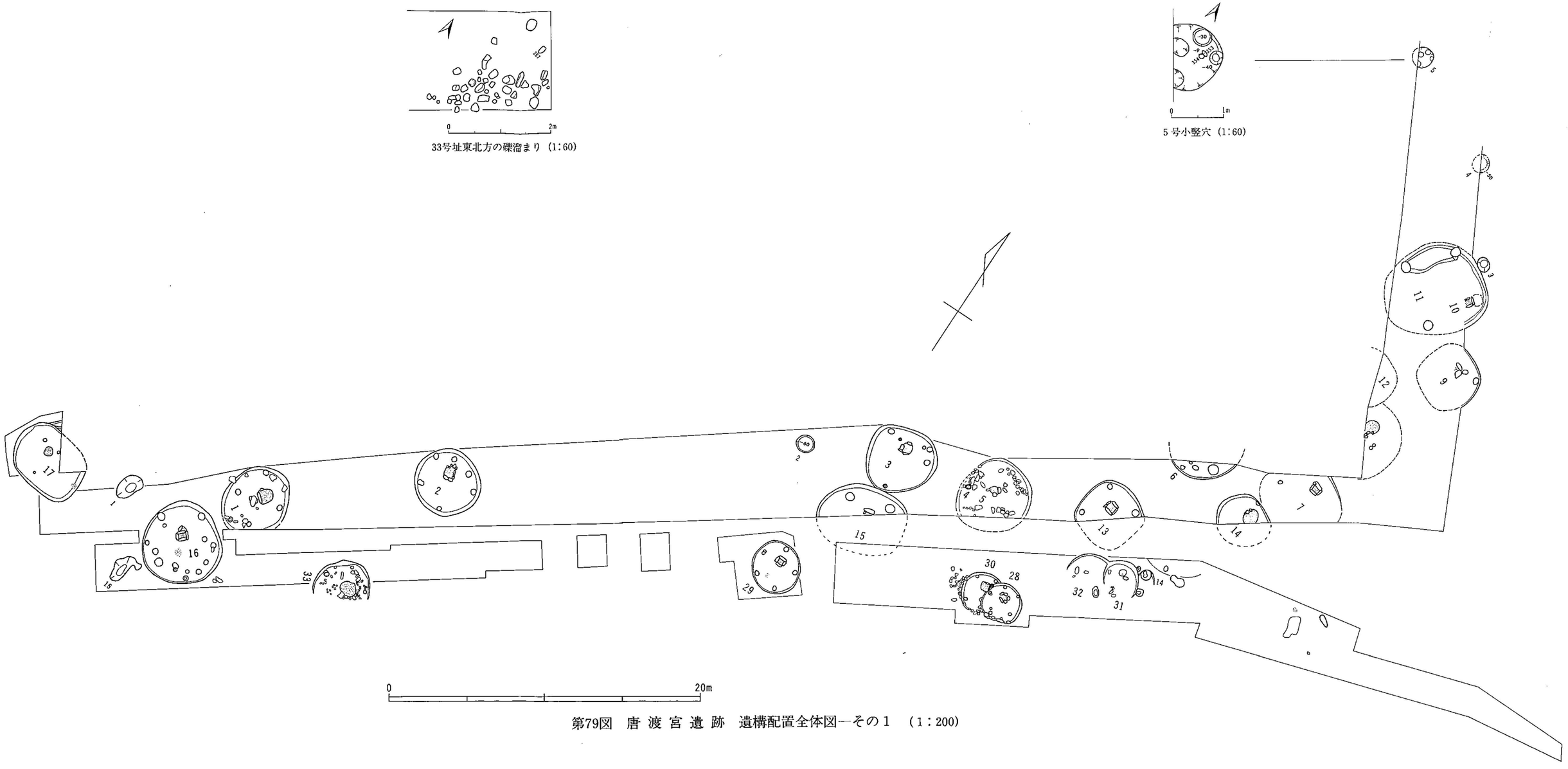
第35図　向　原　遺　跡　（1：1000）




第36図　向原遺跡　遺構配置全体図　（1：200）




第78図　唐 渡 宮 遺 跡　（1：1000）




第79図　唐 渡 宮 遺 跡　遺構配置全体図―その１　（1：200）

第80図―その2につづく